

2016 年度名古屋大学大学院文学研究科
学位(課程博士)申請論文

格交替を許容する日本語感情動詞の格体制についての研究

名古屋大学大学院文学研究科
人文学専攻日本語学専門

松野美海

平成 28 年 12 月

目次

第1章 序.....	1
1. ヲ／ニ格交替現象	1
2. 考察対象となる「感情動詞」	3
第2章 現代語における感情動詞の格体制.....	5
1. 先行研究.....	5
1.1. 感情動詞全体に関する問題に主眼を置く先行研究.....	5
1.2. 格交替、格表示の変遷に主眼を置く先行研究	6
1.2.1. 感情動詞以外の動詞に関する研究.....	6
1.2.2. 感情動詞に関する研究.....	7
2. 格体制とヲ／ニ格感情動詞の諸相	9
2.1. 感情動詞の格体制.....	9
2.2. 感情動詞の分類	10
2.3. 受身化、使役化	13
2.3.1. ヲ格感情動詞	13
2.3.2. ニ格感情動詞・ヲ／ニ格感情動詞.....	15
2.4. ヲ／ニ格名詞(句)の出現率	19
3. 第2章のまとめ	22
第3章 感情動詞の時間的性質.....	27
1. アスペクトテスト	27
1.1. テスト設定.....	27
1.2. ヲ格感情動詞・ニ格感情動詞のアスペクト.....	28
1.3. ヲ／ニ格感情動詞のアスペクト	30
2. タ形連体修飾.....	31
2.1. ヲ格感情動詞の時制的用法と形容詞的用法.....	34
2.2. ニ格感情動詞、ヲ／ニ格感情動詞	36
2.3. タ形修飾の評価的用法	38
2.4. 2節のまとめ	40
3. 名詞(句)の時間的性質	40
4. 第3章のまとめ	44
第4章 現代語「喜ぶ」の諸相.....	45
1. 先行研究と問題の所在	45
2. ヨロコブのアスペクト的特徴及び主体性	48
2.1. アスペクト的特徴.....	48
2.2. 主体性及び意図性.....	51
3. 実例における調査結果	52

3.1.	調査の概要.....	52
3.2.	ヲ／ニ格名詞(句)のデキゴト性.....	53
3.2.1.	節の取りやすさ.....	53
3.2.2.	ヲ／ニ格節の時間的意味.....	54
3.2.3.	具体名詞・抽象名詞.....	55
4.	考察及びまとめ.....	56
4.1.	考察.....	56
4.2.	まとめ及び残された課題.....	57
第5章	「頼る」の諸相.....	61
1.	現代語タヨル.....	61
1.1.	問題点.....	61
1.2.	調査対象.....	61
1.3.	構文環境の特徴.....	62
1.3.1.	中止形での出現様相.....	62
1.3.2.	観察結果のまとめ.....	66
1.4.	ヲ／ニ格名詞(句)の意味分布.....	67
1.4.1.	ヒト名詞類.....	67
1.4.2.	非ヒト名詞.....	68
1.5.	考察及びまとめ.....	69
2.	中世以降の変遷.....	72
2.1.	中世のタヨル.....	72
2.2.	近世のタヨル.....	73
2.3.	近代のタヨル.....	76
2.4.	考察.....	82
3.	タヨルの変遷、ヲ／ニ格選択のまとめ.....	83
第6章	「恐(れ)る」の通時的変遷.....	87
1.	はじめに.....	87
2.	先行研究と問題の所在.....	87
3.	中世和漢混交文のオソル.....	88
3.1.	中世和漢混交文におけるオソルの概観.....	88
3.2.	ヲ／ニ格名詞の意味特性.....	90
3.2.1.	節をなす場合.....	90
3.2.2.	確定性.....	92
3.2.3.	節以外の名詞の場合.....	93
3.2.4.	共通する名詞.....	95
3.3.	オソロシの様相.....	97
3.3.1.	『平家物語』のオソロシ.....	98

3.3.2. 『太平記』のオソロシ	99
3.3.3. 『曾我物語』のオソロシ	99
3.3.4. オソルとオソロシの対応関係	100
4. 中古から南北朝期の訓点資料	101
5. 近世以降のオソ(レ)ル	103
5.1. 近世の様相	104
5.2. 近現代の様相	105
6. おわりに	106
第7章 結び	109
1. 結論	109
1.1. 第6章までのまとめ	109
1.2. フ格、ニ格の意味機能	110
2. 「懂れる」から見る課題	112
3. 今後の課題	114
参考文献	117

第1章 序

現代日本語には「土産を喜ぶ」「土産に喜ぶ」のように、補語を表示する格助詞ヲとニの交替を許容する動詞が存在する。本研究は、このように二様の格体制をもつ動詞について、意味的・構文的側面から、ヲ格をとる場合とニ格をとる場合との差異を明らかにするとともに、ヲ格、ニ格の機能を探ろうとするものである。

1. ヲ／ニ格交替現象

一般的に格体制は動詞ごとに固定的であり、普通、ヲとニは交替させられない(「花子が太郎 {を／*に} 殴る」「犬が太郎 {に／*を} かみつく」¹⁾)が、ヲ、ニの交替を許容する動詞が存在する。このような動詞として「髪 {を／に} 触る」や「宿 {を／に} あたる」が挙げられるが、多くはないものと考えられてきたようだ²⁾。しかしこのような動詞は先述の「喜ぶ」を含め、感情・心理的な意味を表す語(以下、感情動詞)の中にいくつかまとまって見られる。感情動詞は、感情の向かう先(指向先)または誘因をヲ格表示する動詞(以下、ヲ格感情動詞)かニ格表示する動詞(以下、ニ格感情動詞)が大半だが、これらと共にヲ格もニ格も許容する動詞(以下、ヲ／ニ格感情動詞)が存在する。

従来、現代語のヲ／ニ格感情動詞に関して、存在は指摘されていたが、少数であるとの認識からか、詳細な検討は少ない。先行研究ではほぼ「喜ぶ」のみが検討され、ほかに「悩む」「悲しむ」が挙げられるものの、ヲ／ニ格感情動詞にはどのような動詞があるかや、それぞれの格形式をとる場合の差異は明らかになっていない。

その中で、山川(2004)と清水(2007)は比較的多くのヲ／ニ格感情動詞を挙げる。ただし、両者ともヲ／ニ格感情動詞の振舞いに言及はするものの、ヲ格感情動詞とニ格感情動詞の特徴と照らし合わせるといことが主な目的であり、ヲ／ニ格感情動詞について全体的な特徴や振る舞いを見るものではない。

ヲ／ニ格の一方のみをとる感情動詞については、寺村(1982)が一時的な感情とニ格、能動的な感情とヲ格の関係を、加えて益岡・田窪(1987)が持続的な感情とヲ格の関係を指摘しており、格形式の違いによってある程度の意味的差異があると考えられる。しかし格交替を許容する動詞については、益岡・田窪(1987)が語例を挙げてその存在に言及するに留まり、他の論考でも(本論文で言う)ヲ格感情動詞とニ格感情動詞の違いが中心に論じられることが多い³⁾。存在の指摘はあるものの、看過されてきた格交替を許す感情動詞が、それぞれの格形式をとる際の用法や条件に関して検討の必要がある。

また感情動詞の多くは能動性の判断が困難であり、持続性／一時性の差が明確でないものもある。感情動詞は第2・3章で示すように一様ではなく、文法的特徴などに関して異な

¹ 非文に* を、許容度が低い文に? もしくは??、非文ではないが当該文脈では使用できない、もしくは当該の意味にならない文に#を付す。

² 「東京 {へ／に} 行く」のへとニが(一定の意味を表す場合において)交替可能であるのと同じようには捉えられていないように思われる。

³ 杉岡(1992)、三原(2000)、浅山(2000)等。

る性質をもつ語が混在する。またヲ／ニ格感情動詞の中には、ヲ格もしくはニ格をとる例に偏る語、偏りが少ない語がある。これらのことから、事例研究を積み上げることで、得られる知見があると考え⁴。

「喜ぶ」については BANDO(1996)、佐藤(1997)等で考察されており、ヲ格名詞は対象、ニ格名詞は原因または対象の役割を担うとされる。しかし例えば「懂れる」や(1)の「頼る」のようにヲ格が対象、ニ格が原因とは捉え難い語がある⁵。

(1) 太郎はいつも親 {を／に} 頼っている⁶。

一方で、通時的に見て、現代語とは異なる格体制であった語に言及する先行研究は数多い(山田 1914、松下 1928、湯澤 1936・1981 など)。現代語の感情動詞が共時態において格体制にバリエーションをもつということに加え、格表示の変遷も問題となるところである。変遷の過程を追うことが、現代語の様相への説明に寄与する可能性もある。

二様の格体制をもつことに関する問題は格助詞ヲとニの問題でもあり、動詞の問題でもある。ヲ、ニの機能については多くの研究の蓄積があるが、ヲ格をとる場合とニ格をとる場合の差異、格交替を許容しない動詞との違い、ヲ、ニの機能とどのように関係するかといった相互に絡み合う格選択要因の問題が十分に解明されていない。これらの解明には、後述するようにそれぞれの動詞の性質が一括して扱うには大きく異なることから、まずは事例研究を積み重ねることが不可欠である。

本研究では、現代語における共時態の考察と通時的変遷の考察を行なう。格表示の選択要因あるいは変遷に関して、歴史的共時態、通時的変遷の考察を行なった先行研究は存在するが(第2章参照)、いずれも現代語との対照、あるいは連続を意識したものではない。本論文で言う感情動詞というまとまりで記述されたものも、官憲の限り宮地(1979)および工藤(1978)⁷に限られる。格選択の歴史的共時態、通時的変遷の記述が必要であることに加え、前述の通り、その記述が、現代語の様相を理解するための一助になると考える。

ヲ、ニに関する格体制の変遷パターンとして、一方の格形式から他方の格形式へ、一方の格形式のみから両用(ヲ・ニ)へ、両用(ヲ・ニ)から一方の格形式のみへ、という変化があり得る。本研究の出発点は、現代語においてヲ／ニ格両用である感情動詞のため、両用(ヲ・ニ)へ変化した語として「頼る」を取り上げる。一方で格体制に通時的変化がないヲ／ニ格動詞も存在する。このような語として「恐(れ)る」を扱う。

なお、二様の格体制をもつことは、常にヲ、ニを交替させられるということを意味しな

⁴ 今後、感情動詞に限らずヲ／ニ格動詞を扱うことが求められるが、ひとまず、感情を表すという点で共通する一つのグループと見なして、感情動詞の範囲内で考察する。

⁵ ほかに前述の「触る」「(宿を／に)あたる」など。

⁶ 現代語の用例については、括弧内に注記のある例は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ)、または『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』(以下、『新潮』)からの用例、注記がないものは筆者の作例である。

⁷ 工藤(1978)は感情動詞に限らず、広く格体制が変遷した語を扱う。

い。したがって本論文では考察対象をヲ、ニが交替させられる文に限定しない。

本論文の構成は次の通りである。次の 2 節で、本論文で扱う現代語の感情動詞を規定したのち、第 2 章で先行研究を概観して問題点を把握する。その上で考察対象とする感情動詞全体について、文法的・構文的特徴を考察し、ヲ／ニ格感情動詞の特徴を明らかにする。第 3 章では感情動詞の時間的性質について動詞、名詞(句)の両面から考察する。第 4 章ではヲ／ニ格感情動詞に言及する先行研究で取り上げられてきた語である「喜ぶ」を事例として、現代語の様相を考察する。第 5 章では「頼る」を取り上げ、まず現代語の様相を記述する。「頼る」は、現代語ではヲ／ニ格をとる例に比較的偏りが少なく、二様の格体制をもつ動詞の一例として適当である。また格体制が変化した語でもあり、中世以降、近代までの格体制の変遷を考察する。第 6 章では「恐(れ)る」について考察する。通時的には格体制に大きな変化はないが、現代語ではヲ／ニ格感情動詞であるもののニ格をとる例に偏るのに対して、中世ではヲ格、ニ格どちらかへの用例の偏りが少ない。過去の共時態における様相を手がかりに、現代語における「恐れる」のヲ／ニ格選択要因を探ることができるだろう。最後に第 7 章で結論を述べる。

2. 考察対象となる「感情動詞」

「感情動詞」は、「心理動詞」「情意動詞」など研究者によって呼称が異なり、対象とする範囲も少しずつ異なる。本論文では「感情動詞」と呼び、概ね、人間の精神活動のうち、思考、知覚を除いたものを指す。現代語における具体的な考察対象は以下の作業を経て得られた語群である。国立国語研究所(2004)『分類語彙表 増補改訂版』において「用の類 2.3 精神および行為」の主に「2.30 心」に分類されている語から、山岡(2000)の「情意」の意味特徴を示す語を抽出した。山岡(2000)は本論文の感情動詞に当たるものを「情意⁸」動詞として以下の文法テストを提示している。まず、①「「たいへん、かなり、非常に」などによって修飾が可能な程度性を持つてい」(p.178)で、そのうち②「経験者の感覚部位としての肉体部分を部分ガ格として表現」(p.178)できないもの(下記の例では「あきれる」)である。

- ① a. 花子の失敗に非常にあきれた。
b. 非常に肩が凝った。
c. *太郎は良い考えが非常にひらめいた。
- ② a. *太郎は頭があきれた。
b. 太郎は肩が凝った。

(2)に、本論文が考察対象とする現代語の感情動詞を示す。

⁸ 山岡(2000)では情意、思考、感覚、知覚を表す動詞全体を「感情動詞」とする。

- (2) 案じる、好む、好く、嫌う、疎む、いとう、憎む、慈しむ、いとおしむ、慕う、哀れむ、偲ぶ、うらやむ、ねたむ、そねむ、やく、敬う、尊ぶ、重んじる、惜しむ、悼む、あがめる、怠ける、慎む、はかなむ、忌む、疑う、怪しむ、危ぶむ、侮る、さげすむ、卑しむ、許す、たまげる、ときめく、狂う、浮かれる、あきれる、のぼせる、白ける、おじける、ふてくされる、めいる、安らぐ、焦(じ)れる、かしこまる、うろたえる、参る、弱る、懐く、なじむ、ほれる、いじける、へりくだる、懲りる、くじける、しょげる、惑う、むかつく、びびる、あきらめる、あこがれる、焦(あせ)る、甘える、憤る、いらだつ、怒る、恐れる、驚く、おびえる、興じる、苦しむ、こだわる、こらえる、凝る、親しむ、堪える、ためらう、頼る、戸惑う、嘆く、悩む、恥じる、はにかむ、はやる、誇る、迷う、喜ぶ、いぶかる、憂える、悲しむ、悔いる、悔やむ、渋る、懐かしむ、うぬぼれる、恨む、恋う、楽しむ、はばかり、めでる、忍ぶ、おごる、くつろぐ、慌てる、焦がれる、たじろぐ、慣れる、まごつく、照れる、飽きる、困る、ひがむ、ひるむ (114 語)

(2)には日常では使用しにくい語もあるが⁹、できるだけ広く格交替を許容する感情動詞を集めるために考察対象に含める。

⁹ そもそも感情動詞は感情を表す形容詞に比べて、口語的な文体に使用されにくい。

第2章 現代語における感情動詞の格体制

本章ではまず、1節で感情動詞についての先行研究を概観し、問題の所在を確認する。続いて2節で現代語の感情動詞の格体制を記述し、格体制と受身化・使役化、格形式の共起率との関係を指摘する。

1. 先行研究

1.1. 感情動詞全体に関する問題に主眼を置く先行研究

日本語の感情動詞に関する先行研究は当然それぞれに重なる部分はあるが、ここでは先行研究の主な関心によって、大きく三つに分けて概観する。なお、「喜ぶ」「頼る」「恐れ」を扱った研究にはここでは言及せず、本論文の各章で関連する先行研究について扱う。

一つ目は体系内における位置づけに関するもので、動詞全体における位置づけを述べた工藤(1995)や三原(2000)、文機能から考察する山岡(1998)(1999)(2000)(2002)の一連の研究などがある。山岡(1998)以下の一連の研究は、表出、描写といった文機能の面から、思考・情意・感覚・知覚動詞を分類し、意味的・文法的特徴を考察したものである。ル形で話者の現在の感情を表せる動詞、タ形で話者の現在の感情を表せる動詞を、表出機能をもつ文に用いられる語として広く集め、アスペクト的特徴などを考察している。ル形で話者の現在の感情を表すことができる動詞(山岡(2000)の用語では「感情表出動詞」)は継続動詞、タ形で現在の感情を表すことができる動詞(同「感情変化動詞」)は瞬間(変化)動詞であり、その他の感情動詞(同「感情描写動詞」)には継続動詞と変化動詞が混在しているとする。

山岡(2000)では、「表出」は「話者自身の主観を言語化する機能」(p.86)とされ、「僕は君を憎む」のような宣言的な意味を表す文も「感情表出文」としているが、「ああ、困った」のような文とは異なり、必ず聞き手が必要であり、厳密に「現在」を表すと言えるかも疑問である。さらに「ここに開会を宣言する」のような、発話そのものが動詞の表す行為を遂行することになる文に近いことから、両者は別に扱うべきだと考える。この点に関しては2.2節で扱う。格表示について、感情表出動詞がヲ格をとらないことが指摘されているが(ヲ格をとらないことが十分条件ではない)、ヲ／ニ格感情動詞には言及されていない。

三原(2000)では、感情動詞のアスペクト的特徴を考察し、感情動詞が終了限界のない活動動詞であることを論じている。ヲ格感情動詞と直接受動文が可能なニ格感情動詞を他動詞、直接受動文が不可能なニ格感情動詞を自動詞とし、長距離かき混ぜ操作による島からの摘出テスト(付加詞では容認性がより下がる。「?主任教授を、私は[学生たちがe怖がっているという噂]を聞いた」「??今回のリストラ計画に、私は[係長がe悩んでいるという噂]を聞いた」(p.63. 文法性判断は三原(2000))により、弱い非容認性を示すのが他動詞に分類した語、強い非容認性を示すのが自動詞に分類した語だとして自他の別を裏付ける。またヲ／ニ格をとる「喜ぶ」には、ヲ格名詞が項である他動詞とニ格名詞が付加詞である自動詞の別があるとする。感情動詞をすべて終了限界のないものとするが、第3章で見るように、特に三原(2000)で自動詞のニ格感情動詞に分類された語には、瞬間的变化を表わすと考

えられる語がある。

二つ目は感情動詞の特徴そのものを考察することに主眼があるもので、感情動詞のアスペクト的性質に関する堀川(1992)、馬場(2001b)、吉永(2008)、属性文の成立条件を論じた小竹・酒井(2011)、形容詞との関係を扱う浅山(2000)、小竹(2007)などがある。形容詞との関係に関して、概ね二格感情動詞は対応する形容詞がないのに対し、ヲ格感情動詞には対応する形容詞が存在することが指摘される。

馬場(2001ab)は、怒りを表す動詞に絞って考察を行ない、テンス・アスペクトの特徴を考察している。また馬場(2001a)では、寺村(1982)の「一時的な気の動き」に分類される動詞に当てはまるものとして、二格をとる動詞以外にも二格とヲ格をとる「オコル」「イカル」、ガ格と二格をとる動詞に言及するが、語を挙げるに留まる。

外崎(2005)は、感情動詞と感情形容詞の関係、EO 心理動詞と ES(経験者主語)心理動詞の関係に関する問題を中心に扱うが、格表示には注目されない¹。なお「好く」「嫌う」はアスペクト対立がない状態動詞とされ「心理動詞」とは呼ばれず、非状態述語とされる「悲しむ」「喜ぶ」などとは別に扱われている。

感情動詞の意志性について森山(1988)は、感情動詞は無意志的であり、主体性には語によって差があるとする。仁田(1991)でも「*あきれろ」のように命令形にならない語は非自己制御性の動詞であるが、「慌てるな」のように禁止命令になる語は、実現しないようにする企てができ、かつそうすることが望ましいものであるとする。意志性に関しては個々の動詞を観察する必要があるが、本論文では第4章で「喜ぶ」について記述する。

ほかに英語の経験者目的語心理動詞(EO 心理動詞。ex.) *Thunder frightens John.*と関連付けた使役化の問題(「その知らせが太郎を喜ばせた」)や、人称制限、逆行束縛にも関心が向けられているが、本研究の主眼の外にあるため、取り上げない。

また、歴史的な観点から感情動詞と感情形容詞の関係について論じる先行研究に田中(1998)、安本(2009)などがある。これらの研究ではヲ、ニの両格表示を許す動詞については扱われないか、言及するにとどまる。

三つ目が感情動詞の格表示に主眼を置くものである。寺村(1982)や益岡・田窪(1987)など、ヲ格感情動詞と二格感情動詞の違いについて述べるものが多く、その中で、両用の感情動詞に触れられることもあるが、詳しく考察された論考は多くない。これらの先行研究については次節で扱う。

1.2. 格交替、格表示の変遷に主眼を置く先行研究

1.2.1. 感情動詞以外の動詞に関する研究

感情動詞以外にも格交替する語が少数ながらあり、また現代語とは異なる格体制にあった語も存在する。古くは本居宣長『詞の玉緒』「にに通ふを」(五之巻「を」の一項)に、「に」

¹ 「太郎が悲しんだ」のように目的語をとる必要がないとの言及があることから、おそらく統語構造に、目的格付与が任意的な[±Acc]を想定しており、[+Acc]ならヲ、[-Acc]ならニまたはデになるとするようだが、詳しい考察は見られない。

に相当する「を」を伴う例として「人を別る」が挙げられている。山田(1914)、松下(1928)、湯澤(1936)(1981)、此島(1966)、春日(1969)などに、「～を別る」「～をへつらふ」「～を逢ふ」といった現代語とは格体制が異なる語が挙げられ、特に漢文訓読系の文に多いとされる。このような語の存在は従来から指摘されていたが、格体制の変遷過程を記述考察したものは少ない。感情動詞及びその周辺に言及した論考として工藤(1978)がある。工藤(1978)は広く格表示の変遷した語を扱い、上代以前の日本語においては、「自然な営みの契機・対象」をニで、「意図的な営みの対象」をヲで表したのが、漸次緩やかになっていったとするが、各語について紙幅が割かれておらず、追調査が俟たれる。個別の動詞の格形式に関して、史的変遷に言及した研究に「好く」「恋ふ」などに関する宮地(1979)、「背く」に関する信太(1981)などがある。両研究は動詞の語義の変遷と格表示の変遷が連動していることを示す。信太(1981)ではヲ、ニの機能の変化も要因とするものの、一般化には至っておらず、個々の語の研究の蓄積が必要である。現代語では定延(2006)の「訪れる」(後述)、秋元(2010)の「触る」などがある。

1.2.2. 感情動詞に関する研究

本節では、感情動詞の格表示に主眼を置いて考察した先行研究を概観する。「喜ぶ」について紙幅を割いているものは第4章で扱うため、ここでは言及しない。

杉岡(1992)はヲ格感情動詞とニ格感情動詞の項構造について、形容詞の派生との関係や受身化の可否から、ヲ格感情動詞は普通の他動詞と同じような外項をもち、Target がヲ格を伴うとする。ニ格感情動詞では Cause が内在格としてニ格を伴って表れ、受身構文に似た項構造をもつとする。しかしヲ／ニ格を許容する感情動詞としてヨコロブに触れるものの、項構造の違いをヲ／ニ格感情動詞にも同様に当てはめた検討はなされていない。

佐藤(1997)は、感情動詞の受身化の可否から、ニ格名詞(句)には原因の θ 役割を担う場合と、対象の θ 役割を担う場合があり、ヲ格名詞(句)は対象の θ 役割を担うとする。佐藤(1997)の主張は日本語母語話者の直感にも沿うものであると思われるが、受身化、使役化に大きく影響する Affectee(影響を受ける立場にあるもの)が経験主である場合とニ格名詞(句)である場合の条件が示されておらず、説得力に欠ける。また「パリにあこがれる」のようにニ格名詞でも原因を表さないと考えられる語について考慮に入られていない点にも問題がある。この点に関しては第5章で扱う。ヲ／ニ格感情動詞についてはヨコロブの存在に言及するのみである。

山川(2004)は、BANDO(1996)(1997)でニ格名詞が「原因」と「対象」の意味役割を同時に担うとされたことに対し、「原因」の読みは解釈の結果であって、ヲ、ニのどちらで表されていても「感情の対象」であり、「原因」の解釈のみをもつ場合は、ニ格名詞は付加詞だとする。さらに「しばらく」「数秒で」との共起の可否(「太郎はしばらく悲しんだ」「??太郎は数秒で悲しんだ」p.13)から、それぞれが語彙概念構造でもつ意味素のうち、BE が強ければヲ格表示の可能性があり、BECOME が強ければニ格表示にしかならないとする。この指摘は、次に挙げる寺村(1982)、益岡・田窪(1987)がヲ格感情動詞、ニ格感情動詞それぞれ

に指摘したことが、ヲ／ニ格感情動詞にも当てはめられると指摘したことと本質的には同じであろう。

以上は動詞の項構造、または語彙概念構造からの考察であったが、動詞の意味的側面から述べたものに寺村(1982)がある。寺村(1982)は、ニ格をとる「恋する」などの感情動詞は「一時的に感情(気)が動き、それが何らかの表情を伴うという点に特徴」(p.141)があり、「感情が表情や身体の動きとなって外面に現れる点に重点がある」(p.142)とする。一方ヲ格をとる「愛する」などの感情動詞は、「より純粹に心の感情の状態を描」(同上)き、それは「能動的な心の動き、積極的感情の発動」(p.153)だとする。益岡・田窪(1987)も「対象が人に一時的感情を持たせる原因になる場合、その対象はニで表わされる。(略)一方、能動的・持続的な感情の場合は対象をヲで表わす」(p.20)とし、ヲ／ニ格感情動詞の存在にも言及する。ただし、どちらの論考でもヲ格感情動詞とニ格感情動詞の差異が明らかな現象が示されているわけではない。

森山(1988)は、連語論的アプローチをとり、格体制のパターンから構文が担う意味を記述する。その中で、感情動詞については、原因を表すニ格をとる語(「驚く」「呆れる」など)、ヲ格に近い性質をもつニ格をとる語²(「ほれる」「懂れる」「頼る」など)、ヲ格感情動詞(「愛する」「諦める」など)を挙げる。

いずれにしても、本論文の主眼であるヲ／ニ格感情動詞について中心的に扱ったものではなく、ヲ、ニそれぞれをとる場合の差異、選択要因は明らかになっていない。感情動詞の格表示の問題を扱う場合、ヲ格名詞、ニ格名詞の意味役割が「原因」か「対象」かという議論になるが、そもそも感情表現において、当該名詞が感情を引き起こす誘因なのか、感情の指向先なのかは明確に区別できず、どちらでもあるということは十分に考え得る。本論文では便宜的に「原因」「対象」という語を用いることはあるが、基本的に意味役割とは別の観点から考察を行なう。また感情動詞のアスペクト的特徴に関しても状態動詞ではないという見方が大勢だが³、動作動詞のうちのどこに位置づけるのか、あるいは変化(瞬間)動詞もあるとするのか研究者によって異なる。

以上の先行研究の成果と課題を踏まえ、本研究は次の三点を目的として考察を進める。第一に、ヲ／ニ格感情動詞の構文特徴、意味特徴の記述考察を行ない、格選択の要因を探ること、第二に、ヲ／ニ格感情動詞の振る舞いとヲ／ニ格の機能がどのように関係づけられるかを探ること、第三に、ヲ格感情動詞、ニ格感情動詞に見られる諸特徴とヲ／ニ格感情動詞の特徴の関連を明らかにすることである。

² 直接受身化が可能なこと、ニ格がニタイシテで置換可能なことによる。

³ 工藤(1995)は典型的アスペクト対立がなく、アスペクト対立のある外的運動動詞と対立のない静態動詞との中間に位置するとする一方、工藤(2012)では状態動詞だとする。

2. 格体制とヲ／ニ格感情動詞の諸相

2.1. 感情動詞の格体制

本章では、本論文で対象とする現代語の感情動詞全般について、格表示に注目しながらその振る舞いを考察する。第 1 章で抽出した 114 語を、次の方法で格体制別に分類した。『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』(以下『新潮』)と『朝日新聞』(『聞蔵(きくぞう) II ビジュアル for Libraries』(1985～))を対象に、『朝日新聞』では検索の便宜からヲ格、ニ格と動詞が隣接しているものに限って、『新潮』ではヲ格、ニ格と動詞が隣接していない例も含めて調査した。本論文ではそれぞれのカテゴリーに属する感情動詞の特徴を観察することが目的であることから、両資料でヲ格をとる例(以下、ヲ格例)、ニ格をとる例(以下、ニ格例)の両方が得られた語をヲ／ニ格感情動詞とする。一方の資料ではヲ格例、ニ格例ともに得られたが、もう一方の資料ではヲ格例のみ、またはニ格例のみだった語は、保留群とする⁴。なお、「あの顔がむかつく」など、ガ格名詞(句)をとることが可能な語もあるが、ガ格に関しては考察対象外とする。この結果を示したものが表 1 である。本章での主な考察対象はヲ格感情動詞 33 語、ニ格感情動詞 27 語、ヲ／ニ格感情動詞 28 語である。

【表 1】現代語感情動詞の格表示

ヲ格(33語)	案じる、好む、好く、嫌う、疎む、いとう、憎む、慈しむ、いとおしむ、慕う、哀れむ、偲ぶ、うらやむ、ねたむ、そねむ、やく、敬う、尊ぶ、重んじる、惜しむ、悼む、あがめる、怠ける、慎む、はかなむ、忌む、疑う、怪しむ、危ぶむ、侮る、さげすむ、卑しむ、許す
ニ格(27語)	たまげる、ときめく、狂う、浮かれる、あきれる、のぼせる、白ける、おじける、ふてくされる、めいる、安らぐ、焦(じ)れる、かしこまる、うろたえる、参る、弱る、懐く、なじむ、ほれる、いじける、へりくだる、懲りる、くじける、しょげる、惑う、むかつく、びびる
ヲ/ニ格(28語)	あきらめる、あこがれる、焦る、甘える、憤る、いらだつ、怒る、恐れる、驚く、おびえる、興じる、苦しむ、こだわる、こらえる、凝る、親しむ、堪える、ためらう、頼る、戸惑う、嘆く、悩む、恥じる、はにかむ、はやる、誇る、迷う、喜ぶ
(保留群)	(ヲ格例に偏る) いぶかる、憂える、悲しむ、悔いる、悔やむ、洩る、懐かしむ、うぬぼれる、恨む、恋う、楽しむ、はばかり、めでる、忍ぶ (ニに偏る) おごる、くつろぐ、慌てる、焦がれる、たじろぐ、慣れる、まごつく、照れる、飽きる、困る、ひがむ、ひるむ

⁴ 保留群には「悲しむ」など先行研究が本論文のヲ／ニ格感情動詞として挙げる語も含み、内省でも両格を許容する語がある。調査範囲の拡大や、これらの語の考察は機会を改めて行いたい。

また、「むかつく」「びびる」は『新潮』では用例が得られないが、内省ではニ格のみをとるため、ニ格感情動詞に含めた。

2.2. 感情動詞の分類

感情動詞は「殴る」「走る」などの動作動詞に比して、人称制限があるなど様々な面から特殊な振る舞いをする⁵とされている。また感情動詞は感情の生起や持続という意味を表し、ヲ格名詞(句)、ニ格名詞(句)に直接的な影響を及ぼさないという点では共通するものの、振る舞いは様々で、典型的な感情動詞というものが見出しにくいように思われる。しかしいくつかの語に共通する特徴が見られるのもまた事実である。本論文では感情動詞を、格体制と表出用法をもつか否かという用法面の観点から下位グループに分けた上で、それぞれのグループ内でさらに振る舞いの異なりを観察する。

工藤(1995)や山岡(2000)などでも指摘されていることだが、感情動詞には(1)のようにル形またはタ形で感情主の現在の感情を表わすことができるものと、(2)のようにル形またはタ形では現在の感情を表わすことができないものがある。

- (1) a.むかつく！
b.あきれた！
- (2) *喜ぶ！／*喜んだ！

本論文では「表出」を、仁田(1991)に則り、相手への働きかけを意図せずに話者の気持ちを言語化した表現とする。例えば、「(部屋で鼠を発見して)ねずみ！」は、同じ部屋にいる人にねずみの存在を知らしめるのであれば「相手への働きかけ」であるから表出ではなく、独り言であっても話者の気持ちそのものを言葉にしているわけではないため表出ではない。表出には「(プレゼントをもらって)うれしい！」というように感情形容詞を用いるのが典型だが、感情動詞にもル形またはタ形で感情の発露表現として用いることができるものがある。

「怒り」を表す感情動詞を扱った馬場(2000a)では、「基本形単独で感情主の感情を表せることを意味し、他のいかなる要素(例えば「よく」のような頻度を表す副詞や「太郎に(が)」のような対象)も伴ってはならない」(p.167)とされている。同じく馬場(2000a)の「準表出」は、「基本形単独では用いることができず、何らかの対象を必要とするもの」と定義されるが、上述のようにタ形で現在の感情を表せる語もあること⁵、筆者にとっては馬場(2000a)で「準表出」として挙げられる「(あの言葉に)はらわたが煮えくり返る」や「(あの態度が)癪に障る」が対象を伴わなくても、(実際の会話には出てきにくいとしても)表出用法が許容できること、何らかの対象を伴っていても話者の発話時現在の感情を表すという点は同じであることから、本論文では馬場(2000a)の「準表出」も含めた、(3)のような場合を「表出」とする。①により「あの態度にはいつもむかつく」など反復事態を表す文や属性文は「表出」から排除される。

⁵ 馬場(2000a)が対象とする語の中にタ形で話者の現在の感情を表す語がないため、基本形に限定しているものと思われる。

(3) 表出：①動詞のル形もしくはタ形で、話者の発話時現在の感情を表す。

②相手への働きかけを意図せず、独り言として成立する。

中にはル形、タ形のままでは多少使いにくいものもあり、「ああ、じれる」よりも「ああ、じれるなあ」のほうが自然に感じられる。終助詞「な」や「わ」は「話し手自身が、強い感情や驚きを伴って認識したことを表」(野田 2002 p.273)し、独り言での使用が可能である。聞き手目当てではない終助詞「な」は「独話で用いられ、感情などを、話し手自身があらためて確認することを表す」(同上 p.283)とされる。宮崎(2002)でも「な」の性質を『『その場で思ったこと、感じたこと、気づいたこと』を述べる(認識の現場性)」(p.11)とする。以上のことから、終助詞「な」や「わ」を伴っていても独り言として成立すれば、表出用法と認めることとする。②からは「な」「わ」以外の終助詞がついた「驚いたよね」などが排除できる一方、「あの態度がむかつく」のようなガ格をとる一部の語を取り入れることができる。表出は基本的には一語文だと考えるが、ガ格名詞(句)やニ格名詞(句)を伴うものも表出として扱うことになる。

例(4)a「喜ぶ」では現在の状態を表していると考えられるテイル形でも、他人の様子を言ったもの(b)であれば自然だが、話者の感情の発露である表出用法としては不自然となる。このように「喜ぶ」などへの「な」の付加が全く許容されないことを鑑みると、dの「じれる」など一部の感情動詞には「な」を付加することで表出としての自然さが上がるという事実は重視してもよいだろう。ただ、終助詞を伴わなくても自然な動詞(c)との違いは考慮に入れる必要があり、今後の課題となるが、本論文ではこれ以上踏み込まない。

(4) a. *喜ぶな (あ) / *喜んだな (あ) / #喜んでいるな (あ)。

b. 太郎：「花子、あんなに大きなプレゼントをもらって喜んでるなあ」

c. むかつく (な (あ))。

d. じれるな (あ)。

表出用法の有無で分類したものが表 2 である。

【表 2】感情動詞における表出用法の有無

	ル形表出	タ形表出	表出用法なし
ヲ格感情動詞			あがめる、怪しむ、危ぶむ、案じる、慈しむ、疑う、敬う、重んじる、惜しむ、僂ぶ、憤む、怠ける、侮る、哀れむ、悼む、いとう、いとおしむ、忌む、卑しむ、疎む、うらやむ、嫌う、好む、さげすむ、慕う、好く、そねむ、尊ぶ、憎む、ねたむ、はかなむ、やく、許す
ニ格感情動詞	焦（じ）れる、めいる、安らぐ、むかつく、△白ける	あきれる、参る、弱る、たまげる、懲りる、びびる	いじける、浮かれる、うろたえる、かしこまる、ふてくされる、狂う、なじむ、懐く、へりくだる、惑う、おじける、ときめく、くじける、のぼせる、ほれる、しょげる
ヲ／ニ格感情動詞	いらだつ、迷う、悩む、△あこがれる	驚く、△焦る	あきらめる、甘える、憤る、怒る、恐れる、おびえる、興じる、苦しむ、こだわる、こらえる、凝る、親しむ、堪える、ためらう、頼る、戸惑う、嘆く、恥じる、はにかむ、はやる、誇る、喜ぶ
(保留語群)	(ニ)照れる	(ニ)飽きる、困る	(ヲ)いぶかる、憂える、悲しむ、悔いる、悔やむ、泣く、懐かしむ、うぬぼれる、恨む、恋う、楽しむ、はばかり、めでる、忍ぶ (ニ)おごる、くつろぐ、慌てる、焦がれる、たじろぐ、慣れる、まごつく、ひがむ、ひるむ

(△は表出用法において少々不自然、もしくは若者ことばのように感じられる語)

このような表出用法をもつ感情動詞は、ヲ格感情動詞に見られず、ヲ／ニ格感情動詞には数語見られる。章末の資料③からわかるように、「焦る」以外はニ格例に偏る語である。話者が自身の現在の感情を表す場合⁶、「喜んでいる」といった動詞のテイル形ではなく、「うれしい」などの形容詞を用いる。浅山(2000)が指摘するように、ヲ格感情動詞には「惜しむ—惜しい」「ねたむ—ねたましい」のように同語根の形容詞があることに関係があると考えられ、同語根に限らず「喜ぶ—うれしい」のように意味的に対応する形容詞があることは表出用法をもつか否かに大きく関わると考えられる。ヲ格感情動詞で対応する形容詞のない「あがめる」「案じる」「重んじる」「怠ける」「侮る」「さげすむ」「そねむ」「はかなむ」

⁶ 他者に現在の内的状況を説明する場合はテイル形を用いることができる。

A: 本当にうれしい？

B: ええ、これでも喜んでいますよ。

「やく」「許す」は感情動詞の中でも比較的、付随する動作を想起しやすい語だと考えられる。例えば、「やく」は心内のみで嫉妬心をもつ場合もあるが、言動を伴った嫉妬心というよりもそれが言動に現れること自体を指す場合もある。

ただ、想起のしやすさは程度の問題であり、どのヲ格感情動詞もこのような側面をもつ。さらに対応する形容詞がないにも関わらず、二格感情動詞のすべてが表出用法に用いることができるわけではなく、ヲ／二格感情動詞でも同様に、二格例に偏る動詞のすべてが表出用法をもつわけではない。表出用法をもつ動詞ともたない動詞の違いについての詳細な考察は機会を改めたい。

2.3. 受身化、使役化

従来、感情動詞の振る舞いを観察する上で、受身化または使役化の可否が論じられてきた(杉岡 1992、佐藤 1997、三原 2000 など)。使役化に関しては、交替型使役文の成立可否(後述)という観点、使役化した文(「そのプレゼントが花子を喜ばせた」)と英語の EO(経験者対象)心理動詞の関係という観点から扱われている。また、ヲ、ニの違いを意味役割の違いだとする論において、受身化、使役化の可否がその証拠とされる。本研究は、いわゆる「対象」や「原因」といった意味役割が截然と区別できるわけではないと考え、主に意味役割の側面以外からの考察を試みるものであるが、受身化、使役化の可否には一定の傾向が認められ、やはり重要な指標の一つであることから、先行研究の追試を行なった上で、ヲ／二格感情動詞の振る舞いを観察する。

2.3.1. ヲ格感情動詞

まず感情動詞以外の動詞の受身化における振る舞いを確認する。ヲ格名詞が対象の意味役割をもつ場合、元の文のガ格(主語)を二格に、ヲ格(目的語)をガ格にした(「花子」と「太郎」を入れ替えた)直接受身文にすることができるが(5)、ヲ格名詞が対象の意味役割をもたなければ、このような直接受身構文にはできない(6)とされる⁷。

(5) a. 花子が太郎を殴った。

b. 太郎が花子に殴られた。 【目的語のヲ格】

(6) a. 飛行機が空を飛んだ。

b. *空が飛行機に飛ばれた。 【経路のヲ格】

ヲ格感情動詞「憎む」では(7)のように直接受身文にすることができる。

(7) a. 花子は太郎を憎んだ。

b. 太郎は花子に憎まれた。

⁷ 以下では、間接受身文は扱わない。

ヲ格感情動詞ではほぼ直接受身文が成立する。ただし三原(2000)が指摘するように「ためらう」「悔やむ」など一部のヲ格感情動詞では、同じ操作をした場合、受身ではなく自発の解釈になる。厳密にはこれらを区別して論じるべきところだが、直接受身型の文が成立するという点では二格感情動詞と明らかに振る舞いが異なる。なお「ためらう」は本論文ではヲ／二格感情動詞として分類しているもの、「悔やむ」は『朝日新聞』における調査でのみヲ、ニの両例が得られる感情動詞である。ヲ格感情動詞と直接受身文の成立は強く関係すると言える。本論文におけるヲ格感情動詞のうち直接受身文にできない語は以下の二語である。

【直接受身文にできないヲ格感情動詞】 慎む、怠ける

このうち「慎む」は(8)のように感情主が不特定多数で文中に顕在化していなければ、直接受身化ができる。

- (8) a. 国民は華美な服装を慎んだ。
b. (戦時中は)華美な服装は慎まれた。

「怠ける」は有情物がヲ格に立たないために直接受身文にしにくいと考えられる。ただし同じくヲ格感情動詞の「楽しむ」は有情物をヲ格にとらないにも関わらず直接受身化が可能であることから、異なる理由が考えられるかもしれない⁸。なお保留群の「うぬぼれる」「はばかり」もヲ格名詞をとる場合、直接受身文にできないが、「うぬぼれる」は「自分を過信する」という語義から受身文自体が成立しにくいことが原因と考えられる。「はばかり」は自発の意味となるが、「ためらう」や「悔やむ」と同様に捉えておく。

ただし、普通、「経路」を表すヲ格は直接受身にできないが、杉本(1986)が指摘するように、経路のヲ格(杉本 1986 の用語では「移動補語」)でも直接受身化できる場合がある(例(9))。杉本(1986)は「受身化との関連で移動補語をみた場合、目的語と全く同じとは言えないものの、近似した性格を持つと考えられる」(p.295)とする。

- (9) a. 多くのメダリストがこのコースを走っている。
b. このコースは多くのメダリストに走られている。
c. *この道は太郎に走られている。

無生物主語の受身文は成立しにくいこと、(8)(9)のような例の存在から、問題なく直接受身文が成立するもののみが「対象」のヲ格というわけではなく、また条件によっては直接受身化できる場合でも、実質的な影響を被る典型的な対象ヲ格との近似性を示すという程度にとどめるべき場合もあり、直接受身文化が「対象」を表すことの絶対的な指標にはな

⁸ これ以外のヲ格感情動詞においても直接受身文の主語が無情物であることは排除しない。

らないことに留意しなくてはならない。

2.3.2. 二格感情動詞・ヲ／二格感情動詞

受身化、使役化に関して問題となるのは二格感情動詞である。二格感情動詞の受身化、使役化について扱う佐藤(1997)では、二格感情動詞(佐藤 1997 では「与格構文をとる心理動詞」)には受身化できるものとできないものがあり、その差は二格名詞(句)が担っている θ 役割による、つまり対象を表す場合は直接受身文が可能で、誘因の場合は受身化ができないとする。同じ「ほれる」でも、(10)のように「女」が二格名詞であれば受身化が可能で、(11)のように「女の気風のよさ」であれば受身化ができないとされる。

- (10) a. 男が女に惚れた。
b. 女が男に惚れられた。 (佐藤 1997 p.119(10))
- (11) a. 男が女の気風のよさに惚れた。
b. *女の気風のよさが男に惚れられた。 (同上(11))

ただ(11)b は筆者には許容でき、話者によって判断に差が出るものと考えられる。

また使役化に関して、通常、使役文を作るには(12)(13)のように元の文の参与者に加えて新たに項を加えなければならない。ところが直接受身化ができない二格感情動詞は、(14)のように参与者を交替させた使役文(「交替型」⁹使役文)を作ることができ、佐藤(1997)ではこのような二格名詞(句)は原因の意味役割をもつとされる。確かに(15)に見るように、動作動詞「飛び上がる」では、飛び上がった「原因」と解釈できる二格名詞(句)「雪の冷たさ」は「交替型」使役文の主語に立つことができる。

- (12) a. 次郎が太郎を殴った。
b. 花子が次郎に太郎を殴らせた。 【他動詞文の使役化】
- (13) a. 太郎が走った。
b. 花子が太郎を走らせた。 【自動詞文の使役化】
- (14) a. 太郎はその知らせに悲しんだ。
b. その知らせは太郎を悲しませた。(佐藤 1997 pp.127-128(43)) 【「交替型」使役文】
- (15) a. 太郎は水の冷たさに飛び上がった。
b. 水の冷たさが太郎を飛び上がらせた。

ただし佐藤(1997)も指摘するように、同一の動詞であっても二格名詞(句)によって交替型の使役文にできる場合とできない場合とがある。(11)のように直接受身化ができず、「交替型」使役文(「女の気風のよさが男を惚れさせた」)にすることができれば、原因の意味役割を表し、(10)のように直接受身化が可能で、「女の振る舞いを見て、男が女に惚れた」のよ

⁹ 野田(1991)。

うに原因要素を追加できるタイプは感情の対象の意味役割とされる。佐藤(1997)の主張に従うと、(16)のように受身化も使役化も可能であれば、原因にも対象にも読み取れるものと言える。

- (16) a. 太郎はマイペースな母にあきれた。
b. マイペースな母が太郎にあきれられた。
c. マイペースな母が太郎をあきれさせた。

このような受身化も「交替型」使役化も可能な動詞(・例)は、筆者には許容できる(11)「ほれる」のほかにも存在する。本論文の調査ではヲ格例に偏るヲ／ニ格感情動詞(保留群)である「悲しむ」は、(14')のようにヲ格をとっても「交替型」使役文が許容でき、この使役文からは元の格表示がヲ格なのかニ格なのか、復元できない。さらに直接受身文も成立する(c)。

- (14') a. 太郎はその知らせを悲しんだ。
b. その知らせは太郎を悲しませた。
c. その知らせは太郎に悲しまれた。

「交替型」使役文が成立すれば、ニ格名詞(句)が確かに「原因」らしくはあるが、「原因」の意味役割を担うとは言い切れない¹⁰のである。一方で「交替型」使役文が成立しない動詞と異なることは重視すべきだろう。「交替型」使役文が成立しない動詞は感情の誘因として解釈される余地がほぼない語と捉えておく。後述するようにヲ／ニ格感情動詞の名詞(句)の場合、感情の指向先とも誘因ともより捉えられやすいとすれば、その曖昧さによって、受身化、使役化の両者が成立するのであろう。

なお、「懐く」の場合、(17)cのように「交替型」使役文も作ることではできるが、次郎が意志をもち、何らかの手段を講じて「懐かせた」という解釈になり、(16)cとは異なる。

- (17) a. 太郎は次郎に(よく)懐いた。
b. 次郎は太郎に懐かれた。
c. 太郎は次郎を懐かせた。

次に、ヲ／ニ格感情動詞の振る舞いを見る。(18)の「憤る」は直接受身にできない(b)。有情物「太郎」であっても、迷惑の受身にしかならないため、bが成立しないのは、無生物主語の受身が成立しにくいためではない。また、cのように「交替型」使役文は成立する。「頼る」(19)は、bに見るように無生物主語では受身化できないが、有情物主語(b')であれば直接受身文は問題なく成立し、「交替型」使役文にはできない(c)。「喜ぶ」(20)は受身化も「交替型」使役化も可能である。「堪える」(21)は受身化も「交替型」使役化もできず、有

¹⁰ 一つの補語は一つの意味役割を担うとされる。

情物主語でも成立しない。

- (18) a. 花子は窓口の対応 {を／に} 憤った。
b. *窓口の対応は花子に憤られた。 cf.) #太郎は花子に憤られた。
c. 窓口の対応は花子を憤らせた。
- (19) a. 花子は親からの仕送り {を／に} 頼った。
b. *親からの仕送りは花子に頼られた。
b' 太郎は花子に頼られた。
c. *親からの仕送りは花子を頼らせた。 cf.) *太郎は花子を頼らせた。
- (20) a. 父は太郎の合格 {を／に} 喜んだ。
b. 太郎の合格は父に喜ばれた。
c. 太郎の合格は父を喜ばせた。
- (21) a. 太郎は上司の横暴 {を／に} 堪えた。
b. *上司の横暴は太郎に堪えられた。 cf.) *うるさい花子は太郎に堪えられた。
c. *上司の横暴は太郎を堪えさせた。 cf.) *うるさい花子は太郎を堪えさせた。

以上のような受身化と使役化の可否に基づいて、二格感情動詞とヲ／ニ格感情動詞を四つに分類したものが次の表 3 である。直接受身にできず、「交替型」使役文は成立する「憤る」(18)のタイプを A、直接受身文は成立し、「交替型」使役文にはできない「頼る」(19)のタイプを B、受身化も「交替型」使役化も可能な「喜ぶ」(20)のタイプを C、受身化も「交替型」使役化もできない「堪える」(21)のタイプを D とした。C は名詞(句)によって受身文、使役文の成立の可否が変わる動詞も含む。主語にほとんど有情物をとらない動詞、つまりもともと受身化しにくいと考えられる動詞は別に②とした。テスト判断に迷う動詞には△を付した。

A は、直接受身文は文法的、「交替型」使役文は非文法的という、大部分のヲ格感情動詞と対照的なグループである。反対に B はヲ格感情動詞と同じ振る舞いをするグループである。C は A、B 両者に共通する性質をもち、意味役割の観点から言うと「原因」と「対象」の両義に解釈できるということになるだろう。D に関して、例えば「こだわる」は内省では対象と同様に感じられ、これらは受身化、使役化という操作になじまないグループだと考えられる。ただ本論文では代替のテスト手段を持たないため、A～C と別に扱うに留める。

【表 3】ニ格感情動詞、ヲ／ニ格感情動詞の受身化・使役化による分類

	直接受身文	「交替型」 使役文		①	②
A	×	○	ニ格	参る、弱る、懲りる、おじける、狂う、ときめく、むかつく、びびる	めいる、安らぐ、白ける、いじける、浮かれる、うろたえる、くじける、しょげる、ふてくされる、惑う
			ヲ／ニ格	憤る、恥じる（相手以外）、誇る（相手以外）、慌てる、苦しむ、はにかむ、ひるむ、いらだつ、悩む	懐かしむ、はやる、焦る
			保留動詞群	（憂える、△照れる、困る）	（まごつく、おごる、くつろぐ、悲しむ）
B	○	×	ニ格	△へりくだる、懐く、焦がれる	
			ヲ／ニ格	親しむ、頼る、甘える、こだわる	
			保留動詞群		
C	○	○	ニ格	じれる、あきれる、たまげる、かしこまる、ほれる	
			ヲ／ニ格	怒る、あきらめる、恐れる、ためらう、嘆く、喜ぶ、おびえる、戸惑う、あこがれる、迷う、驚く	
			保留動詞群	（ひがむ、いぶかる、△悔やむ、渋る、たじろぐ、飽きる）	
D	×	×	ニ格	なじむ、のぼせる	
			ヲ／ニ格	堪える	こらえる、興じる、凝る
			保留動詞群	（悔いる、忍ぶ、慣れる）	

ニ格感情動詞、ヲ／ニ格感情動詞ともに、A から C(および D)まで分布している。先行研究では受身化、使役化の両テストで適格となる語は考慮に入られていないが、C に分類される語は少なくない。また、A に分類したヲ／ニ格感情動詞のうち「懐かしむ」(保留動詞群では「憂える」「悲しむ」)以外はニ格例に偏る語である。ニ格表示と「原因」解釈との関連性が高いように思われる一方で、C のヲ／ニ格感情動詞では、語によって優勢な格表示は異なるが、一方に偏るわけではない。「対象」を表すニ格と捉えられやすいものだけでなく、「原因」を表すニ格とされてきたものにも「対象」性が認められる。これらのことは、「対象」「原因」の区別、およびこれらの意味役割と格形式との対応が截然としているわけではないということを意味する。

ヲ／ニ格感情動詞のうち、ヲ格をとる場合とニ格をとる場合とで意味、使用状況に顕著な差がある感情動詞は、「怒る」「恥じる」「誇る」「苦しむ」「堪える」「はやる」「迷う」「甘える」「忍ぶ」(保留語)の 9 語である。まず「怒る」は「人ヲ怒る」の形で「叱る」の意味がニ格例よりも強いように思われるが、名詞(句)によっては、その違いは小さくなる(例「嘘{を／に} 怒る」)。しかし受身文になると「叱る」の意味での解釈になる。「恥じる」「誇る」はニ格名詞(句)が相手と解釈できる例が見られ、その場合使役化することができない(例「親に恥じる」「*親が太郎を恥じさせた」)。「苦しむ」は、「～できない」の意に近い「{理解／判断／処置} 二苦しむ」のような例では受身化も使役化もできない。「迷う」は「{色香／女} 二迷う」のような「心を惑わす」という意味の場合、使役化は可能だが、直接受身文にはできない。一方「判断二迷う」のような「決断しかねる」意の場合は使役化がで

きず、自発の解釈であれば直接受身の型にできるものが多い。

また、「堪える」は二格例に否定文が多く、「使用に堪える」などの可能の意味を含む例も多く見られ、いずれもヲ格例には見られない特徴である。「忍ぶ」においても、二格例はほぼ否定文であり、「堪える」と同様、動詞の意味だけに拠らず構文的要因も考慮すべきであることがわかる。この点に関しては、別稿に譲る。

本節では先行研究の追調査という形で、受身化、使役化の観点から感情動詞を観察した。特に二格感情動詞では名詞(句)の性質により受身化、使役化の可否が異なること、ヲ／二格感情動詞には受身化、使役化の両方が可能な語が存し、この点で、ヲ格感情動詞と二格感情動詞の中間に位置することを確認した。ただ、感情動詞ではヲ／二格名詞(句)が無情物や「コト」であることも多く、受身化自体が困難な場合も少なくない。使役化に関しても、二格名詞(句)が方向を示すとされる「吠える」は、通常、直接受身文が成立するが、「交替型」使役文は成立せず、強制的解釈になる(例(22))。しかし(23)のように使役文が成立する場合もある。

- (22) a. ポチが太郎に吠えた。
b. 太郎がポチに吠えられた。
c.#太郎がポチを吠えさせた。
- (23) a. 田中が挑発的な鈴木に吠えた。
b. 挑発的な鈴木が田中に吠えられた。
c. 挑発的な鈴木が田中を吠えさせた。

そのため先述のように受身化、使役化のテストの妥当性についても今後、さらなる検討を要する¹¹。

2.4. ヲ／二格名詞(句)の出現率

本節では、ヲ格名詞(句)、二格名詞(句)の出現率について記述する。それぞれの動詞がヲ／二格名詞(句)を伴う割合を見ると、ヲ格感情動詞と二格感情動詞では大きな違いがあることがわかる。資料①～③(章末)に『新潮』における用例数と割合を示した。

資料①②のように、二格感情動詞では二格名詞(句)が出現する例の割合が低く、二格名詞(句)を伴わない例(以下、非出現例)がほぼ 70%から 90%という高い割合を占める¹²。ヲ格感情動詞では、ヲ格名詞(句)を伴う例が多数を占めるか又は非出現例の割合と拮抗する。

二格感情動詞のうち、ヲ格感情動詞と同様に二格名詞(句)が出現しやすいのは、「なじむ」「懐く」「ほれる」で、二格の出現例が 50%以上ある。二格例に偏る保留動詞群の「慣れる」も同じく出現率が高い。「懐く」「ほれる」は感情動詞の二格名詞(句)は表 3 で示したように、

¹¹ 本論文では他動詞か否かを判定することを直接の目的としていないが、角田(1991)においても、受身文化できるということだけで、他動詞文だとすべきではない旨の指摘がある。

¹² 森山(1988)は二格感情動詞をいくつか挙げ、「二格なしでも、動作が成立するような意味の動詞が多いようである」(p.73)と述べる。

直接受身化ができる語である。「なじむ」と「慣れる」は直接受身化ができないが、動詞の意味によるものと考えられ、交替型使役文にもできない語である。

以下に二格感情動詞の「じれる」(例(24)(25))「あきれる」(例(26)～(29))の二格名詞(句)を伴う例と非出現例をそれぞれ挙げる。(28)は表出用法、(29)は二格名詞(句)を伴う表出用法である。

- (24) (略)伸子が、貞三をしたって、そのおそい帰宅にじれ、ねそびれてぐずり続けると、
(筆者注：久子は)急に、今度はけたたましくさけびはじめる(略)
(野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』)
- (25) (筆者注：信夫が屋根から落ちて怪我をしたのを虎郎のせいだと思って)「どうも、虎雄がとんだことを致しまして……」虎雄もしょんぼりとうつむいていた。「虎雄ちゃんじゃないったら！」信夫がじれた。
(三浦綾子『塩狩峠』)
- (26) 「やあ大將はあれにあるぞ」と、あまりにも露呈しすぎている指揮官の位置になかばあきれつつ、弓、鉄砲の組をつぎつぎと進出させ、射撃を集中させた。
(司馬遼太郎『国盗り物語』)
- (27) ——どなただ、あれは。/——鷺山の頼芸様の執事で西村勘九郎さまとは、あのひとではあるまいか。/「奇態な行列じゃ」/みなあきれた。(司馬遼太郎『国盗り物語』)
- (28) 昨夜、北岡が飛び込んで来たことを三枝が話すと、純子が、言った。「呆れた。何のつもりかしらね？」
(赤川次郎『女社長に乾杯！』)
- (29) あの置手紙に、書いたとおりに、自分は浅草の堀木をたずねて行く事にしたのです。(略)「お前には、全く呆れた。親爺さんから、お許しが出たかね。まだかい」
(太宰治『人間失格』)

またヲ格感情動詞は「うらやむ」(例(30)(31))「慕う」(例(32)(33))のそれぞれヲ格名詞(句)を伴う例と非出現例を挙げる。

- (30) 他人の出世を羨んで、自分が貧乏学者であることを嘆くことは少しもない。
(曾野綾子『太郎物語』)
- (31) 五人の姉妹の中でぎんが一番裕福なところへ嫁いだ。嫁ぐときまった時は誰もが羨んだ。
(渡辺淳一『花埋み』)
- (32) 彼女らはもともと源氏に仕え、目をかけられていた女房たちであるが、この年頃は紫の上に仕えていて、みな、心から紫の上を慕い、紫の上の味方であった。
(田辺聖子『新源氏物語』)
- (33) しかし丑松が蓮太郎の書いたものを愛読するのは唯それだけの理由からでは無い。新しい思想家でもあり戦士でもある猪子蓮太郎という人物が穢多の中から産れたという事実は、丑松の心に深い感動を与えたので——まあ、丑松の積りでは、隠に先輩として慕っているのである。
(島崎藤村『破戒』)

(31)(33)のようにヲ格感情動詞では非出現例であっても、直前の文中または一連の会話中など文脈でヲ格名詞(句)にあたるものが明示されていることが多い。

なお、「怠ける」「やく」はヲ格感情動詞でもヲ格名詞(句)または非出現例の割合が高く、かつヲ格名詞(句)を伴う割合との差も大きい語である。「やく」は 2 例を除いて会話文中に用いられており、会話ではヲ格名詞(句)が省略されやすいためだと考えられる。「怠ける」に関しては判断を保留する。

次に、表出的用法をもつヲ／ニ格感情動詞について資料③を見ると、「焦る」は若干ヲ格例が多いが、ヲ格例もニ格例も全体の中で見れば少数で、非出現例が 65%を占める。非出現例の割合が高い点がニ格感情動詞と共通する。また「焦る」は表 3 で A(使役化のみ可)に分類した語であり(ただし有情物を取りにくい②のグループ)、Aは「原因」のニ格と通ずるグループであった。そのほか「あこがれる」以外の語は、ニ格感情動詞よりも非出現例の割合が若干低い傾向にあるが、顕著な差が見られるわけではない。

「あこがれる」はヲ格例よりもニ格例に偏るのにも関わらずニ格感情動詞とは異なり、ニ格名詞(句)を伴う例が過半数を占め、非出現例の割合が低いことは注目すべき点であろう。ニ格感情動詞の「ほれる」「懐く」「なじむ」と同様の傾向をもつ。「あこがれる」「ほれる」はC(受身化も使役化も可能な動詞)に分類した語であり、「懐く」はB(受身化のみ可)に分類した語である(「なじむ」はD)。これらの動詞は補語との共起率の高さ、受身化が可能という点でヲ格感情動詞と共通する。

表出用法をもたないヲ／ニ格感情動詞(資料③)では、概ね、ヲ格例に偏る語ならばヲ格感情動詞と同様の傾向を、ニ格例に偏る語ならばニ格感情動詞と同様の傾向を示すが、比較的差がないものも見られる。

ニ格例に偏るものの、非出現例が突出して高い割合を示すわけではない語には「甘える」「興じる」「凝る」がある。これらはニ格例と非出現例が拮抗し、「親しむ」も比較的、割合に差がない。「こだわる」「堪える」はニ格例が多数(こだわる 71.3%、堪える 61.6%)を占め、非出現例は 2 割強である。B(およびD)に分類した語においては、ニ格例の割合が高いと言える。また、ヲ／ニ格例の偏りが少ない「頼る」(Bに分類)でもヲ／ニ格を伴う割合が高い。

また、ヲ格例に偏るもののヲ格感情動詞とは異なる様相を示す語では、「こらえる」がヲ格例と非出現例が同程度(ヲ格例 54.4%、非出現例 41.8%)、「ためらう」はヲ格例に偏るが、ヲ格例でも 10%程度で、非出現例が多数(80.4%)を占める。「喜ぶ」もヲ格例の割合は若干高いが、「ためらう」と似た様相である。「嘆く」は「ためらう」ほどヲ格例が少ないわけではないが(26.5%)、非出現例が半数近い(47.4%)。これらは「こらえる」を除いてCに分類した語であり、ヲ／ニ格名詞(句)の出現率に関してもヲ格感情動詞、ニ格感情動詞双方の特徴を有する。なお、「憤る」「怒る」「頼る」「はにかむ」はヲ／ニどちらかへの偏りが少ない語であるが、「頼る」を除いて非出現例が高い割合を占める(「憤る」が 41.7%、「怒る」が 88.7%、「はにかむ」が 89.1%)。

典型的な他動詞では「太郎は殴った」のようにヲ格名詞を欠いた文が提示された場合、「誰

／何を」が要求される(要求されやすい)のに比して、特にヲ／ニ格感情動詞は「太郎は喜んだ」でも座りが良く、ヲ／ニ格名詞(句)の要求度が低いように思われる。感情の誘因や指向先が問題にならず、感情の生起のみが問題になる場合だと言える。ヲ格をとり得る感情動詞であれば、ヲ格は必須項だと考えられるが、要求度が低いことが、ヲ、ニの両者を許容する要因の一つだと考える。ただ、ニ格名詞(句)が必須項か否かの判断は困難で、本論文ではこれ以上踏み込まない。

多くのニ格感情動詞で非出現例の割合が高いという事実は、このようなニ格感情動詞が感情の誘因や指向先を述べる説明的な文に用いられるよりも、感情の生起のみを単純に表すことが多いことに起因すると言えるのではないだろうか。ニ格感情動詞にはヲ格感情動詞がもたない表出用法をもつ動詞があり、表出用法は基本的に一語文であった。表出用法のないニ格感情動詞もこの延長線上にあると考えられる。

3. 第2章のまとめ

感情動詞の格体制別に表出用法の有無、受身化・使役化の可否、格形式との共起率を記述した。格形式との共起率はニ格感情動詞の方が概ね低い。ニ格名詞(句)に対する一文中での要求度がヲ格名詞(句)と比較して低いということであり、ニ格感情動詞には一項動詞に近い性質をもつ動詞が多いと考えることもできる。

受身化・使役化に関しては、ヲ格感情動詞とニ格感情動詞は、概ね格体制別に異なる傾向にあることが明らかとなった。ヲ格感情動詞の多くは直接受身化が可能な語が多く、ヲ格名詞(句)が典型的な動作動詞のヲ格に近い性質を有すること、ニ格感情動詞にもこのようなニ格名詞(句)をとる語が存在するとともに、いわゆる「対象」らしくないニ格名詞(句)をとる語もあることを示した。ヲ格感情動詞、ニ格感情動詞については先行研究でも指摘されていたことだが、各語について検討しより詳細に示した。また、先行研究では別々に課されていた受身化、使役化の両テストを組み合わせ、直接受身文も「交替型」使役も成立するCに分類される語が多数あることが明らかとなった。

ヲ／ニ格感情動詞は程度の差はあれ、概ねヲ格感情動詞とニ格感情動詞双方の特徴を有するようである。このことと、表出用法の有無から、典型的な動作動詞との近似性をスケールで考えると、その距離はヲ格感情動詞、ヲ／ニ格感情動詞、ニ格感情動詞の順に遠くなっていくと考えられる。ヲ／ニ格感情動詞がヲ格感情動詞とニ格感情動詞、両者の特徴を備えるということは、当然のことのように思われるかもしれない。しかし、後に見るように、ヲ／ニ格感情動詞の格選択はヲ格感情動詞、ニ格感情動詞の特徴から必ずしも導き出せるものではない。共通する特徴を有しながらも、格選択においてはそれが優位な要因ではない語があることが、ヲ／ニ格感情動詞の格選択に関して、個々の語の事例研究を行わなければならない理由の一つである。

第2章 調査資料・用例出典

本居宣長(1779(安永八))『詞の玉緒』(大野晋・大久保正編集校訂(1970)『本居宣長全集』第五巻, 筑摩書房所収)

『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』(1995) 新潮社

『朝日新聞』, 朝日新聞記事データベース『聞蔵(きくぞう)II ビジュアル for Libraries』

<http://database.asahi.com/library2/main/top.php>

【資料①】 ヲ格感情動詞の格表示¹³

ヲ格感情動詞	非共起	%	ヲ	%	ト	デ	その他	総数
あがめる	9	29.0%	21	67.7%	1	0	0	31
侮る	10	37.0%	12	44.4%	5	0	0	27
怪しむ	35	52.2%	20	29.9%	12	0	0	67
危ぶむ	6	35.3%	6	35.3%	4	0	1	17
哀れむ	51	38.3%	80	60.2%	2	0	0	133
案じる	20	18.9%	52	49.1%	25	0	3	106
悼む	5	15.6%	25	78.1%	0	0	0	32
慈しむ	14	51.9%	12	44.4%	0	0	0	27
いとう	9	13.8%	41	63.1%	0	0	15	65
いとおしむ	4	33.3%	8	66.7%	0	0	0	12
忌む	2	22.2%	7	77.8%	0	0	0	9
卑しむ	6	42.9%	7	50.0%	1	0	0	14
疑う	145	29.7%	200	41.0%	62	0	80	486
疎む	6	46.2%	7	53.8%	0	0	0	13
うらやむ	15	27.3%	39	70.9%	1	0	0	55
敬う	4	28.6%	10	71.4%	0	0	0	14
重んじる	5	14.7%	28	82.4%	0	0	1	34
惜しむ	9	5.6%	133	83.1%	2	0	15	159
嫌う	39	15.0%	215	82.7%	3	0	3	260
好む	145	39.9%	205	56.5%	0	0	13	363
さげすむ	36	45.6%	34	43.0%	9	0	0	79
慕う	21	18.3%	93	80.9%	2	0	1	115
偲ぶ	1	3.0%	32	97.0%	0	0	0	33
好く	21	18.9%	72	64.9%	0	0	18	111
そねむ	1	14.3%	6	85.7%	0	0	0	7
慎む	31	47.0%	20	30.3%	0	0	14	65
尊ぶ	2	10.0%	18	90.0%	1	0	0	20
怠ける	39	76.5%	11	21.6%	0	0	1	51
憎む	108	29.8%	247	68.2%	1	0	7	362
ねたま	6	35.3%	10	58.8%	0	0	0	17
はかなむ	0		5	100%	0	0	0	5
やく	10	71.4%	3	21.4%	0	1	0	14
許す	547	44.6%	8	42.7%	1	144	1227	109

¹³ 表中の数字は用例数を表す。非共起例とヲ格が共起する例のみ、右枠に総用例数における割合を示した。非共起例はヲ／ニ格名詞(句)にあたる語が一句中に共起していない例である。無助詞例はその他に分類した。

【資料②】 ニ格感情動詞の格表示

ニ格感情動詞	非共起	%	ニ	%	ト	デ	その他	総数
いじける	23	100%	0		0	0	0	23
浮かれる	29	90.6%	3	9.4%	0	0	0	32
うろたえる	82	91.1%	5	5.6%	3	0	0	90
おじける	18	94.7%	1	5.3%	0	0	0	19
かしこまる	59	96.7%	0		2	0	0	61
くじける	21	87.5%	2	8.3%	0	1	0	24
狂う	264	92.0%	17	5.9%	0	6	0	287
しょげる	39	86.7%	2	4.4%	3	1	0	45
ときめく	20	90.9%	1	4.5%	0	1	0	22
ふてくされる	29	90.6%	0		3	0	0	32
なじむ	25	35.2%	45	63.4%	1	0	0	71
懐く	16	32.7%	33	67.3%	0	0	0	49
のぼせる	56	82.4%	10	14.7%	0	2	0	68
へりくだる	8	66.7%	2	16.7%	2	0	0	12
ほれる	66	37.3%	111	62.7%	0	0	0	177
惑う	8	66.7%	4	33.3%	0	0	0	12

ニ格（表出）	非共起	%	ニ	%	ト	デ	その他	総数
白ける	44	97.8%	1	2.2%	0	0	0	45
焦れる	15	78.9%	4	21.1%	0	0	0	19
めいる	74	100%	0		0	0	0	74
安らぐ	8	100%	0		0	0	0	8
あきれる	255	71.0%	63	17.5%	41	0	1	359
懲りる	26	72.2%	10	27.8%	0	0	0	36
たまげる	27	84.4%	3	9.4%	2	0	0	32
参る	87	80.6%	21	19.4%	0	1	0	108
弱る	106	92.2%	9	7.8%	0	0	0	115

【資料③】ヲ／ニ格感情動詞の格表示

ヲ／ニ格	非共起	%	ヲ	%	ニ	%	ト	デ	その他	総数
憤る	10	41.7%	9	37.5%	3	12.5%	2	0	0	24
怒る	786	88.7%	46	5.2%	19	2.1%	26	6	5	886
頼る	52	23.7%	67	30.6%	100	45.7%	0	0	2	219
あきらめる	355	58.2%	122	20.0%	6	1.0%	71	1	56	610
恐れる	182	22.7%	539	67.2%	9	1.1%	50	0	22	802
こらえる	109	41.8%	142	54.4%	3	1.1%	8	0	1	261
ためらう	271	80.4%	36	10.7%	7	2.1%	22	0	2	337
嘆く	100	47.4%	56	26.5%	5	2.4%	51	1	1	211
恥じる	62	39.2%	83	52.5%	8	5.1%	5	0	4	158
誇る	27	27.0%	69	69.0%	6	6.0%	1	0	0	100
喜ぶ	888	71.1%	260	20.8%	10	0.8%	75	9	10	1249
甘える	56	52.8%	1	0.9%	47	44.3%	3	0	0	106
おびえる	243	67.7%	4	1.1%	99	27.6%	14	2	0	359
興じる	12	40.0%	1	3.3%	15	50.0%	2	0	0	30
苦しむ	375	70.6%	10	1.9%	101	19.0%	9	31	5	531
こだわる	25	26.6%	1	1.1%	67	71.3%	0	0	1	94
凝る	19	46.3%	1	2.4%	21	51.2%	0	0	0	41
親しむ	39	35.5%	1	0.9%	58	52.7%	12	0	0	110
堪える	216	25.6%	54	6.4%	519	61.6%	1	1	32	843
戸惑う	94	69.1%	1	0.7%	37	27.2%	3	0	4	136
はにかむ	49	89.1%	1	1.8%	2	3.6%	3	0	0	55
はやる	12	54.5%	1	4.5%	7	31.8%	2	0	0	22

ヲ／ニ格(表出)	非共起	%	ヲ	%	ニ	%	ト	デ	その他	総数
あこがれる	28	24.6%	17	14.9%	67	58.8%	2	0	0	114
いらだつ	93	78.2%	1	0.8%	18	15.1%	7	0	0	119
悩む	85	50.9%	12	7.2%	37	22.2%	14	6	13	167
迷う	167	54.9%	2	0.7%	39	12.8%	42	4	50	304
焦る	78	65.0%	7	5.8%	2	1.7%	33	0	0	120
驚く	1495	74.3%	9	0.4%	364	18.1%	95	7	0	2012

第3章 感情動詞の時間的性質

本章では、1節で感情動詞をアスペクトの観点から考察し、全体的な傾向としては格表示とアスペクトに緩やかな関連性があることを示す。2節でタ形連体修飾が表す意味にもアスペクトとの関連性が見られることを述べ、格形式と補語の要求度が関係することを述べる。3節ではヲ／ニ格名詞(句)の時間的性質を考察する。

1. アスペクトテスト

1.1. テスト設定

感情動詞のアスペクトに関して、日本語記述文法研究会編(2007)を参考に、次の(A)～(C)のテスト文を用いて観察を行なう。

- (A) a. ～始める
b. ～続ける
- (B) a. ～てくる
b. ～ていく
- (C) a. しばらく～スル
b. しばらく～ている

継続動詞ではまず(A)で適格となり、瞬間動詞であれば(A)で不適格となる。(A)で適格となる動詞のうち、動作動詞は(B)で不適格、変化動詞は(B)で適格となる(表1)。なお(B)は変化の進展を表す場合(「ミカンの生産量が増えて {きた／いった}」)、事態の出現(消滅)を表す場合(「どこからかいいい匂いがしてきた」)に限り、空間的移動(「花子が向こうから走ってきた」)や長期的継続(「太郎は長年ステージに立ってきた」)は含まない。また、(A)b の～続けるが反復を表す場合は適格としない。

【表1】アスペクトテストによる動詞分類

(A)	(B)	動詞分類
○	×	継続・動作動詞
○	○	継続・変化動詞
×	(×)	瞬間動詞

瞬間動詞のうち(C)a で適格となれば対象もしくは主体の変化が維持されるタイプ、(C)b で適格となれば対象もしくは主体の変化が残存するタイプまたは変化が維持されるタイプである。(C)で不適格であれば、変化がないタイプもしくは非可逆な変化を表わすタイプである。

ここで継続・動作動詞「殴る」、継続・変化動詞「暖まる」、瞬間動詞「死ぬ」でテスト

文の妥当性を確認しておく。

- (1) A-a. 花子が太郎を殴り始めた。
A-b. 花子が太郎を殴り続けた。
B-a.#花子が太郎を殴ってきた。
B-b.#花子が太郎を殴っていった。
- (2) A-a. 部屋が暖まり始めた。
A-b. 部屋が暖まり続けた。
B-a. 部屋が暖まってきた。
B-b. 部屋が暖まっていた。
- (3) A-a.*花子が死に始めた。
A-b.*花子が死に続けた。
- (4) C-a. しばらく {*一瞥した／座った／*閉まった／*死んだ}。
C-b. しばらく {*一瞥していた／座っていた／閉まっていた／*死んでいた}。

(1)から(3)のように、継続・動作動詞、継続・変化動詞、瞬間動詞はそれぞれ異なる振る舞いをする。また(4)に見るように、(C)aでは変化結果が維持されるタイプの「座る」(「座り続ける」が適格)のみが適格となり、(C)bでは「座る」と、変化結果が残存するタイプの「閉まる」(「閉まり続ける」は事態が複数生じている解釈であれば可、単独の事態の持続としては不可)が適格となる。「一瞥する」は変化がないタイプ、「死ぬ」は変化が非可逆なタイプの瞬間動詞である。次節で感情動詞について観察する。

1.2. ヲ格感情動詞・ニ格感情動詞のアスペクト

本節では、感情動詞がアスペクトテストにおいてどのような振る舞いをするのかを観察する。まずヲ格感情動詞とニ格感情動詞について見る。ヲ格感情動詞から「案じる」、ヲ格例に偏る保留動詞から「恨む」、ニ格感情動詞から「浮かれる」と表出用法をもつ「あきれる」の例文を挙げる。

- (5) A-a. 太郎は花子のことを {案じ／恨み} 始めた。
A-b. 太郎は花子のことを {案じ／恨み} 続けた。
B-a.#太郎は花子のことを {案じて／恨んで} きた。
B-b.*太郎は花子のことを {案じて／恨んで} いった。
- (6) A-a. 太郎は {浮かれ／*あきれ} 始めた。
A-b. 太郎は {浮かれ／#あきれ} 続けた。
B-a. 太郎は {浮かれ／*あきれ} てきた。
B-b. 太郎は {浮かれ／*あきれ} ていった。
C-a.*太郎はしばらくあきれた。

C-b. 太郎はしばらくあきれていた。

上記のテスト結果から、「案じる」「恨む」は継続・動作動詞、「浮かれる」は継続・変化動詞、「あきれる」は瞬間動詞であることがわかる。

全体のテスト結果を表 2 に示した。ヲ格感情動詞、ニ格感情動詞、表出用法をもつニ格感情動詞の順に変化動詞の割合が高くなっている。

【表 2】ヲ格感情動詞、ニ格感情動詞のアスペクト分類¹

	ヲ格感情動詞	ニ格感情動詞	ニ格感情動詞(表出)
継続・動作	あがめる、悔る、危ぶむ、案じる、悼む、慈しむ、いとう、いとおしむ、忌む、卑しむ、疑う、疎む、怪しむ、哀れむ、重んじる、さげすむ、うらやむ、敬う、惜しむ、好む、偲ぶ、そねむ、憤む、尊ぶ、はかなむ、許す、ねたむ、やく(28語) (恨む、はばかり、めでる、いぶかる、憂える、悲しむ、悔いる、悔やむ、洩る、懐かしむ、忍ぶ、楽しむ12語)	かしこまる、ときめく、ふてくされる、へりくだる、惑う (5語) (まごつく、ひるむ、焦がれる 3語)	
継続・変化	嫌う、慕う、怠ける、憎む (4語) (うぬぼれる)	浮かれる、うろたえる、おじける、くじける、狂う、なじむ、懐く(7語) (慣れる、おごる、くつろぐ、ひがむ、慌てる 5語)	白ける、焦れる、めいる、安らぐ、参る、弱る、むかつく、びびる(8語) (照れる)
瞬間	好く (恋う)	いじける、しょげる、のぼせる、ほれる (4語) (たじろぐ)	あきれる、*懲りる、*たまげる (3語) (*飽きる、困る)

(瞬間動詞のうち、(C)で適格とならず、非可逆的な変化を表すと考えられる動詞には*を、変化がないと考える動詞には※を付した。)

具体的に見ていくと、ヲ格感情動詞は全 33 語中 32 語が継続動詞で、このうち動作動詞が全体の約 8 割(28 語 84.8%)を占める。表出用法をもたないニ格感情動詞では全 16 語中 12 語が継続動詞で、このうち動作動詞が 5 語(全 16 語の 31.3%)、変化動詞が 7 語(同 43.8%)で、変化動詞の割合がヲ格感情動詞よりも若干高い。4 語ある瞬間動詞も変化のある動詞であり、変化動詞が 7 割近く(68.8%)を占めることになる。ニ格感情動詞については、継続・動作動詞と判断した語も、テスト文によって適格性に差があるが、(A)ab のどちらかで適格に、(B)で不適格になることを重視し、さらに語の意味からも瞬間動詞とは考えにくいことから、継続動詞としてある。表出用法をもつニ格感情動詞では、全 11 語中、継続・変化動詞が 8 語、瞬間動詞 3 語のうち 2 例が変化を表し、ほとんどの語(10 語)が変化動詞ということになる。ただしどのグループにおいても判断に迷った語がいくつか存在し、すべての語が明確に判定できるわけではない。この曖昧性自体も感情動詞の特徴と言えよう。

¹ 保留群の動詞は括弧内に示したが、以下の割合等の記述には保留群は含まない。

1.3. ヲ／ニ格感情動詞のアスペクト

次にヲ／ニ格感情動詞を見る。ヲ格をとる文、ニ格をとる文でそれぞれテストを行なった結果、表3のようになった。判断に迷うものには△を付した。

【表3】ヲ／ニ格感情動詞のアスペクト分類

	ヲ／ニ格感情動詞	ヲ／ニ格感情動詞 (表出用法あり)	ヲ格、ニ格で違いのある語
継続・動作	怒る、頼る、恐れる、 こらえる、ためらう、 嘆く、誇る、喜ぶ、興 じる、苦しむ、こだわ る、凝る、堪える、は にかむ (14語)	悩む	ヲ甘える、ヲ／ニ恥じる、 △ヲあきらめる (表出用法あり)ヲ焦る、 ヲ迷う (5語)
継続・変化	おびえる、親しむ、 はやる (3語)	あこがれる、いらだつ	ニ甘える (表出用法あり)ニ焦る、 (女・色香)ニ迷う (3語)
瞬間	憤る、戸惑う	驚く	ニ恥じる、ニあきらめる

ヲ格、ニ格の違いによってテスト結果に揺れが見られるものについては、ヲ格をとる場合に継続・動作動詞、ニ格をとる場合に継続・変化動詞または瞬間動詞と同様の振る舞いをする。以下に、ヲ格をとる場合でもニ格をとる場合でも変わりがない動詞として「苦しむ」(7)「驚く」(8)、格表示が異なるとテスト結果も異なる動詞として「迷う」(9)の例を挙げる。

- (7) A-a. 太郎は相手とのかけひき {を／に} 苦しみ始めた。
A-b. 太郎は相手とのかけひき {を／に} 苦しみ続けた。
B-a.#太郎は相手とのかけひき {を／に} 苦しんできた。
B-b.*太郎は相手とのかけひき {を／に} 苦しんでいった。
- (8) A-a.*太郎は相手の出方 {を／に} 驚き始めた。
A-b.*太郎は相手の出方 {を／に} 驚き続けた。
C-a.*太郎はしばらく相手の出方 {を／に} 驚いた。
C-b. 太郎はしばらく相手の出方 {??を／?に} 驚いていた。
- (9) A-a. 太郎はかけるべき言葉 {を／に} 迷い始めた。
A-b. 太郎はかけるべき言葉 {を／に} 迷い続けた。
B-a.*太郎はかけるべき言葉 {を／に} 迷ってきた。
B-b.① *太郎はかけるべき言葉 {を／に} 迷っていった。
B-b.② 太郎は美しい女 {*を／に} 迷っていった。

(7)の「苦しむ」はテスト(A)で適格となり、(B)で不適格となるため継続・動作動詞と考えられる。(8)の「驚く」はテスト(A)で不適格であるため瞬間動詞である。これらはヲ格でもニ格でも適格性に違いはない。一方、(9)の「迷う」はニ格名詞によっては違いが現れ、「かけるべき言葉」であればヲ格でもニ格でもほぼ差はないが、「惑わされる」意の「女・色香ニ迷う」では(9)B-b②のように、変化の進展を表すことができ、この場合、ヲ格に交替させることはできない。

ヲ、ニの別ではなく、テスト間で許容度に差がある動詞は「ためらう」「喜ぶ」(継続・動作)、「親しむ」(継続・変化)、「戸惑う」(瞬間)である。(10)に「喜ぶ」のテストを示す。テスト(A)aは許容できないが、bでは文法的になる。

- (10) A-a. *太郎は花子が来たこと {を／に} 喜び始めた。
 A-b. 太郎は花子が来たこと {を／に} 喜び続けた。
 B-a.*太郎は花子が来たこと {を／に} 喜んできた。
 B-b.*太郎は花子が来たこと {を／に} 喜んでいった。

すべてのテストで問題なく適格となるわけではないが、テストのうち 1 つでも適格になれば、その結果を重視した。ヲ格感情動詞、ニ格感情動詞と比較するとヲ／ニ格感情動詞は概して判断がつきにくいものが多い。

2. タ形連体修飾

アスペクトに関する現象としてタ形による連体修飾の様相を記述する。感情動詞にはタ形で名詞修飾した場合、過去ではなく発話時現在の感情を表すことができる動詞とできない動詞がある。被修飾名詞を「顔・表情・目」「気持ち・心」「様子・さま」「よう(だ)」に限定し、タ形が現在時の感情を表せるかを観察すると、(11)のようにタ形で修飾でき、テイル形でも修飾できる語と、(12)のようにタ形では修飾できない語があることがわかる。(11)a、a'は動詞だけの修飾で問題なく許容できる語、(11)b、b'は句修飾のほうが許容しやすい語である。(13)にはタ形で修飾できる語、(14)にタ形で修飾できない語の実例を挙げた(括弧内は筆者による)。

- (11) a. (退場に) {怒った／怒っている} 顔。
 a'. (退場に) {あきれた／あきれている} 顔。
 b. 退場に {いじけた／いじけている} 顔。
 b'. 君の {悲しんだ／悲しんでいる} 顔。
 (12) a. 次郎の退場を {*惜しんだ／惜しんでいる} 顔。
 b. 次郎の退場を {*怪しんだ／怪しんでいる} 顔。
 (13) a. 数人の登山者はその加藤のまわりを取りかこんでいた。口も利けないほど驚い

ている(／驚いた)顔つきだった。「あなたひとりですか」(新田次郎『孤高の人』)

b. ぎくつとしてふりかえった課長の眼にはうろたえた(／?うろたえている)表情が
でていた。(開高健『パニック・裸の王様』)

(14) 僕の母も再婚していまの父親のところにきたが、僕には、その厚子さんが判るな。
僕のところとかたちはちがうが、厚子さんが自分の母と母の新しい男を嫌っている(／#嫌った)気持が」
(立原正秋『冬の旅』)

表 4 に調査結果を示す。二格感情動詞とヲ／ニ格感情動詞は表出用法の有無によって分けて示した。表中の数字は斜線の左側がタ形、右側がテイル形の用例数で、例えばタ形 1 例、テイル形 0 例ならば、1/0 と記し、タ形、テイル形とも用例が見られなければ、0/0 を色付きのセルとして示してある。ヲ／ニ格感情動詞のうち、太枠の語は二格例に偏る語である。

【表 4】タ形連体修飾の被修飾名詞別用例数

ヲ格感情動詞	顔・表情・目	気持ち・心	様子	ヨウ	その他	備考
あがめる				0/3		
侮る						
怪しむ						(ル形のみ)
危ぶむ				0/1		
哀れむ				0/1		
案じる				1/1		
悼む						(ル形のみ)
慈しむ						(ル形のみ)
いとう						
いとおしむ						(ル形のみ)
忌む						
卑しむ						(ル形のみ)
疑う				0/1	11/0	
疎む						
うらやむ						(ル形のみ)
敬う						
重んじる					1/0	
惜しむ				0/1	1/0	
嫌う	0/1					
好む						(ル形のみ)
さげすむ						(ル形のみ)
慕う		1/0		0/1		
偲ぶ						(ル形のみ)
好く					1/0	
そねむ						(ル形のみ)
慎む					1/0	
尊ぶ						(ル形のみ)
怠ける		1/0			2/0	
憎む			0/1	0/1	6/0	
ねたむ						(ル形のみ)
はかなむ						
やく						
許す				2/1	4/0	

ニ格感情動詞	顔・表情 ・目	気持ち・心	様子	ヨウ	その他	備考
いじける				2/0	4/0	
浮かれる		1/0	1/0			
うろたえる	2/0		2/0	2/0	3/0	
おじける						
かしこまる	1/0		3/1		5/0	
くじける				1/0	1/0	
狂う			0/1	66/2	4/0	
しょげる	4/0	1/0		3/0		
ときめく					2/0	
ふてくされる		1/0		9/1	5/0	
なじむ					2/0	
懐く						
のぼせる	1/0					
へりくだる		1/0			2/0	
ほれる				0/1	1/0	
惑う			0/1			

ニ格（表出）	顔・表情 ・目	気持ち・心	様子	ヨウ	その他	備考
白ける	4/0	4/0			7/0	
焦れる						
めいる		4/0		1/0		
安らぐ						(ル形のみ)
あきれる	5/2		1/0	32/0	29/0	
懲りる						
たまげる				2/0	1/0	
参る				2/2	2/0	
弱る	2/0	2/0			3/1	

ヲ/ニ格感情動詞	顔・表情 ・目	気持ち・心	様子	ヨウ	その他	備考
憤る					2/0	
怒る	19/0		1/0	94/6	16/0	
頼る				0/1	2/0	
あきらめる	2/0		3/1	26/1	6/0	
恐れる	0/1	0/1	0/1	2/4	2/0	
こらえる	0/1	0/1	0/2	0/3	1/0	
ためらう			0/3	4/6	1/0	
嘆く				0/1		
恥じる			0/1			
誇る					1/0	
喜ぶ	1/0	1/0	2/2	1/10	5/0	
はにかむ		1/0		9/0	1/0	
甘える				4/0	3/0	
おびえる	26/0	4/0	2/0	69/0	6/0	
興じる					1/0	
苦しむ	0/1		0/4	0/1		
こだわる				0/1		
凝る					13/0	
親しむ		1/0		1	2/0	
堪える				5/1	4/0	
戸惑う	6/0		5/0	12/1	12/0	
はやる				0/1		

ヲ／ニ格（表出）	顔・表情 ・目	気持ち・心	様子	ヨウ	その他	備考
焦る			1/0		1/0	
悩む		1/0		0/2	1/0	
あこがれる				0/1		
いらだつ	1/1	1/0		2/2	1/0	
迷う			0/2	0/6		
驚く	17/2		18/1	86/1	105/0	

タ形またはテイル形での修飾の可否に関して、以下の特徴が挙げられる。

- ・ ヲ格感情動詞は 33 語から用例がない 7 語を除くと、26 語のうち、タ形修飾の用例が得られたのは 9 語(約 3 分の 1)のみで、タ形修飾の用例がない語が 3 分の 2 強(17 語)を占める。
- ・ 反対にニ格感情動詞では 25 語²のうち 2 語を除き、タ形で修飾できる語、あるいはタ形でもテイル形でも修飾できる語である。
- ・ ヲ／ニ格感情動詞では、タ形では修飾できない語はヲ格例に偏る語(「こらえる」「誇る」「嘆く」「恥じる」「苦しむ」「こだわる」)、もしくはニ格に偏り、かつ直接受身文が成立する語(「あこがれる」「迷う」)である³。つまりヲ格感情動詞に近い語である。

次節以降、ル形、テイル形と対立し、過去(・完了)を表すタ形を時制的用法、対立がなく、現在の感情を表すタ形を形容詞的用法として、タ形連体修飾の様相を考察する。

2.1. ヲ格感情動詞の時制的用法と形容詞的用法

先述のように、ヲ格感情動詞による連体修飾では、ほとんどの例において時制的解釈しかできない。タ形修飾を時制的用法と判断できるのは、典型的に、①タ形／ル形／テイル形でアスペクト対立がある。②被修飾語句以外に感情主、ヲ格名詞(句)が明示されている場合例である。例文によってはこのどちらかのみを満たす場合もある。

感情動詞のタ形で表される事態は過去に生起した事態であり、(15)(16)では、当然、その解釈を保ったままル形またはテイル形に替えることができない。

(15) この蝶の華麗な紋はこの時期、信長がむやみに好んだ意匠で、このときの薄羽織の紋がそうだった。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

(16) 萱、あれほど忌み嫌い憎んだ宿題をこの連中は要求しているのだ。

² 「むかつく」「びびる」は『新潮』に用例が見られないため除外する。

ex.) あいつの{むかついた／びびった}顔が見たい。

³ 「はやる」と、タ形修飾が「その他」にのみ用例が得られる「興じる」は受身化の操作に馴染まない語である(第 2 章 2.3.2.参照)。ヲ／ニ格名詞(句)がいわゆる「対象」を表す語と考えられるが、客観的判断材料を持たないため、判断を保留する。

(ゲーテ『若きウェルテルの悩み』)

- (17) あたしたちが浮かない顔をして、人生をこんな暗い目でながめているのも、元は
といえど勤労ということを知らないからだわ。あたしたち、勤労を卑しんだ人た
ちの子ですものね。(チェーホフ『桜の園・三人姉妹』)

- (18) どの位女が平中の為に、泣かされたか位は知っているのだ。もう一言次手につけ
加えれば、どの位苦しんだ夫があるか、どの位腹を立てた親があるか、どの位怨
んだ家来があるか、それもまんざら知らないじゃない。(芥川龍之介『羅生門・鼻』)

(15)(16)は被修飾名詞が感情の指向先の例で、(15)には感情主(信長)が明示されている。
(17)はヲ格を伴い、被修飾名詞が感情主の例、(18)も被修飾名詞が感情主で、ヲ格は伴わな
いが前文脈で怨まれる人物(平中)が示されている例である。このようにヲ格感情動詞のタ形
連体修飾では特定の時点を表し、感情主や感情の指向先といった補語を要求しやすい。次
の(19)では、ヲ格名詞「ワグネルの曖昧さ」を伴い、前文脈で示されていたとしてもヲ格名
詞(句)を省略することはできない。

- (19) ワグネルの「曖昧さ」を一途に嫌ったニイチェは、モーツァルトの「優しい黄金
の厳粛」を想った。(小林秀雄『モーツァルト・無常という事』)

第2章2.4節で述べたように、ヲ格感情動詞はヲ格名詞(句)を伴う例の割合が多く、補語を
強く求める傾向があるが、連体修飾に用いられる文のみを見ても、同様の傾向が現れ、ヲ
格感情動詞は項を強く引っ張り込む性質があると言える。

一方、少数ながらヲ格感情動詞にも形容詞的用法の例が見出される。

- (20) 「私にとっては非常に悪いわ」 その調子には、良人の怠けた(／怠けている) 気
持ちを細君のその気持へぐいと引き寄せるだけの力がこもっていた。

(志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』)

- (21) 私たちを苦しめた、うぬぼれた(／うぬぼれている) 地方的英雄、風のような将
軍たち、気まぐれな凌辱者のすべてを吸収して軍団は高粱畑のはるかかなたの地
平線を北にむかって移動し、たたかって、消えた。

(開高健『パニック・裸の王様』)

上記2例はテイル形でも許容しやすく、「かつて」などの時間副詞を付加することができな
い。過去の特定时に事態が成立したことを表すのではなく、「地方的英雄」「気持ち」の様
相を描写している。「怠ける」「うぬぼれる」は、ヲ格名詞(句)を要求しやすいヲ格感情動詞
の中であって比較的、共起率が低い動詞である(「うぬぼれる」はヲ格例に偏る保留群の語)。
第2章の資料①に示したように、ヲ格感情動詞の中でヲ格名詞(句)を伴わない非共起例が総
数の70%以上の語はこれら2語と「やく」だけで、「やく」にタ形連体修飾の例はない。こ

れらは直接受身文にできない。また「怠ける」「うぬぼれる」は変化動詞として分類した動詞で、このような点で大部分のヲ格感情動詞と異なる語である。形容詞的用法は被修飾名詞の状態を描写するが、動作が完了したのちに何も変化がなければ状態を描写することはできない、つまり動作の結果状態が維持なり残存なりしていなければ、形容詞的解釈とはならない。変化動詞だということが、形容詞的用法が可能である必要条件であろう。このことを金水(1994)も動詞の語彙概念構造から結果の状態を「焦点化」して派生される構造的形状動詞は、出来事を背景化し、結果の状態を前景化する、つまり結果の状態をもたない動詞からは構造的形状動詞は派生できないと述べる。ただし、変化動詞であれば形容詞的解釈になるということは意味せず、補語を引き込みにくいことやその他の要因も関係すると考えられる。

保留動詞群を除くヲ格感情動詞のタ形連体修飾文 73 例⁴のうち、68 例が時制的解釈しか許さない例だが、二格感情動詞では、次節で述べるように時制的解釈しか許さない例は 213 例中 50 例と多くない。

2.2. 二格感情動詞、ヲ／二格感情動詞

二格感情動詞による修飾では、形容詞的用法が多く見られる。ヲ格感情動詞が多く必要とした被修飾語以外の要素(感情主や感情の指向先、感情の誘因)を必ずしも要しない。次の例は被修飾語の様態を表していると言える。

- (22) そのときのあたしはパパの足もとでふるえているあわれな仔猫にすぎませんでした。それもあまりにも小さくてひ弱で、毛なみも生えそろわずにしょぼしょぼしていたので、かわいい仔猫というよりいじけた浮浪児みたいにみえたにちがいない。(倉橋由美子『聖少女』)
- (23) その安酒場に来る客といえば、やくざあがりの近所のパチンコ屋の店員とか、小さな町工場に勤めるふてくされた工員とか、定職にもつかず、そのときそのときの儲け口を漁りながら、競輪場やボートレース場に入りびたっているチンピラたちばかりです。(宮本輝『錦繡』)
- (24) こんな事もわからないのか、といったさも苦々しい表情で外国人にまくしたてられるとき、相手の言葉を理解しかねている日本人は、ほとんど卑屈になるか、反対にふてくされた傲慢さを示すかのどちらかになる。(五木寛之『風に吹かれて』)

(22)(23)は被修飾名詞が感情主の例、(24)は「ふてくされる」と項関係にない外の関係の修飾である。これらの感情動詞のタ形は特定時での事態の成立を描写しておらず、また二格名詞(句)を伴わない。動作動詞に分類したもので形容詞的に用いられる動詞には「かしこまった(顔付)」「ふてくされた(態度)」「へりくだった(物腰)」があるが、これらも

⁴カラ、タメ、トイウ、ノ、ダケ、ハズ、モノ、アマリ、ワケ等形式名詞を被修飾語とするものは除く。例外的にコトは非常に多く用いられていることと、その中にいくつか意味に差が見られるため含めてある。

変化動詞に分類した二格感情動詞と同様に、形容詞的用法の場合、二格名詞を伴わず、感情主ガ格も伴わない。

形容詞的用法では、時制的用法と異なり、(22)(23)のように内の関係であれば意味をほとんど変えずテイル形にすることができる⁵。また(24)のような外の関係の文ではル形にもテイル形にもできないものもあり、より形容詞的と言える。ヲ格感情動詞では事象描写に傾きやすいタ形修飾が、二格感情動詞では対照的に形容詞的に用いられる傾向にある。

ヲ／二格感情動詞の場合も、基本的には動作動詞には形容詞的用法が少ない。ただ「恐れる」は変化動詞の要素がありながらも形容詞的用法が見られず、反対に「はにかむ」「凝る」は動作動詞だが形容詞的用法が多く見られる。(25)が「恐れる」、(26)が「はにかむ」、(27)が「凝る」、(28)が二格感情動詞「惚れる」の例である。

(25) 責任を取らされて首をはねられるのを怖れた一人が、まずは耳にだけは入れておこうと、スルタンに告げたのである。 (三浦綾子『塩狩峠』)

(26) これを見たおとなの人があったら、このささやかな情景と、はにかんだ友情の表示のぎごちない内気な愛情と、ふたりの少年のまじめな細い顔とに、おそらくひそかな喜びを感じただろう。 (ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』)

(27) また彼女はお金がたまったとき、病院の廊下に売店をだしている天理教に凝った小母さんのところへ行き、牛肉の缶詰を買いこんだ。 (北杜夫『楡家の人びと』)
cf.) 「確かに綺麗な名前だけど、しかしずいぶん凝った名前をつけたな」
(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

(28) 父は、わがまま勝手にくらしてきた人なんですけど、そんな条件づきの結婚なんかやめちまえ、目さきの条件なんかにつられて一生棒にふることはない、結婚なんて、死ぬほど惚れた相手ができれば、さっさとするのがいちばんだっていうんです。」 (三浦哲郎『忍ぶ川』)

(26)の「はにかんだ」、(28)の「惚れた」はテイル形に替えることができず、より形容詞的である。なお、「凝る」は調査範囲内において、(27)以外は感情の動きを表すというよりも、参考例のように「細かいところまで心をくばった、工夫された」という意味での使用である。

二格感情動詞は二格名詞(句)を必ずしも要求しない傾向にあるが、ヲ格感情動詞が強く項を要求することは次の例からもうかがえる。

(29) a. いじけた {人／*失敗}。

b. 憎んだ人。

(30) 驚いた {??雷／人}。

⁵ タ形であれば特定の時間に縛られない状態であること、テイル形であれば一時的な状態であることを意味するように思われるが、タ形で現在の状態も表し得ることが重要である。

cf.) 太郎が驚いた雷。

(29)a の二格感情動詞「いじけた」では被修飾名詞「人」は主体(感情主)である。「いじける」はヒト名詞を二格にとらないために二格名詞相当の語であることが排除されるとも考えられるが、二格に立ち得る「失敗」では、「感情主ガ」を補わなければ許容できない。被修飾名詞が唯一項である内の関係の連体修飾文では、被修飾名詞は排他的に感情主であると言える。一方 b のヲ格感情動詞「憎んだ」では、「人」を感情主と解釈することも、誰かに憎まれた人物と解釈することもできるが、感情主だとした場合、ヲ格名詞相当の語が前文脈に示されていないと不自然である。(29)ab の違いは、感情の指向先もしくは誘因に対する要求の度合によるものと考えられ、ヲ格感情動詞の多くがヲ格名詞(句)を強く要求することを支持する現象である。ヲ／二格感情動詞の(30)「驚く」では、感情主が示されず動詞だけで「雷」を修飾すると不自然で、被修飾名詞が「人」の場合は感情主の解釈のみを許す。

変化動詞はタ形では変化の完了を表し、動詞によっては変化後もその状態が残存または維持される。その場合、過去のある時点で起こった変化に焦点が当てられているのか、変化後の状態に焦点が当てられているのかは文脈により、さらには文脈によっても判断しがたい場合もあるために、形容詞的用法との境界が曖昧である(cf.(29)a)。このように形容詞的用法は時制的用法と連続的である。形容詞的用法よりさらに形容詞に近いと考えられるのが次節で扱う評価的用法である。

2.3. タ形修飾の評価的用法

タ形による連体修飾文において、(31)のように、時間軸に縛られない属性・性質を表すことができる感情動詞に「あきらめる」「たまげる」「驚く」「困る」(「困る」は保留群の語)がある。

(31) 太郎は {困った／#困る／#困っている} 人だよ。

(31)の「困った人」は、太郎自身が「困った」状態にあるのではなく、「他人を困らせる」ような人であることを意味する。このような被修飾名詞「人」(=太郎)の属性を表す用法を評価的用法とする。この用法は、過去の特定の時点で困るという事態が生起したことを表す時間副詞が付加できない(「#昨日、困った人だ」 cf.)「あの頃、困った人だった」(属性を表す))。また感情主や二格名詞が示されることはない。これらの動詞はタ形で感情表出ができる動詞である(第2章表2)。

(32)から(35)に「呆れる」「困る」の被修飾名詞がヒトの例と、ヒト以外の例それぞれを挙げた。(36)は「驚く」の被修飾名詞がヒトの例である。

(32) 「何だい。おまえは三銭二厘しかないのか。呆れたやつだ。さあどうするんだ。
警察へ届けるよ。」 (宮沢賢治『銀河鉄道の夜』)

- (33) 東京は生き馬の目を抜くところだと、いなかには時から聞いてはいたが、こんなあきれた商売があるとは、思っていなかった。(山本有三『路傍の石』)
- (34) 「まあ、あきれたねえ、帰らないんだって。いったい、あの人、どこへ行っちゃったんだろうね、困った人だねえ。——今もおまえさんのおとっつあんのことで、きている方があるんだよ。——とにかく、まあ、おあがり。」(山本有三『路傍の石』)
- (35) 源氏は胸さわぐ。お姿を見たい。几帳を押しやって、お顔をながめたい、と男の好色ごころはとめどない。困った癖である。(田辺聖子『新源氏物語』)
- (36) 和倉は、「永野君、君は驚いた奴だなあ。いくら何でも、三堀のために二つ返事で、旭川くんたりまで行こうとはなあ」(三浦綾子『塩狩峠』)

上例のほかに被修飾名詞には次のものが見られた⁶。

「呆れる」：人・倅・重量・馬鹿・(あきれかえった) 野郎・(あきれかえった) 長男・うじ虫ども・おやじ・うぬぼれもの・お人好し・いくじなし・軍人さん・商売・(あきれはてた) 惨劇

「驚く」：男・話

「困る」：位置・出来事・問題・好色心・性分・性質・点・立場・結果・体質・男心

このように被修飾名詞を評価する用法はこれらの感情動詞に限られる。被修飾名詞から何らかの特徴を取り出すという点では、形容詞的用法と連続的であるが、被修飾名詞が誰かにそのような感情を抱かせる性質・特性があるということを表す点で異なる。

評価的用法のある感情動詞は、すべてタ形による表出用法をもつ。タ形で感情表出できる感情動詞はほかにもあるにも関わらず、「あきれる」「たまげる」「驚く」「困る」だけが評価的用法をもつ理由はどこにあるのだろうか。一つの仮説として、瞬間動詞ということが関わる可能性を考えたい。これら四語は表出用法をもち、かつ瞬間・変化動詞である。事態が「瞬間」であって意識化されにくい分、その結果の状態が残されていればそちらに焦点が合いやすい。高橋(1994)は「状態をあらわす用法」について「それ自身としては動作をもっているが、このくみあわせのなかでは、そのプロセスの側面はきえてしまって、動作の結果である状態の側面だけがうかびあがっている」(p.79)と述べている。高橋(1994)は、形容詞的用法として「いかにも花柳界に馴れた外国人の感じだった」(p.97 下線筆者)などを挙げ、同じカテゴリーに本論文で評価的用法とした「困った人」を挙げる。これらは特定の意味を表す場合にタ形でのみ用いられる、著しく非動詞化した特殊な用法と捉えられている。タ形で現在の感情を表せるということは、タ形で変化の過程が背景化され、現在の状態に焦点が当てられるということである。しかし、このことが評価的意味を表し得る

⁶ 「たまげる」の評価的用法は、調査範囲内では実例が得られなかったが、次の例のように評価的用法をもつと考えられる。

そんなことをやってのけるなんて、たまげた男だな。

こととどのように関係するかについては、表出用法をもち、かつ瞬間・変化動詞だが、タ形での評価的用法をもたない「懲りる」「飽きる」を考慮に入れつつ検討しなければならない。この二語は非可逆的な変化を表す(第2章表エラー! 参照元が見つかりません。参照)。このことが何を意味するのかについての検討は機会を改めたい。

2.4. 2 節のまとめ

連体修飾においてタ形によって現在の感情を表すことの可否が、格形式と連関することを確認した。二格感情動詞にはタ形が過去を表さない形容詞的用法で用いることができる動詞が多く、ヲ格感情動詞には少ない。ヲ／二格感情動詞の大部分も用例の偏る方に従い、片方の格形式のみをとる動詞と同傾向を示す。

上記の傾向に関与する点の一つとして、ヲ格感情動詞に継続・動作動詞が多く、一方で二格感情動詞に変化動詞が多い、つまり結果を含意する動詞が多いということが考えられるだろう。二格感情動詞の多くは変化動詞であり、タ形で示された場合、変化の結果が継続していることを表し得るが、ヲ格感情動詞ではタ形で示された場合、変化を含意しないため過去の意となる。また金水(1994)では、タ形による修飾は動作性を背景化し、状態性を前景化したものであるとされる。これに依れば、変化を表す二格感情動詞は前景化する状態が明らかなためにタ形で形容詞的に働くことができ、動作を表すヲ格感情動詞は動作性が残っており、形容詞的に働くことができないということになる。ただし、ヲ格例に偏る保留群の語において「悲しむ」「渋る」は動作動詞と判定したが、タ形での修飾が可能である。これらの語については今後検討が必要である。

さらに、ヲ格感情動詞に「怪しむー怪しい」のような同語根の形容詞があるものが多いことも関係するだろう。二格感情動詞には同語根の形容詞がなく、ある感情を表したい場合、選択肢は動詞のみであり、文末叙述表現でも連体修飾でも動詞を用いなければならない。連体修飾の基本は形容詞だと考えると、ヲ格感情動詞と二格感情動詞の違いは形容詞からの遠さにあるとも言えよう。

また、被修飾名詞がもつ性質・特性を表す評価的用法が「あきれる」「たまげる」「驚く」「困る」に見られることを述べた。これらが評価的用法で用いられるのは、①表出的用法をもつこと。つまり感情形容詞に近い働きができること、②変化結果を残す瞬間動詞であることに起因する可能性を指摘した。

3. 名詞(句)の時間的性質

1 節では動詞のアスペクト的特徴を観察したが、本節ではヲ／二格名詞(句)の時間的性質を記述する。ヲ／二格感情動詞の中にはヲ格であるのか二格であるのかによって名詞(句)の表す事態の時間的性質に違いが見られる動詞がある。

(37) a. …すると、部落の連中も、そう結論を[□]あせったりはしないだろう…

(安部公房『砂の女』)

b. …すると、部落の連中も、そう結論^二あせったりはしないだろう…⁷

- (38) a. それどころか、酒を飲むと彼はしきりに課長と握手し、いわれるままに猥歌を歌ったり、踊ったりさえした。「失地回復^をあせ^ててやる」

(開高健『パニック・裸の王様』)

b. 「失地回復^二あせ^ててやる」

(37)a では結論を出すことを「あせる」という意味になるが、b ではそのような解釈は出来ず、出された結論、つまりすでに眼前にある結論に対して「あせる」という解釈になる。これは名詞「結論」にモノ(産出物)を表す側面と共に、コトを表す事態性名詞としての側面があることによる。ここで注目すべきなのは、その違いがヲ／ニ格表示の違いとして現れているということである。(38)a のヲ格名詞は、「失地回復をすること」という意味にしか解釈できないのに対し、(38)b では a と同じ解釈に加えて「(誰かが)失地回復したこと」という解釈ができる。

このような現象が見られるのは一部の感情動詞であり、当然、動詞の語義により成立した事態しかとることができない動詞には見られない。ただ、次に示すようにこれに関連した現象はいくつかの感情動詞に観察される。以下で「喜ぶ」「驚く」の例を確認する。なお以下は実例における傾向を示すもので、断らないかぎり格交替の可否は問題にせず、内省において格交替可能な例があることは否定しない。

ニ格をとる(39)の「馬車で乗りつけた身分の高いロシア人の訪問^に」、(40)の「みんなが来たこと」はすでに成立した事態であり、(41)の部署割りがよい所に決まった「武運のよさ」はその時点で認識した、一時的な状態を表している。一方ヲ格をとる(42)では、「客が増えたこと」は変化を表しており、事態の展開全体に焦点が当たっていると言える。また(43)の「雄弁」は文脈から「雄弁であるという性質」を指している。(41)の「武運のよさ」も(43)の「雄弁」も共に状態ではあるが、ここでの「武運のよさ」が「雄弁」と異なる点は、一時的な状態として捉えられているか、恒常的な性質として捉えられているかである⁸。

- (39) いまや彼は、馬車で乗りつけた身分の高いロシア人の訪問^に、すっかり喜び、興奮していたのである。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

- (40) 「ぼくも今日は彼を見てびっくりしたほどですよ」とゾシーモフはみんなが来たこと^にひどく喜んだ様子で言いだした。(ドストエフスキー『罪と罰』)

- (41) 越前の本野に乱入するための戦闘行軍の部署割りが、先頭ときまったのである。光秀は自分の武運のよさ^によこび、「ありがたき仕合せに存じます」と御礼を申しのべた。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

⁷ 筆者が実例から交替させた格形式をカタカナで示す。

⁸ この二つの語自体は恒常的にも一時的にもなり得る。

(A) 太郎のここ一年の武運の良さ。／太郎の生まれながらの武運の良さ。

(B) 太郎は今日に限って雄弁だ。／太郎は雄弁な男だ。

- (42) もとより政友会が後退しては困るが、急を告げる政情不安に伴って来訪する客の殖えたことを喜んだのである。(北杜夫『楡家の人々』)
- (43) 雄弁を喜ぶのは信州人の特色で、こういう一場の挨拶ですらも、人々の心を酔わせたのである。(島崎藤村『破戒』)

二格名詞(句)は事態内部に展開や幅がないものと見なされ、ヲ格名詞(句)は事態内部に展開がある、もしくは現時点だけの実現ではない事態と見なされているのではない。つまり、感情の生起時の視点のみで捉えられているのが二格名詞(句)なのではないか。

しかし、「怒る」ではこのような差は見られない。(44)(46)はそれぞれ二格例、ヲ格例だが、二格名詞(句)、ヲ格名詞(句)はどちらも眼前の様子や既に成立した事態で、事態の展開や幅を捉えたものではない。一方(45)の「食べっぷり」や「偏食」は習慣的なことであり、(47)の「同じ番組に政治家が芸能人と一緒に出演するようになったこと」も非個別的事態として描かれており、格表示は異なるが、両例とも現時点だけの実現ではない事態として捉えられる。

- (44) (筆者注：下宿の三人は)父親の態度に怒りだしたのか、ないしはグレーゴルのような存在が隣の部屋にいたなどとは夢にも思わなかったのに、それがいま自分たちになわかってきたというので怒りだしたのか、これはもうだれにもわからなかった。(カフカ『変身』)
- (45) ちがう、私が伸子の、贅沢なお菓子の食べっぷりや、気まぐれな偏食に怒るのは、そんなものではない。(野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』)
- (46) なんでも小学校四年生の父が、受け持ちの先生に誤解されたことをおこって、級友をそそのかして一日ストをやったというのだ。(壺井栄『二十四の瞳』)
- (47) ようするに同じ番組に政治家が芸能人と一緒に出演するようになったことを怒っているのである。(『朝日新聞』2007年4月2日朝刊)

次に、二格感情動詞、ヲ格感情動詞について見ていく。二格感情動詞「あきれる」では、性質などの半永久的なものに「あきれる」ということは十分考えられるにも関わらず、実例においては、ほとんどが眼前の事態や発話現場で接した事物・情報に「あきれる」例である。(48)の二格名詞(句)は、通常は恒常的なものと考えられる「性質」であるものの、(49)は「変わり身の早さ」の程度が甚だしいこと、(50)はいくつか「自分」というものがある中で「そんなことを平気で言える自分」というように個別的、具体的な事象であることが多いといえる。

- (48) (蝮め、なかなか手に乗って来ぬようだ)と信秀は、蝮の用心ぶかい性質にむしろあきれて、むしろこちらが根くたびれてきた。(司馬遼太郎『国盗り物語』)
- (49) 「すると、いまは？」／「日立。」／「日立？ 日立の工具？」／「そう。旋盤工。」

私は、その変り身の早さにあきれて、しばらく彼の顔をみつめて黙っていた。

(三浦哲郎『忍ぶ川』)

- (50) 吟子は心とはまるで別のことを言っていた。言いながらそんなことを平気で言える自分に呆れていた。
(渡辺淳一『花埋み』)

同じくニ格感情動詞「たまげる」の例(51)は、その時耳にした「ドスン、ドスンという音」がニ格名詞(句)となっており、「あきれる」と同様である。

- (51) 町に足をふみいれると、いきなり、見たところものすごい形をしたやかましい機械のドスン、ドスンという音に、たまげてしまう。
(スタンダード『赤と黒』)

(48)以外は感情の生起時の視点のみで捉えられていると言え⁹、「喜ぶ」のニ格例と同様の傾向を示す。

次にヲ格感情動詞「うらやむ」「嫌う」の例を挙げる。

- (52) 「見給え、土屋君は必定出世するから」こう私語き合う教員同志の声が耳に入るにつけても、丑松は自分の暗い未来に思比べて、すくなくも穢多なぞには生れて来なかった友達の上を羨んだ。
(島崎藤村『破戒』)

- (53) 吉川が信夫の幸福をうらやんだり、そねんだりすることなく、いつまでもしあわせであるようにと書いてくれた心がうれしかった。
(三浦綾子『塩狩峠』)

- (54) さらに恒夫が、自分に会うのを嫌っていたことを七瀬は思い出した。七瀬に恋していた恒夫は、そのために自分の醜い心が七瀬に読まれることをひどく怖れ、七瀬の前にほんの僅かな時間さえ姿を見せようとはしなかったではないか。

(筒井康隆『エディプスの恋人』)

- (55) 千束町で卑しい稼業をしている実家、そこの娘だと云われることをひどく嫌って、親兄弟を無智な人種のように扱い、めったに里へ帰ったことのない彼女。

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

(52)の「身の上」は友達に、(53)の「幸福」は信夫に備わっているもの、いわば属性に近いものとして認識され、それをうらやむのである。(54)の「自分に会うの」、(55)の「卑しい家業をしている家の娘だと云われること」という名詞句は一回性のものだと考えると具体的な事象ではあるが、この場合、「(何度かあるだろう)このような事柄」というように非個別的事態として捉えられている。「喜ぶ」のヲ格例のように、現時点だけの実現ではない事態として捉えられる。全ての感情動詞がこのような傾向を示すわけではないが、上記の4

⁹ (48)もその場における「蝮」の反応を受けた感情であり、感情の生起時の視点のみで捉えられていると言えるかもしれない。一方ヲ格感情動詞であっても同様に、その場において感情の指向先・誘因に接したことで引き起こされた感情を表す例((46)など)が見られる。現時点では、感情主がヲ／ニ格名詞(句)に接するという事実と、感情の生起時の視点のみで捉えることとは別だと考えておく。

語に関しては「喜ぶ」と同じ傾向を示すと言える。

4. 第3章のまとめ

本章では、アスペクト的特徴、名詞(句)の時間的意味特徴を考察した。動詞のアスペクトに関しては、先行研究で詳細に検討されることの少なかった感情動詞のアスペクトが一様ではないこと、一方で、先行研究の指摘の通り、ヲ格感情動詞とニ格感情動詞の意味的特徴に持続／一時という大まかな傾向に差があることが明らかとなった。名詞(句)の時間的性質はヲ／ニ格感情動詞において、格選択の要因になっている語(「喜ぶ」「驚く」)が存在し、その場合、ニ格例は感情の生起時のみの視点で捉えられた内的展開のない事態であって、ヲ格例は事態内部の展開を含む比較的幅のある事態や非個別的事態であることを指摘したが、このことは、ヲ格感情動詞が持続的、ニ格感情動詞が一時的だとの指摘に適合すると言えよう。ヲ／ニ格感情動詞には名詞(句)の意味特徴においても、格形式によって、時間的意味に差異をもつ語がある一方で、このような差異が見られない語も存在し、この点でも一様ではない。

第3章 調査資料・用例出典

『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』(1995) 新潮社

第4章 現代語「喜ぶ」の諸相

現代語の「喜ぶ」(以下、ヨロコブ)は、「太郎はその知らせ {を／に} 喜んだ」のようにヲ／ニ格両用の動詞である。感情動詞に関する先行研究は第2章で挙げたが、感情動詞の格体制に関して扱った先行研究では、ヲ／ニ格感情動詞の代表と目されていると言っても良く、ヨロコブを取り上げたものが少なくない。しかしヨロコブのヲ／ニ格選択の要因が十全に明らかになっているとは言えない。本章では1節で先行研究を検討したのち、2節でヨロコブのアスペクト的特徴と主体性の確認を行なう。3節ではヨロコブの様相を実例に基づいて記述し、格選択の要因を探る。

1. 先行研究と問題の所在

まず、ヲ／ニ格をとり得る感情動詞に言及する研究で取り上げられることの多いヨロコブについて、先行研究の議論と問題点を示す。ヲ／ニ格感情動詞を扱った主な先行研究に Endo and Zushi(1993)、BANDO(1996)(1997)、影山編(2001)、山川(2004)、清水(2007)、Akita(2007)などがある。このうち、ヨロコブに紙幅を割いている Endo and Zushi(1993)、BANDO(1996)(1997)、Akita(2007)を取り上げる。

Endo and Zushi(1993)は、通言語的観点から感情動詞における stage(場面)/ individual(個体)-level について論じたもので、ヲ、ニの両格をとる動詞としてヨロコブを扱う。ヲ格をとる場合とニ格をとる場合とで異なる意味範疇を設定し、場所を表す付加詞との共起の可否から、ヲ格をとる場合は stage-level の対格動詞、ニ格をとる場合は individual-level の非対格動詞だとする。ニ格例が非対格動詞であることの証左として、テイル形の解釈がニ格例では状態の解釈に、ヲ格例では動作継続の解釈になることを主張している。またニ格名詞句は原因の意味役割を担うとする。Endo and Zushi(1993)の主張に従うと、同形態のヨロコブが二つの異なる動詞だとしなければならず、また、ヲ格、ニ格が共起する例も説明できない。さらに次の例からはニ格例は individual-level とは捉えられない。「太郎は研究室で実験の成功に喜んだ」や、ニ格のみをとる「あきれる」の例「その瞬間、太郎は花子にあきれた」は文法的だと判断できるが、individual-level の語であれば時や場所を表す表現と共起しないはずである。

BANDO(1996)も、感情動詞のニ格名詞句とヲ格名詞句の意味役割について考察し、Endo and Zushi(1993)と同様に、ニ格名詞句は原因の意味役割を担うとする。加えてニ格名詞句には対象の意味役割をもつものもあり、なかには対象の意味役割しかもたないものもあること、ヲ格名詞句は対象の意味役割をもつことを指摘する。その中でヲ／ニ格感情動詞の代表として「喜ぶ」について検討し、次の例(1)において、ニ格名詞句(「メアリーからのプレゼント」)は原因と対象の両者に解釈できるとする。

- (1) a. ジョンはメアリーからのプレゼントに喜んだ。

b. ジョンはメアリーからのプレゼントを喜んだ。

(1) a,b の解釈の違いとして、文脈がない場合、二格例(1)a はジョンが「メアリーからのプレゼント」を予想していなかったこと、プレゼント自体ではなく、(プレゼントをくれた)メアリーに対して喜んでいるのであり、プレゼントの中身を知らなくても良いとする。一方、ヲ格例(1)b はプレゼントが何らかの形で予期されたもので、プレゼント自体に対して喜んでおり、また中身を知っていなくては不自然な文になるとする。中身を知っているか否かに関しては Endo and Zushi(1993)も同様の指摘をする。

次の(2)に関しても、BANDO(1996)では、ヲ格例では成功そのものに対して喜ぶのに対し、二格例では成功によってもたらされる何かに対して喜ぶとされる。この指摘は Pesetsky(1995)の英語心理動詞に関する指摘を踏襲するものである。

(2) a. 父の成功に喜んだ。

b. 父の成功を喜んだ。

BANDO(1997)ではこの違いが、何に起因するものなのかを考察し、二格名詞は項ではなく付加詞で、対格動詞であるヨロコブの項は *pro*(空)であると分析する。原因／対象の解釈の揺れはこの *pro* の解釈に起因し、*pro* の解釈が二格名詞の解釈と異なれば二格名詞は原因に、同じであれば原因とも対象とも捉えられるとする。しかしこのように考えても、BANDO(1996)が述べる解釈の違いがどのように導かれるのか明らかではない。

確かに、文脈がなく、(1)(2)の a と b をそれぞれ対比した場合、指摘されたような解釈の違いが読み取れるように感じる一方で、筆者にとっては前提なく導かれる解釈ではなく、解釈の可否は話者によって揺れが見られるのではないだろうか。文脈次第ではこれらの解釈は必ずしも保証されるわけではないと思われる。予期について、実例では二格例にもヲ格例にも予想外のモノ(コト)をとる例が存在する(例(3)(4))。

(3) 「でも、博物館はまだある」男は言った。退屈な仕事の思わぬ中休みを喜んで、会話をひきのばしている。
(レジナルド・ヒル『幻の森』)

(4) 不意の来訪に美音は喜び、蔵之介の部屋に通し、茶と羊羹をだしてくれた。
(鈴木英治『闇の剣』)

清水(2007)は従来の「原因」「対象」という意味役割の内実を引用構文との関係によって説明し、ヲ／二格感情動詞についてもヲ格が「対象」、二格が「原因」の意味役割を担うとする。意味役割に関する先行研究の主張をそれまで扱われてこなかった構文環境から裏付けたものである。

以上の先行研究は意味役割の異なりを重視している。しかし「いい女に惚れる」のように、感情を引き起こす誘因と感情の指向先が同じであることは十分に考えられる。つまり

ヲ格名詞とニ格名詞が「対象」とも、「原因」とも捉えられるということである。ヨロコブに関して、「研究室の皆が珍しいお土産に喜んだ」「珍しいお土産は研究室の皆に喜ばれた」のように、ニ格例でも直接受動化が可能である。先行研究で「対象」の意味役割をもつことの根拠の一つとして用いられた直接受動化テストは、同一の動詞であっても、ニ格名詞(句)の種類(ヒトかモノか)や意味内容によって可否が変わる。もちろん「対象」「原因」の片方の解釈に傾く例があることは否定しない。また片方のみの格形式をとる感情動詞についてはニ格名詞が「原因」、ヲ格名詞が「対象」の意味役割を担うと言ってもよい傾向があるように考えられ(第2章)、「原因」「対象」という意味役割も重要な観点だろう。しかし一つの名詞が感情の生起という事態に関して、原因でも対象でもあり得るということも考慮に入れ、「原因」「対象」という見方とは別の観点からもヲ、ニの選択要因を探る必要がある。

Akita(2007)は、感情動詞のアスペクト的特徴について、次の三点からアスペクト的特徴は格表示の決定要因とはならないと述べる。

①文法性判断の揺れ。先行研究では(A)の a は「しばらくの間」が、b は「一瞬」がそれぞれ非文法的だとされるが、許容する話者も少なからずいる。

- (A) a. 子どもたちがその思いがけないプレゼントに {一瞬／しばらくの間} 喜んだ。
b. 子どもたちがそのプレゼントを {一瞬／しばらくの間} 喜んだ。

②重複擬態語(「じろじろ」など)と共起した場合に、元は瞬間的な動作と継続的な動作の両義的な文であっても瞬間的な解釈ができなくなる(B)。

- (B) a. ケンはマイを {一瞬／しばらくの間} 見た。
b. ケンはマイを {*一瞬／しばらくの間} じろじろ見た。

③擬態語による感情表現(「はっとする」「おろおろする」など)はニ格のみをとる。

またヲ／ニ格感情動詞は、事態を引き起こしている原因と引き起こされた事態との両方に「視点」¹を置くことができる動詞であり、原因が強調される場合はニ格を、起こった事態、つまり感情が引き起こされたことが強調される場合はヲ格をとるとする。

本論文の立場は、同一の形態をもつ動詞は同一の動詞であり、動詞が表す意味の幅の故にヲ／ニ格の両者を許容すると考える。この点で同形態の動詞に二様の構造を想定せずに済む Akita(2007)の主張と基本的な方向性を同じくする。それでも視点だけでは、例えば次の(5)を説明するのは難しい。「ケーキ」と「ショール」を比べて「ショールのほうを」と示しており、感情の誘因または感情の指向先に焦点が当たっていると考えられるためである。

¹ 影山(1996)を発展させたもの。

- (5) ハイジには、おばあさんが、ケーキより灰色のショールのほうをずっとよるこんだのが、ふしぎでなりませんでした。(ヨハンナ・シュピリ著／上田真而子訳『ハイジ』)

例文判定への疑問(例えば、「マイはミキの結婚 {に／??を} 思わず悲しんでしまった」(p.291)は筆者にとってはどちらも許容できる)を含め、Akita(2007)でもヲ／ニ格をとった場合の各々の差異、またこの差異がなぜそれぞれヲ／ニで表示されるのかが明らかになったとは言えない。

なお、BANDO(1996)はヲ／ニ格感情動詞は、意味役割の違いから、交替可能に見えても自由交替ではないと結論付けるものである。ヲ／ニ格感情動詞が常に交替可能なわけではないという結論には同意しつつ、本論文では同一文において格交替させられる例も、交替させられない例も扱う。既述のように、一つの動詞において複数の格体制があるという点に重きを置き、同一文では交替不可の例も含めて考察する。

2. ヨロコブのアスペクト的特徴及び主体性

2.1. アスペクト的特徴

まず、ヨロコブのアスペクト的特徴を見る。先行研究でも確認されているが、ヨロコブは「*喜ぶ!／*喜んだ!」のように、ル形でもタ形でも表出用法をもたない。また「私は喜ぶ」では現在の状態を表さない。これらのことから、状態動詞ではないと言える。

ではどのような動きを表す動詞なのか。以下では、具体名詞、節、抽象名詞をとる例でそれぞれ検討する。これは従来、ある語に関する文法性判断は、単一の例文に対する操作で行われることが多かった(本論文第3章でも、扱う語が多く煩雑さを避けるため、基本的に異なる名詞(句)での判定を行っていない)が、後に見るように、名詞(句)によって文法性が異なる場合があることを考慮したためである。

(6)に示したテイル形は、a,bにおいてはヲ、ニの違いに関わらず、動作継続とも結果継続とも捉えることができ、解釈が揺れる。cは結果継続の解釈のみが成立するように思われる。このように、ヨロコブのテイル形の解釈は両義的である。

- (6) a. 太郎は花子のプレゼント {を／に} 喜んでいる。
b. 太郎は花子が来てくれたこと {を／に} 喜んでいる。
c. 太郎は友だちの結婚の知らせ {を／に} 喜んでいる。

(7)から(9)に示したアスペクトテストでは、ヲ、ニどちらであっても「～続ける」の付加はcの「知らせ」以外は文法的だが、「～始める」の付加は少々不自然で、「～終わる」の付加は許容されない。

- (7) a. ??太郎は花子のプレゼント {を／に} 喜び始めた。

- b. ??太郎は花子が来てくれたこと {を／に} 喜び始めた。
- c. ??太郎は友だちの結婚の知らせ {を／に} 喜び始めた。
- (8) a. 太郎は花子のプレゼント {を／に} 喜び続けた。
- b. 太郎は花子が来てくれたこと {を／に} 喜び続けた。
- c. *太郎は友だちの結婚の知らせ {を／に} 喜び続けた。
- (9) a. *太郎は花子のプレゼント {を／に} 喜び終わった。
- b. *太郎は花子が来てくれたこと {を／に} 喜び終わった。
- c. *太郎は友だちの結婚の知らせ {を／に} 喜び終わった。

「弁当を食べ始めた／食べ続けた」「氷が溶け始めた／溶け続けた」「*時計が壊れ始めた／*壊れ続けた」からわかるように「～始める」「～続ける」は継続動詞に付加でき、瞬間動詞には付加できない。ヨロコブでは「～始める」が付加しやすい一方で、「～続ける」の付加はc以外文法的である²。「～始める」が付加できるとした場合、ヨロコブは動作継続動詞だが、許容ににくいとすると、継続的な動きを表しにくい一方で、持続時間を表すことはできるということになる。

「～終わる」が非文法的になるのと同様の結果が、「〈時間〉で」との共起テストでも得られる。三原(2000)では「〈時間〉で」との共起不可が、動詞が終了限界をもたないことの証拠とされるが、動詞自体には明確な終了時点をもたない「食べる」でも「そのケーキを食べること」のように特定の対象を伴うと終了時点が設定できる。つまり外的に限界点を付与すれば、(10)aの終了限界をもつ「溶ける」と同様に、「〈時間〉で」との共起が可能になる((10)b)。しかし(10)c～eのヨロコブの例では、ヲ／ニ格名詞を伴っても、不適格または非常に不自然である。

- (10) a. 氷が1時間で溶けた。
- b. そのケーキを5分で食べた。
- c. ??太郎は花子のプレゼント {を／に} 一瞬で喜んだ。
- d. *太郎は花子が来てくれたこと {を／に} 一瞬で喜んだ。
- e. 太郎は友だちの結婚の知らせ {*を／??に} 一瞬で喜んだ。

終了限界に関しては、次の「～かける」の付加テストからもわかる。

- (11) a. 太郎は花子のプレゼント {を／に} 喜びかけた。
- b. *太郎は花子が来てくれたこと {を／に} 喜びかけた。
- c. 太郎は友だちの結婚の知らせ {を／に} 喜びかけた。

² (8)cが不適格な理由は、感情の発生時は「知らせ」自体が感情の指向先、もしくは感情の誘因であったとしても、感情が持続する場合、「知らせ」自体ではなく、知らせによってもたらされた内容が問題になるためではないだろうか。

継続動詞の多くは「ケーキを食べかけた」のように、動きの開始直前の解釈と動きの途中の解釈とができる。「歩きかけた」では開始直前の解釈しかできないが、「駅まで歩きかけた」のように終了限界を外的に付与すれば、動きの途中の解釈もできる。ヨロコブは終了限界を外的に付与することも難しいと言え、「食べる」「歩く」などの典型的な主体動作動詞とは異なる。

なお、「喜んできた」「喜んでいった」も許容できないため、継続的な主体変化動詞でもない。ヨロコブが継続的な動きを表しにくいと考えると、持続期間は有することから、何らかの変化動詞の可能性が浮かぶが、その一方で終了限界も有さないため、瞬間的(変化)動詞の可能性もある。瞬間的な動きの場合、期間が短すぎるため、終了限界テストには合格しにくい。(12)「座る」のような変化結果の維持期間をもつ動詞に似た振舞いをする。瞬間動詞は変化があるならば動詞自体に終了時点が含まれるが、「～終わる」の付加ができない。

- (12) a. ??座り始めた／*座り終わった。 (単一の主体の動作として)
 b. 座り続けた。 (変化結果の維持。*動き・変化の進行)
 c. {一瞬で／??3分で}座った。 cf.) 3分でチャーハンを作った。

一方で「〈時間〉で」の付加テストには瞬間動詞であっても「一瞬で」であれば、適格になる(c)。しかしヨロコブは「一瞬で」を許容しない(例(10))。

以上のようにヨロコブは継続動詞としても瞬間動詞としてもアスペクトテストに完全に合格するわけではない。瞬間動詞だと考えると、「喜んでいる」が結果継続を表しているように捉えられる一方で、動作継続のようにも捉えられること、つまりテイル形の解釈の曖昧さが問題になる。テイル形の解釈において動作継続を許容し、瞬間動詞であれば動作継続の解釈にならないこと、「旅行する」「休む」など動作継続動詞だと考えられるにもかかわらず、「～始める」を付加できない(#旅行し始める／#休み始める)動詞もあることから、ヨロコブは動作継続動詞だとしておく。ヨロコブが「～始める」を許容しないのは語義の問題だと考える。テイル形の解釈の両義性が何に起因するのかについての考察は稿を改めるが、ヨロコブが感情主の動作であると同時に感情主の内面の変化を表し、再帰的な意味³をもつと考えることで、両義性を説明できる可能性がある。

上記の用例から、同一の文脈で同一の名詞(句)をとるのであれば、格表示の違いはアスペクト的性質に関与しないと言える。

³ 「(服を)着る」のような再帰動詞は、動詞が表す働きかけが補語(ヲ格名詞)を介して主体に及ぶが、ヨロコブはヲ／ニ格名詞を介して働きかけるわけではない。したがって厳密な意味での再帰性をもつとは言えないが、動作でもあり、変化でもあるという点では、再帰動詞に近い性質をもつと言える。また、この点から考えると瞬間的な主体変化動詞に近い性質をもつとも言える。

2.2. 主体性及び意図性

ヨロコブの主体性については、仁田(1991)に従い、命令表現の可否によって考察する。(13)aのようにヨロコブは命令形で用いることができる。ただし感情が目に見える形になれば第三者には感知できないため、感情の生起というよりも感情が表面化することを命令している。「もっと」を共起させるとより自然になる(b)ことから、感情の生起に対する命令よりも、「動きの達成への過程の遂行を命じた過程命令」(仁田 1991 p.245)だと言える。また「喜べ」が許容できるのは、喜ぶべき状況で喜んでいないのを見た場合⁴であり、使用できる状況が限られている。

禁止の表現は問題なく成立し(c)、実現しないように努めることができる動詞であると言える。仁田(1991)が肯定命令はできないが禁止はできる動詞として多くの感情動詞を挙げるように、ヨロコブもそのひとつだと言える。

(13) a. A : 喜べ(よ) !

B : いや、喜んでるよ。

b. もっと喜べ !

c. 喜ぶな !

d. ?合格 {を／に} 喜べ !

なお、ヲ／ニ格名詞を伴うと、どちらの格表示でも少々不自然になり(d)、ヲ／ニで主体性に差はないようである。

一方で、主体性とは異なる概念として意図性がある。事態を主体が成立させようと意識的に努力するかが問題になるため、(14)では、主体性が全くない動詞では非文法的になる(a)が、過程のみであっても自己制御性があれば自然になる(b)。ヨロコブでも「～ようとする」は文法的であり(c)、ヲ格のほうが適しているように思われる。

(14) a. #紅葉が川を流れようとした。

b. 花子は落ち着こうとした。

c. 花子は太郎の合格 {を／?に} 喜ぼうとした。

ヲ格表示の方が、意図性が高いと言えそうである。

⁴ 例えば、「食べろ」は食べるべき状況にあるのに食べていない場合だけでなく、命令される側が当該文脈の中にいない場合も命令することができる。

(ア) 栄養のあるものを買ってきた。食べろ。

(イ) ??おいしいものを買ってきた。喜べ。

(イ)は、ドラマなどのフィクションの世界で、良い知らせの前触れ(「みんな喜べ!今日は松阪肉だ」)として用いられる場合を除いて、成立しにくい。

3. 実例における調査結果

3.1. 調査の概要

ヨロコブがヲ／ニ格それぞれをとる際の様相を、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ)の用例から考察する。検索には「中納言」(国立国語研究所)を用い、検索対象は書籍(ベストセラー含む)のみに絞った。ヨロコブと同一文中にヲ格またはニ格で補語が表示されているものを考察対象とする。検索の便から、動詞ヨロコブから前 10 語以内(機能上、10 語が最長)に助詞ヲまたはニが表れるという条件⁵で検索したのち、ヲ格補語、ニ格補語が共起している用例を確認し、採集した。その際、著者の生年が 1910 年代以前の用例、受身、使役の用例は除外した。ヨロコブの前にヲ格またはニ格を要求する動詞のテ形・連用形が表れる場合(例(15))、ヨロコブが中止形で他の動詞を後接させ、後接動詞の様態を表すと解釈できるもの(例(16))も除いた。これらの例はヨロコブ以外の動詞の補語としてヲ／ニ格名詞(句)が示されている可能性があるためである。

(15) 広島に帰ってきて良かったと、私はつくづく思いました。私はリック夫人にもこのことを手紙で報告し、歓んでもらいました。(田坂博子『ヒロコ生きて愛』)

(16) 「御伽草子」を読むのは、もちろん娯楽のためであるにちがいないが、それと同時に、文字や言葉をおぼえ、故事来歴を知り、知識を得、道徳を身につけるためでもあった。作者はそれらをさずけようと考え、読者もそういうものを喜んで受け入れようとしたのである。(大島建彦／市古貞次『図説日本の古典』)

以上の作業を経たのち、得られたのはヲ格例 542 例、ニ格例 40 例である。ヲ格例に大きく偏る一方で、ニ格例も無視できないほど存在する。3.2 節では、ヲ／ニ格名詞(句)に注目して考察を進める。

表 1 はヨロコブのヲ／ニ格名詞(句)の種類を示したものである。

【表 1】ヨロコブのヲ／ニ格名詞(句)の種別用例数

	ヲ格例(542例)	%	ニ格例(40例)	%
抽象	96	17.7%	19	47.5%
抽象(事態)	37	6.8%	0	0%
事態性名詞	152	28%	7	17.5%
コト節／ノ節／その他節	195	36%	4	10%
(内訳:コト節	(131)	(24%)	(4)	(10%)
:ノ節	(62)	(11.4%)	(0)	(0%)
:その他の節)	(2)	(0.4%)	(0)	(0%)
コト	11	2%	0	0%
具体	41	7.6%	9	22.5%
その他(何)	4	0.7%	1	2.5%

⁵ ヲ格補語は比較的動詞から離れた位置にも生起し得るが、ヲ格例全体の用例が多いことから、取りこぼしていたとしても、全体の傾向は把握でき、論には差し障りがないと判断した。

表 1 から、ヲ／ニ格例ともに具体名詞をとる例がかなり少ないことが分かる。先行研究では例文に「プレゼント {を／に} 喜ぶ」など、具体物を指す名詞(句)を用いて作例されることが多く、抽象名詞であることはあっても、節をとる例が用いられることはほぼない。しかし実際には具体名詞は現れにくく、節をとる例が頻用されており、具体名詞の例のみを見てヨロコブについて考察するのは適当ではないと言えよう。

以下では、実例に基づいた考察を、(積極的に)事態を表す、節と事態性名詞をとる例について行う。

3.2. ヲ／ニ格名詞(句)のデキゴト性

3.2.1. 節の取りやすさ

表 1 から、ヲ格例においては節をとる例が、コト節、ノ節、準体節、疑問節を合わせて 36.0%(195 例)で最も高いことがわかる。名詞節は事態を表す。これに類するのが、サ変動詞語幹または動名詞(Verbal Noun)と呼ばれる語と、動詞連用形由来で事態を指す名詞(「出迎え」など)、サ変動詞にはならないが「～をする」で言える名詞であり、これらのいわゆる動名詞とそれに準ずる名詞を合わせて「事態性名詞」とする。ヲ格例における事態性名詞の割合は合わせて 28.0%である。一方でニ格例は節の例が 4 例、事態性名詞の例が 7 例で 1 割から 2 割弱である。(17)(18)にヲ格のコト節、ノ節の例を挙げる。(19)はニ格・コト節の例である。なお、ニ格・ノ節の例は「驚く」がヨロコブに前出する 1 例が得られたが、ニ格名詞句が「驚く」の補語とも捉えられる例のため、考察対象から外してある。

(17) とにかく強力な味方ができたことを私たちは喜んだ。(佐藤健『マンダラ探険』)

(18) しかし洗濯屋さんたちは唯一、雨季が遅れているのをよろこんでいるようだった。
(椎名誠『インドでわしも考えた』)

(19) そこへ奥州から砂金九百両が贈られてきたことに、聖武天皇は大いに喜び、年号を天平から天平勝宝に改めたほどである。(高橋克彦編『東北歴史推理行』)

節や事態性名詞は事態を表す。また例(20)(21)のようなイベントを表す名詞や、「死」など事態を表すと考えられるものは、事態名詞に準ずる名詞として、事態を表す抽象名詞に分類した。事態を表す抽象名詞の例はヲ格例に得られる一方で、ニ格例は調査範囲内では見られず、節や事態性名詞をとる例が少ないことと同様の現象と言える。

(20) 「お城も燃える、みんな燃える！」娘は立ち止まった。火事を喜んでいるかのよう
に手を叩く。(大栗丹後『裏隠密吼ゆ』)

(21) その皇帝の前で、朝臣たちは万歳を唱えて、董卓の死を悦びあったが、ただ一人、
街に晒された董卓の死体の前で慟哭した者がいた。(安能務『三国演義』)

先に見た節、事態性名詞の例と、事態を表す抽象名詞を合わせると、ヲ格例では約 7 割(384

例、70.8%)を占めることになり、ヲ格名詞(句)は事態を表す傾向が強いと言える。ニ格例では節、事態性名詞、事態を表す抽象名詞を合わせて 27.5%(11 例)で、ヲ格例ほどの事態への指向性は見られない。

3.2.2. ヲ／ニ格節の時間的意味

前節ではヲ格名詞(句)が事態に偏ることを示した。ヨロコブが表す感情の生起時を基準とすると、ヲ格例に表れるコト節、ノ節の事態には(22)から(25)に見るように、既実現事態(22)、継続事態(23)、未実現事態(24)(25)のいずれもが現われ得る。さらに個別に実現する事態ではなく、一般的または反復的な非個別的事態の例も得られる(例(26))。

(22) 「おじさんの設計図のことより、ぼくたち二人も、日本アルプスから、無事に帰れたことを喜ばなけりゃ…。ぼくは平気な顔をしていたけど、ほんとうは、あのまま、死ぬと思っていたよ」 (斎藤栄『少年探偵ジャーネ君の冒険』)

(23) ある意味では男女の騙し合いの夫婦生活のスタートをこの古い町から切るのも象徴的である。「そして私たち騙されていること」を喜んでるわ」 (森村誠一『凍土の狩人』)

(24) この夜のキャンプで、隣り合わせた二頭の牡のヤクがフー・フー・フーと低い声で鼻をならして相手を威嚇しながら歩き始めた。チベット人の人夫たちは喧嘩が見られるのを喜ぶ様子だったが、ヤクは互いに進んだり退いたりしてあまり近寄らず、どちらもしかるべく威厳を保っているだけだった。

(R・L・バードソル著／山本健一郎訳『ミニヤコンカ初登頂』)

(25) 「私に娘がおりまして、まだ小娘で、遊芸の技もまだ未熟でございますが、お客様にお目にかかることを喜んでおります。どうかお会いしてやってください」 (乾一夫／内田 泉之助『唐代伝奇』)

(26) なぜ、誤った国策の被害者であり、侵略戦争の加害者になって死んでいった戦死者を英霊としてほめ讃えることを、遺族が喜ぶのか。 (田中伸尚『憲法を獲得する人びと』)

(24)の「喧嘩が見られるの」はその成立が感情主にとって確かなものとして捉えられていると考えられるものの、感情の生起時を基準とすると、未実現事態であることには変わらない。ほかの未実現事態をとる例においても同様である。(26)のような例については、節の表す事態の問題ではなく、～ヲヨロコブ自体に非個別的事態を描写する用法が存するとも言える。

しかしニ格例には、既実現事態(27)と継続事態(28)の例は存在するが、調査範囲内においては未実現事態と非個別的事態の例は得られない。事態性名詞でも同様に、ヲ格名詞には未実現事態や非個別的事態が現れるが(例(29))、ニ格名詞には見られない。

- (27) そこへ奥州から砂金九百両が贈られてきたことに、聖武天皇は大いに喜び、年号を天平から天平勝宝に改めたほどである。(『東北歴史推理行』)
- (28) 元々が吝嗇な私だけに、そうすぐには完璧に「安い」という状況に心が揺らぐことがやめられるはずもなかったのだと、最近の自分に言い訳しながらも、ものの値段が下がっていることにばかり喜んで買い物をする前に、デフレの問題点を考えれば、ただ目先の「欲しい」や「食べたい」品に安易に手を出さなくなるだろうと考えてみました。(山崎えり子『節約生活のススメ』)
- (29) 小康を得て宮中へ入ったとしても、僧侶の祈禱を喜ばない神域でもある内裏で、養生がてらの長逗留などにはありうべきことでない。(橋本治『窯変源氏物語』)

ヲ格をとるヨロコブは事態を表す名詞(句)を要求しやすいのに対し、ニ格をとるヨロコブにはそのような特徴が顕著には見られず、表される事態の時間的性質に差があることがわかる。

3.2.3. 具体名詞・抽象名詞

前節ではヲ格例に顕著な特徴を指摘したが、ニ格例に占める割合が高いのは、抽象名詞である(表 1 : 19 例、47.5%)。(30)から(32)にニ格、ヲ格それぞれの抽象名詞の例を、(33)から(35)に具体名詞の例を挙げる。

- (30) キース・ヘリングのような若い画学生以上にこの手軽なアートに最も喜んだのは、ニューヨークのスラムに住む貧しい階級の若者達であった。(伊東順二『現在美術』)
- (31) 「新しい「すなわち、アインシュタイン-グロスマンの」理論にあなたがはっきり示して下さった好意的な興味」にどれほど喜んだかを、アインシュタインはマッハに書き送っていた。(アブラハム・パイス著／金子務ほか訳『神は老獺にして…』)
- (32) 原選手がデッドボールを受けるとワーッという歓声と拍手。そして紙吹雪が舞う。相手チームの不幸を喜ぶのがルールのようなのである。
(群ようこ『下駄ばきでスキップ』)
- (33) 「ほらね、鶴ですよ、元気になってくださいね」おばあちゃまの目から、ぽろぽろと涙がこぼれました。(略)こんな風に、たった一羽の折り鶴に涙を流して喜んでくださる方との出会い。これによって私がどのくらい勇気づけられることでしょう。
(田原米子『ひかり求めて』)
- (34) 持参のみやげを手渡した。武彦は金魚を喜んだ。小さな生きものが大好きらしい。
(出久根達郎『笑い絵』)
- (35) 「余は酒は飲まぬ。この野菜は甘過ぎて食べぬほどだ」「日本の方々は塩辛いものを好まれます。ヨーロッパでは甘いものを喜びます」
(土岐信吉『千利休』)

(35)は一般論として述べられており、「好む」に近い。ヲ格例が、節の場合に非個別的事

態をとり得たのと同様に、このような例はヲ格例に特徴的なものである。この点でヲ格をとる感情動詞が持続的な感情を表すとする寺村(1982)や、ヲ格名詞の意味役割を「対象」とする先行研究は、～ヲヨロコブの一面を捉えていると言える。ただ、感情に関しては「原因」と「対象」は明確には区別ができず、曖昧である。ニ格例では個別的事態を、ヲ格例では個別的事態だけでなく、非個別的事態も表すという、とる事態の性質の観点の方がヨロコブの様相を明らかに捉えられると考える。「対象」「原因」のどちらにも読める場合、「原因」のほうが個別事態に傾きやすく、非個別的事態の場合「対象」と捉えられやすいように思われる(「子どもはこんなプレゼント {を／に／??で} 喜ぶものだ」)。感情動詞全般を視野に入れた寺村(1982)の指摘は、～ヲヨロコブに関しては、個別的事態において持続的な感情を表す側面と、非個別的事態の描写という非一時的な感情を表す側面という二面で捉え直すことができる。

4. 考察及びまとめ

4.1. 考察

ヲ格をとるヨロコブが事態を表す名詞(句)を要求する傾向にあることは、単にヲ格名詞句が「対象」だけを表すのではなく、感情の起因となる事態を補語として明示的に取り込めることを示すと言えよう。先に示したように、～ヲヨロコブには、何らかの刺激に起因する感情を個別的に描く用法を中心にしつつ、刺激に起因するというよりは「好む」に近い用法も有すると考えられる(両者の中間的な用法も存在する)。この意味の幅が、ヲ格例が様々なタイプの名詞(句)をとること、一般的または反復的な事態や未実現事態を表す節をとることの要因であろう。～ニヨロコブは後者の「好む」に近い用法をもたないため、節をとる場合も、一般的事態や未実現事態を表すものがないと考えられる。

では、なぜニ格をとるヨロコブは事態を要求しにくいのだろうか。ニ格名詞が従来「原因」の解釈がしやすく、「原因」の意味役割をもつとされてきたことから考えれば、むしろ事態をとりやすくて良い。また～ニヨロコブが一時的な感情を表すと捉えたとしても、このことと事態を積極的に要求しないこととの関連を説明するのは難しいように思われる。ニ格例に節をとる例は僅少だったが、事態性名詞は多くはないものの、具体名詞に次いで一定程度見られる(7 例、17.5%)。名詞(句)が表す意味内容(事態であること)だけではなく、構文面からも考える必要があろう。ただ、ヲ／ニ格名詞(句)は事態性名詞ではなくても、何らかの事態性をもつと考えられる。例えば次の(36)であれば、名詞句「花子からのプレゼント」には「花子がプレゼントをくれたこと」「花子からプレゼントをもらったこと」が含意され得る。

(36) 太郎は花子からのプレゼント {を／に} 喜んだ。

このことから、ニ格例は事態を事態として示す形では要求しないと言ったほうが良いかも

しれない。本章では名詞の意味分布に偏りが見られるという点に注目し、節や事態性名詞が積極的に事態であることを表す名詞であることを重視した。いずれにしても、二格例が節と共起しにくいことへの説明が課題となる。

一方、ヲ格例には未実現事態や、一般的・反復的事態の描写例が見られた。未実現事態は、眼前にない、話者(感情主)の頭の中でまとめ上げられた概念的な事態である。非個別的な事態である一般論、反復的事態も同様に概念化を経た事態である。～ヲヨロコブには、このような具体的な実現のないデキゴトが概念的にまとめあげられた名詞(句)をとり、説明的に描写する例が存在する。先行論で指摘されてきたヲ格例と二格例の予想性の解釈の違いはここに起因するのではないか。

(36)において、二格では予想外であったとの解釈に、ヲ格では予想範囲内のことだったとの解釈になるとされる。概念的にまとめあげる過程を経ることは、予想外の事態に接した反応とはそぐわない。反対に、予想は事態を頭の中で一度ひとまとまりのものとして捉える必要があり、概念化を経る点で共通すると考えられる。一方で二格は概念化を明示的に示さないため、予想外の事態への反応と親和性がある。～ヲヨロコブがこの過程を示し得る(用法がある)ことによって、解釈の違いを生み出す余地が出ると考えられる。

ただしこの解釈の違いは、ヲ格と二格を対比した際に話者によっては表面化するものであって、先述のように、必ずしも予想の有無と格表示が連動するわけではない。ある文脈で概念化を経るか否かが予想性の差異として解釈される可能性を有するということであり、同様に「原因」「対象」の解釈も、概念化を経たものが「原因」よりも「対象」と捉えられやすく、～ヲヨロコブにこの用法があることから傾きやすい解釈なのではないか。

ここで、定延(2006)が示す、体験／知識表現と格表示との連動を参考しよう。定延(2006)は、動態表現において、話し手や書き手の体験としての表現と知識としての表現が構文上にどのように現れるかについて指摘したものである。この中で、ヲ／二格をとり得る「訪れる」に関して、二格表示される場合は出現に重点が置かれ、到着地にいるため移動の過程を感知できない体験者の側からの表現であるとし、ヲ格表示される場合は「探訪するというデキゴトを外から観察した知識の表現らし」(p.62)とする。～ヲヨロコブが事態を節で展開された形によって説明的に描写するというのは、定延(2006)に則れば、知識表現により重点があるものと言える。一方で感情動詞は「嬉しい」などの感情形容詞とは異なり、感情表出はできない。この点で体験性は劣るものの、感情形容詞とヲ格例の中間に位置するのが二格例だと言える。知識表現よりも体験表現に傾くことが、二格例に名詞節の例が少ない理由の一つとして考えられる。

4.2. まとめ及び残された課題

2節では、ヨロコブがアスペクトテストでは継続動詞の特徴を示すことを指摘した。主体性に関しては、感情が生起するよう、もしくはしないように努めることができるが、最終的に感情の生起まではコントロールが及ばない。これらはヲ、ニの別に関わらないが、意図性に関しては、ヲ格表示のほうが意図性が高いと言えそうである。

3 節における実例の観察からは、ヨロコブのヲ／ニ格名詞について、①ヲ格例では節に偏るが、ニ格例では節が少ないこと、②節によって表される事態について、ヲ格例では未実現事態や非個別的事態が現われるが、ニ格例には現われないことを指摘した。これらは～ニヨロコブに比して、～ヲヨロコブが感情生起の場から離れた、説明的な表現に用いられやすいことを示すと考ええる。

以下に、先行研究の指摘との関係を考察結果とともに示す。

ア) ～ヲヨロコブは説明的な描写が可能で、～ニヨロコブの方が、ヲ格をとる場合と比較すると形容詞的表現に近い。先行研究で指摘され第2章でも確認したように、ニ格感情動詞の中には表出用法をもつ語が存在するが、表出用法をもつヲ格感情動詞はないということと、方向性を同じくする。

イ) ～ヲヨロコブは「好む」のような突発的でない、長期の感情を表す用法をもつが、～ニヨロコブはもたない。寺村(1982)、益岡・田窪(1987)による、ニ格感情動詞が「一時的」、ヲ格感情動詞が「能動的」または「持続的」で、「より純粋に心の感情の状態を描く」という指摘は妥当だと言える。しかし両者が接近し上記の差異がないように見える用例もあることも確かであり、～ヲヨロコブの用法の幅が指摘できる。

ウ) Akita(2007)は、原因が強調される場合はニ格を、起こった事態、つまり感情が引き起こされたことが強調される場合はヲ格をとるとしている。このことと、～ヲヨロコブは説明的に描写するという本論文の考察は、ヲ格例では原因が強調されているわけではなく、矛盾はない。しかし本論文では、感情の生起だけに焦点が当たるとはならず、感情の誘因、指向先を含めた全体に焦点が当たると考える。

ただ1節でも述べたように、Akita(2007)の主張では、例(37)に対する説明は難しいが、本論文の主張によっても解決できない。現段階では～ヲヨロコブと～ニヨロコブが接近した例として扱うほかない。今後の課題の一つとする。

(37) ハイジには、おばあさんが、ケーキより灰色のショールのほうをずっとよるこんだのが、ふしぎでなりませんでした。(例(5)再掲)

先行研究において一時的／持続的という意味特徴と格表示との関係が指摘されるが、Akita(2007)は、格表示とアスペクトの意味に対応関係はないとする。本章での考察から、ヨロコブに関しても同一の名詞(句)をとったテストにおいては、対応関係はないと言える。一方で、幅のある用法の両極を見れば、対応関係があるようである。

本章では、アスペクトの特徴や名詞(句)の事態性に注目して考察を進めたが、文中での分布などの構文的特徴や、名詞(句)の意味などを組み合わせて考える必要がある。いずれも稿を改めて論じたい。

第4章 調査資料・用例出典

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言), 国立国語研究所,
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>

第5章 「頼る」の諸相

本章では「頼る」について、まず現代語の様相を、次に通時的変遷を記述し、現代語で観察されるヲ／ニ格例の様相の基本的な部分が、近代に出現したものであることを示す。

1. 現代語タヨル

1.1. 問題点

現代語「頼る(便る)」(以下、タヨル)は(1)のようにヲ／ニ格のどちらもととり得る。

- (1) 太郎はいつも親 {を／に} 頼っている。

タヨルは、心理的意味をもち、かつ「対象」「原因」という枠で捉えることが難しい語のうち、ヲ格例とニ格例がまとまって得られる語(第2章資料③)である。タヨルは物理的であれ、心理的であれ、ある種の「依拠」を表すと言える。以降、本節ではタヨルの表す意味について言及する際は「依拠」と称する。

森田(2007)では「地図を頼る／地図に頼る」の場合、ヲ格例では「頼る対象が地図そのもの」であり、ニ格例の場合、ヲ格が現れていなくても「“地図にそこへの行き方を頼る”」というような「必ず何かをその対象に求める行為で」(p.265)あること、その場合にのみニ格モノ名詞が現われることを指摘する。ただ森田(2007)はこのことを簡略に述べるのみで、実証的に示したものではなく、ヲ／ニ格名詞(句)の内実や、「何かをその対象に求める行為」である場合のヲ／ニ格例の差異等不明な点が残されている。

本節では実例に沿って、現代語タヨルがヲ／ニ格をとる場合の特徴をそれぞれ記述し、格形式と意味用法の対応関係を探る。1.2節では従属節内での現れ方を、1.3節ではヲ／ニ格名詞(句)の意味特性を記述し、1.4節で考察・まとめを行う。

1.2. 調査対象

1節の調査はBCCWJ所収の「書籍」を対象とし、「中納言」によって検索した。

タヨルは「叔父に進学資金を頼った」のようにニ格とヲ格が共起する場合があります、一文中にヲ格のみ又はニ格のみが明示されている例を、共起例から一方の名詞(句)が省略されたものと見る可能性もある。しかし(2)のように、ヲ格名詞又はニ格名詞の省略と見なせない例も存し、省略された例か否かについて客観性を担保して判断することは困難である。

- (2) a. 今、こうして私が眺めている光景をおそらく 同じように、二人も肩を寄せ合い仲むつまじく眺めていたのだろう。成田は甘ったれて佐知子に頼り切り、それを佐知子は深い喜びとともに受け入れていたのだろう。(大崎善生『将棋の子』)

- b. 「いくらガードが堅くても、守れないものはあります。威張っている人ほど、内心は不安で不安でしょうがないんですよ」(略)「信じるものがない不安ですわね。だから占いを頼ったり、神頼みをしたりするんです。(略)(内田康夫『はちまん』)

本節では、ヲ／ニ格交替が可能な文が存在することを重視し、ヲ格をとる場合とニ格をとる場合の特徴を明らかにすることを目的とするため、ヲ、ニ共起例の扱いをひとまず保留し、一文中にヲ／ニ格どちらかのみが明示されたヲ格 256 例、ニ格 969 例を考察対象とする。ヲ／ニ格相当の名詞(句)が助詞ハ、モ、ガで示される例は考察対象から除く。また依拠の内実が文脈で明示されない例もあることから、文脈から依拠内容が確定できるか否かを問わず(省略の可能性を考慮せず)、考察対象とする。なお調査範囲内で得られたヲ／ニ格共起例を観察すると、ほぼ「〈内容(依拠目的)／量〉ヲ〈手段／相手〉ニ」という意味関係の例に限られる¹⁾。

1.3. 構文環境の特徴

1.3.1. 中止形での出現様相

タヨルは心理的依拠のみを表す場合もあるが、何らかの目的や希望のもと、その達成のための依拠を表すこともある。～ヲ／ニタヨルの各特徴を見出すためには、後続する事態との関係の考察が一助となるだろう。本節では一文中での共起関係に限定し、中止形の出現傾向と、共起する事態の種類の二点について考察する。

まず中止形の出現傾向について、総用例数のうちテ形・連用形中止の割合は、ニ格例が全体の 11.2%(109 例)なのに対し、ヲ格例では 49.2%(126 例)に及ぶ。ヲ格例は相対的に中止形に集中して出現する傾向にあると言える²⁾。なおタヨルが中止形であれば、後続節と共に従属節を構成する例((3)(4)等)も含める。

- (3) 人に頼って生きてるから気が張ってないのか、紀良は本当によく風邪をひいた。
(横森理香『ワルツ』)
- (4) そして生活を求めて、親類や元檀家であった有力檀那衆を頼って、山から続々と下

¹⁾ 「〈場所〉ニ〈相手〉ヲ」が以下の 2 例のみ見られる。

- a. 安房の里見家に従弟の蜷崎十郎どのを頼ろうとする道すがら(栗本薫『栗本薫の里見八犬伝』)
- b. 鈴木天眼を長崎に頼っている。(加来耕三『日本格闘技おもしろ史話』)

ニ格名詞(句)が純粋に場所を表すのはこの 2 例のみである。タヨル自体に移動の意を含む(「何かを期待して接近する」『日本国語大辞典第 2 版』)用法(の名残)と考えることも可能であり、現代語においてはあまり用いられない用法のため、本節では扱いを保留する。タヨルがもつ移動の意に関しては、2 節の通時的考察を見られたい。

²⁾ 本節では依拠と他事態との関係を見るため、否定中止形は含まない。否定形を含めてもニ格例の中止形は 2 割程度である。またタヨルが補助動詞に接続する場合も補助動詞が中止形であれば考察対象とし、後接動詞が本動詞としても補助動詞としても解釈できる例は除く。後者の例を含めると、ヲ格例では 54.7%(140 例)となる。本節の調査範囲内ではニ格例には後者の例は見られない。

山していく坊が多かった。

(重松敏美『山伏まんだら』)

中止節以外の従属節はヲ格例に 76 例(29.7%)、ニ格例に 693 例(71.5%)、タヨルが主節もしくは単文に用いられる例はヲ格例に 38 例(14.8%)、ニ格例に 164 例(16.9%)、その他判断に迷う例や項を伴う名詞形がヲ格に 16 例、ニ格に 2 例ある。ニ格例の従属節例に最も多いのが名詞節・連体節で 355 例(36.6%)である。しかし否定中止が 10.9%、その他従属節が 23.9%であり、ヲ格例が中止形に偏るように大きくどれかに偏るわけではない。

二点目の共起する事態については、中止節のうち南(1974)の B 類にあたる継起(と原因理由)、A 類にあたる付帯状況を表す中止節に限って考察する。本節の目的により、並列の関係にあるものは含まない。分類は、内丸(2006)で示される「しか—ない」テストなど(付帯状況(A)と継起・原因理由・並列(B)とで適格性が異なる。南(1974)の分類に適用できるとする。)を主に用い、南(1974)の A・B 類の条件を参照した。その後、入れ替えの可否等を用いて並列の関係にあるものを除いた。また本来の目的からは原因理由の関係にあるものは除くのが妥当であろうが、B 類内で峻別することができないため含めてある。並列の例を除いた中止形の、総用例数に対する割合は、ヲ格例 46.5%(119 例)、ニ格例 10.2%(99 例)である。

表 1 にテ形・連用形が継起(／原因理由)又は付帯状況を表す際に後続する節³に用いられる動詞を挙げる。移動動詞や移動を含意する動詞(以下、移動動詞)には下線を、ヲ、ニに共通して見られる語には囲みを付し、長期的な営みや生活に関する動詞に波線を付した。二つ以上の動詞にかかる場合、(～動詞)で示した。2 例以上得られる語の後ろには延べ語数を付した。二つ以上の動詞にかかる場合はそれぞれを計上したため、延べ語数は考察対象の総用例数と異なる。

【表 1】タヨル中止節に後続する動詞

ヲ格例	ニ格例
あてにする～画策する、あふれでる、甘えたり攻撃したりする、行く 7、行く～勤める、行き来する、 <u>生きる</u> 、至る、いる 2、(身を)うつす、移る、送る、 <u>行</u> う (行われる)2、訪れる、 <u>落ちのび</u> る 4、開拓する、 <u>寄宿</u> する、(人に)降る、来る 6、 <u>暮らす</u> 2、 <u>下山</u> していく、再就職する、探す、刺す、 <u>出奔</u> する、紹介してもらう、 <u>上京</u> する 5、 <u>上京</u> する～ <u>厄介</u> になる、(～へ行くのに) <u>乗船</u> する、 <u>上陸</u> 、調べる、 <u>す</u> <u>る</u> (<u>田舎廻りを</u> / <u>転々と</u> / <u>贈り物を</u> / <u>飯の宿と</u> / <u>捨て児</u>)5、座る、接する、説明する、潜伏している、 <u>疎開</u> する 2、 <u>疎開</u> する～ <u>始める</u> 、助けてもらう、 <u>旅立つ</u> 、仕える～なる、出会う、 <u>出入り</u> する、(～へ/旅に) <u>出</u> る 4、 <u>出てくる</u> 3、 <u>渡航</u> す	(成果を)あげる、 <u>歩</u> く、安心する、言う、生かす、 <u>生きる</u> 6、維持する、受け入れる、討つ、 <u>奮</u> いにいく、売る、得る、(誤りを)犯す、後れを取る、怠る、 <u>行</u> う 2、奢り昂る、(成功を)収める、おろそかになる、書く 3、書き記す、勝つ、考える、聞き入れる、帰結する、築き上げる、切りぬける、切り離す、(判断を)下す、 <u>暮</u> <u>らす</u> 3、遊び暮らす、企てる、作製される、探る、支えてもらう、実現する、実行する、失敗する、(～を)成就する、遂行する、推理する、 <u>住</u> む、 <u>する</u> 8、 <u>生活</u> する 3、選択する 2、対抗

³タヨルが最も近い後接動詞以外にもかかると判断できれば、両者の動詞を挙げる。

<p>る、取り立ててもらふ、<u>逃げる</u> 2、<u>逃げて上京する</u>、<u>逃げ込む</u> 2、<u>なる</u>(なろうとする、等しくなる含)4、<u>南下する</u>、<u>入学する</u> 2、<u>入信する</u>、<u>任命される</u>、<u>願い出る</u>、<u>逃れる</u>、<u>上る</u>、(～に)はしる、働きかける、果てる、(～に)踏み出す、蜂起する、<u>亡命する</u> 2、<u>没落していく</u>、<u>まいくりまわる</u>、<u>見える</u>、<u>見つけてもらふ</u>、<u>見ている</u>、<u>都落ちする</u>、<u>巡る</u>、<u>申し出る</u>、<u>持ってくる</u>、<u>戻る</u>、<u>やってくる</u> 3、<u>破れる</u>、<u>やる</u>、(身を)よせる、<u>留学する</u></p> <p>〈異なり 89 語、延べ 128 語(複数共起は各々計上)〉</p>	<p>する、耐える、称える、戦う、叩きに行く、(口)に出す、(生計を)たてる、試してみる、調達する、<u>通院する</u>、使う、続ける、提供する、できる、手に入れる、事業展開する、<u>飛ぶ</u>、とる、<u>なる</u> 4、(力を)のばす、発見し～引きずり出す、服用する、振る舞う、学ぶ 2、見聞きする、<u>持ち帰る</u>、求める、求める～殺す、<u>やる</u>、立身する、弄する、忘れる</p> <p>〈異なり 81 語、延べ 103 語〉</p>
--	--

表 1 を見ると、まずヲ格例が中止形で現れる際の後続動詞は、移動動詞(表 1 の下線を付した語)が多いことが明らかで、異なり 42 語、延べ 68 例で約半数を占める⁴(例(5)～(7))。対してニ格例には調査範囲内では移動動詞が 6 例のみである(例(8)(9))。

- (5) (略)兄を頼って上京し、各種学校であるコンピューター・スクールに入学しなおした。
(清水義範『Y 殺人事件』)
- (6) (略)兄・頼朝の勘気をこうむり奥州平泉の藤原氏を頼って落ちのび、結局その頼りの藤原氏に衣川で討たれた。
(釣谷真弓『おもしろ日本音楽の楽しみ方』)
- (7) 信尹の幼少期は、各地の武将を頼って転々とする父に伴われ、京を離れていた。
(前田多美子『四季の名筆』)
- (8) (筆者注：コシジロウミツバメは)音からだけ想像すれば、すこしは音に頼って飛んでいるのかも知れませんか。
(畑正憲『天然記念物の動物たち』)
- (9) (筆者注：通院介助について)病院内のボランティア等に頼む。それができない時は、三十分千円～千五百円を支払って介護保険を受けている業者のヘルパーに頼って通院することになる。
(望月宏子『教師になってよかった』)

移動動詞の場合、ヲ格例では後続節の事態の達成前からヲ格名詞(句)が依拠の対象となっている。例えば(5)(6)では、「兄」「奥州藤原氏」が依拠の対象となる時点で、移動「上京する」「落ち延びる」は達成されておらず、ヲ格名詞(句)は前提として存在するものの、移動時の直接的な手段とはならない。実益を供さない心理的依拠を含意し得、目的地への到着後の金銭・住居などの物理面、心理面での依拠も排除しない。この例の場合、むしろ到着後の依拠を積極的に表していると言って良いだろう。つまりヲ格例では後続節事態の実現のために、当該事態の達成以前に依拠し、事態達成後の依拠の継続も許容される。ヲ格名詞(句)は手段として用いられるのではないため、金銭、温情等のどのような点に依拠するか、その内実が明白でない点も特徴である。

⁴ 杉本(1991)ではタヨルを準他動詞とし、「頼る」はヲ格名詞をとることもできるが、それは何らかの移動を伴う場合に限られるようだ(p.249)との注がある。

一方ニ格例(8)(9)では「音」「ヘルパー」に依拠する間のみ「飛ぶ」「通院する」という事態が成立する。(5)(6)のようなヲ格例では依拠主体と依拠先の人物の間の距離が隔たっているにもかかわらず、移動中に依拠先(ヲ格名詞)からの援助がなくても良かった。しかしそれとは異なり、ニ格名詞(句)は後続節事態の主体と同一場面に存在して典型的には直接的手段として用いられ、依拠した結果または依拠と並行的に、後続節の事態が成立する⁵。

これに関して後続動詞の限界性(工藤(1995)ほか。日本語記述文法研究会編(2007)の「特定時点成立」)の有無も傍証となる。例えば、「移る」は目的地に到着した時点で事態が成立し、到着前には「静かな場所に移った」とは言えない。このような予め事態の成立点が含まれている限界動詞と動詞自体には明確な終了点が含まれていない非限界動詞という観点から見ると、ヲ格例には限界動詞が約7割(69.5%)。延べ128例中89例見られ特徴的なものに対し、ニ格例では限界動詞は半数程度(49.5%)である。ヲ格例では限界動詞の多くを「行く」「上京する」「落ち延びる」などの移動動詞が占め、ヲ格例における限界動詞の比率の高さは移動動詞による。ニ格例には移動動詞であっても「歩く」などの非限界動詞と、「持ち帰る」などの限界動詞との間に偏りは見られない。ヲ格例は依拠と後続節事態とが同一場面にあることを要求しないため、「～ヲ頼って訪れる」等、ヲ格名詞(句)への到達や接触が後続節事態の達成と同時であったり、過程ではなく達成点に重点が置かれたりしやすく、限界動詞と共起しやすいと考えられる。ニ格例は後続節事態の継続・過程と同一場面で依拠するため、限界動詞に偏らないのだろう。依拠と後続節事態との関係は、ヲ／ニ格例がそれぞれ非限界動詞、限界動詞と共起する場合(例(7)(9))も同様である。

また表1において、ヲ／ニ格例に共通する語(囲みを付した語)に注目すると、意味の抽象的な基本動詞「する」「やる」「行う」「なる」を除くと「生きる」「暮らす」の2語に限られる。この場合のヲ格名詞(句)は固有名詞等で示される特定の人物である(例(10))。一方ニ格例では、非情物名詞(例(11))が10例(「遊び暮らす」を含む)中8例を占め、ヒト名詞は2例のみでいずれも「人」である(例(3))。「人」以外のニ格名詞(句)は暮らしの糧(例(11)「呪術」等)として利用するものであり、移動動詞の例と同様に同一場面にある。(10)ではヲ格名詞がヒト(「憲章」)であり、手段的に利用されるのではない点、依拠の内実が明白でなく心理的依拠を含む点で、移動動詞と同様の差異があると言える。

(10) 満州国が崩壊した後、連組は大連に戻り、憲章を頼って一緒に暮らしていたが、仕事が見つからず、借金生活に追い込まれた (川島尚子『望郷』)

(11) (略) 彼らは呪術に頼って暮らしており、そのような土地で親鸞は呪術否定(「世間否定」)の書を書いていたのである。 (阿部謹也『日本人の歴史意識』)

本節で考察した中止形の例に限らず、依拠目的が文脈によって示される場合もあるが、ヲ格例の中止形での出現率の高さや、共起事態の種類、共起事態との関係においてニ格例

⁵ 調査範囲内ではあるがヲ格例にはタヨリナガラ、タヨリツツの例が見られない。ニ格例には少数であるものの用例が見られ、ヲ格例に出にくいという事実はこの指摘を支えるものと言える。

と明らかな差異があることは重視すべきであろう。調査対象の全ヲ格例のうち、本節で考察対象とした中止形が五割弱(119 例、46.5%)あり、そのうちの大半が移動動詞と共起する例である。～ヲタヨルと移動動詞の親和性は高いと言ってよいだろう。

1.3.2. 観察結果のまとめ

以上のように～ヲタヨルは後続節の事態の生起前から達成後までのヲ格名詞(句)への依拠を許容する、つまり後続節事態と同一場面にあることを要求しないと考えられる。このことを(12)で確認したい。(12)a はヲ格例で、「千代子」が満州の兄の元へ行くことは読み取れるが、この文のみでは渡航時に兄から金銭等の実質的援助を受けることは(この例では文脈からも)含意されない。(12)b は(12)a を二格表示にしたものである。(12)b はヲ格例と異なり、乗船に際して、兄から乗船料金や切符の手配等、金銭その他の援助を受けたとの解釈に傾くと思われる。

- (12) a. 大阪の女学校を卒業した母(俵千代子)は、淀屋橋にある生命保険会社に勤めていたが、昭和十四年八月に(筆者注：満州の鞍山市に本社がある)昭和製鋼所の兄^を頼^てて神戸から乗船した。(略)上家は千代子の兄の部下となり、会社の連中とともに上司の家を訪れて、酒を飲み交わすうちに千代子と知り合った。

(上家富靖『一番大きなお星さん』)

- b. # 鞍山市の昭和製鋼所の兄^に頼^てて神戸から乗船した。

- c. 鞍山市の兄 {??を／に} 頼^てて神戸から横浜へ向かう船に乗った。

これはヲ格例ではタヨルの主体(千代子)が「乗船」する時点ではヲ格名詞(兄)を“あてにする”だけで必ずしも実際の利用が含意されないこと示すと考えられる。ヲ格名詞(句)の場合、具体的な利用を想定しない文脈でも使用可能、つまり依拠の内実が金銭、助言、存在自体等、比較的明白でなくても良いと言える。

さらに(12)a は渡航後の依拠も含意でき、実際に文脈から千代子が渡航後、兄の家に暮らしていることがわかる。二格例(12)b では渡航後の依拠を読み取ることはできず、普通、依拠は乗船が達成されるまでだと解釈されるだろう。兄が渡航先にいない場合を考えると、ヲ格例では不自然なのに対し、二格例では許容される((12)c)。

～ヲタヨルが後続節事態の成立・達成前後の依拠を許容し、～ニタヨルが依拠と後続節事態との同一場面性を指向するという本節の指摘は、先行研究が両格をとる感情動詞について述べる、ヲ格：持続的感情と、二格：一時的感情という対立に矛盾しないが、タヨルにおいて二格例は一時的というよりも同一場面であることが重要だと考えられる。

1.4. ヲ／ニ格名詞(句)の意味分布

本節では 1.2 節で考察対象とした全例を対象にヲ／ニ格名詞(句)の意味分布を観察する。ヲ／ニ格例には名詞(句)がヒト名詞類か否かにおいて対照的な分布が見られる。表 2 はそれぞれ上段が延べ語数、下段が割合を示す。なお、名詞が二つ以上並列されている場合(例：抑制やつなぎ服に)、それぞれを計上したため、1.2 節で示した総用例数とは合計が異なる。ヲ格名詞(句)の場合、ヒト名詞と、組織・国(省庁、会社、団体など含む社会集団)、関係(つて、縁など)のヒト名詞類⁶が 9 割近く(88.2%)で、特にヒト名詞が 70.0%(184 例)と多数を占める。一方ニ格名詞(句)はヒト名詞類が約 2 割に過ぎず、非ヒト名詞類が 8 割弱(78.0%)であり、ヲ格例と対照的である。ニ格例では、典型的には実利用できるモノである具体名詞のほか、抽象名詞や事態性名詞(影山 2011 の「デキゴト名詞」⁷)も多く見られ、幅広く分布する。

【表 2】ヲ／ニ格名詞(句)の意味分布⁸

非ヒト名詞類	具体物(うち金銭)	身体・感覚	力	技術	手段・方法	理論・システムなど	その他抽象物	抽象物合計	事態性名詞	その他(何など)	非ヒト名詞類合計
～ヲタヨル(263例)	8 3.0%	0 0%	6 2.3%	1 0.4%	0 0%	0 0%	9 3.4%	16 6.1%	4 1.5%	3 1.1%	31 11.8%
～ニタヨル(1069例)	281(32) 26.3(3.0)%	14 1.3%	91 8.5%	31 2.9%	29 2.7%	19 1.8%	191 17.9%	375 35.1%	166 15.5%	10 0.9%	833 77.9%

ヒト名詞類	人(誰等含む)	組織・国など	関係	神仏	ヒト名詞類合計
～ヲタヨル(263例)	184 70.0%	22 8.4%	21 8.0%	5 1.9%	232 88.2%
～ニタヨル(1069例)	165 15.4%	59 5.5%	2 0.2%	11 1.0%	237 22.2%

1.4.1. ヒト名詞類

以下に人((13)(14))、組織((15)(16))、関係((17)(18))を表す名詞(句)の例を示す。

(13) (略)三好義継は河内北半国の主、そして義昭の妹を妻としていることから、義昭は義継を頼ったものと思われる。(湯浅治久『戦乱の日本史』)

(14) (略)紫の上がたいそういじらしい御様子で、心から源氏の君に頼りきっていらっしゃるのを、振り捨てて出家することは、とてもむずかしいことなのでした。(瀬戸内寂聴訳『源氏物語』)

(15) (略)戦地から引き揚げたものの身の置き所を決めかねている俳優がとりあえず NHK を頼ってきた、といったケースも少なくなかったが、多くは NHK の東京放送劇団の人達であった。(能村庸一『実録テレビ時代劇史』)

⁶ ヒト名詞に準ずると捉えられることの多い組織・国等に加え、ヒト(の存在)を想定できる関係を含むため、「有情物」とはしない。

⁷ 何らかの事態(「発展」(する)「試験」(をする)など)やイベント・催し物(「発表会」など)を表す名詞を指す。調査対象の用例中では、いわゆるサ変名詞が中心である。

⁸ その他には土地、節、内容を含む。ニ格ヒト名詞には有情物として動物 1 例を含む。

- (16) 率直に現実を直視し、どういう年金プランが自分たちの源泉に必要なのか、厚生省
に頼らずに考えるべきだ。(中田謙司『税金を払おう』)
- (17) K 先生は大学は出たけれど、工学部出身では就職先がなく、仕方なくツテを頼って
 先生になったのだ。(河野實『メダカはどこへ』)
- (18) 上下関係に頼らず、子どもとどう関係を結ぶのかが問われている。
 (氏岡真弓『学級崩壊』)

組織・国に分類した例において、ヲ格名詞(句)は多くが(15)のように「NHK」「病院」等の会社名や団体・施設名である。ニ格例には(16)の「厚生省」等の中央機関や、ヲ格例には1例しか見られない国名が多数あり、これらは組織図にすると上位に位置するような、ヲ格名詞(句)より大きな組織・集団である。ヲ格例はより下位の組織名詞をとり、ヲ格例でヒト名詞の割合が高いことと関連した現象だと考えられる。

また、(19)(20)のような「人」をとる例や、一般的記述としての例においてヲ／ニ格例は近接する。総称名詞「人」をとる場合、ニ格例においても(20)のように、生きることや生活全般において等、依拠の内実が広範に及ぶものが多く、1.3節で見たヲ格例の特徴と重なる。

- (19) ひとりで暮らせないんです。恥かしいけれど、あなたとはちがって、ひとを頼る
 としか知らない。(津島佑子『私』)
- (20) 人に頼って生きてるから気が張ってないのか、紀良は本当によく風邪をひいた。
 ((3)再掲)

1.4.2. 非ヒト名詞

ヲ格名詞(句)にヒト名詞類が多いのと対照的に、ニ格名詞(句)の8割近くが非ヒト名詞類である。非ヒト名詞類のニ格例を(21)(22)、ヲ格例を(23)に挙げる。ニ格名詞(句)が具体物の場合、実際に利用できる道具的なモノが多く見られる。抽象的なニ格名詞(句)の場合は、具体名詞と同様の道具・手段的なものと見なせる例(21)のほか(22)に見るように、何かを行うに当たって基盤とするものと捉えられる例があり、「理論」「手段・方法」「技術」に分類した例に典型的である。これらは何かを行う時点において依拠する背景や基盤と捉えられ、前提性と同一場面性を有すると言える。この前提性は1.3節で見た移動動詞と共起するヲ格例にも見られた特徴である。

- (21) 国際的な悪質商法もある。こうしたケースでは、一つの自治体の窓口だけで入手で
きる情報にたよって消費者相談をしていたのでは、適切な情報提供はできない。
 (村千鶴子『消費者はなぜだまされるのか』)
- (22) (略)一徹で野性的な、なにやら御しがたい童児として生きぬいた画家だと見るべきだ
 ろう。だからよくある芸術家無垢説にたよって瑛九を称えてみてもはじまらない。

(巖谷國士『封印された星』)

- (23) (略)ガイド(筆者注：鐘の譜)があるときは、そっちを頼って、休みの数はかぞえない
のが、オーケストラ奏きの習性だから、(略) (林光『私の戦後音楽史』)

もう一点、二格例に特徴的なのが事態性名詞である。ヲ格例には 4 例しか表れないが、二格例では 166 例(15.5%)得られる(表 2、例(24)(25))。

- (24) もちろん小沢氏の健康問題とか、今日の朝日新聞に載ったような彼の汚職の問題とか、こういう敵失によって状況ががらりと変わる可能性はあると思います。しかし敵失を頼って私たちが黙って見ているには、あまりにも状況は深刻であるということとをぜひとも考えていただきたいと思います。(浅井基文『平和大国か軍事大国か』)
- (25) (略)これに対抗すべく、加藤清正、福島正則、浅野長政などの尾張生まれの従来の秀吉側近を中心とするグループは北政所の庇護に頼り、両者は秀吉の生前から対立反目を続けていた。(来水明子『人物日本の女性史』)

ヲ格・事態性名詞の例では 1 例を除き否定と共起するか、名詞が未実現事態を表し(例(24))、依拠時点での実益を伴わない。二格例にも否定形や未実現事態を表す例があるものの、(25)「北政所の庇護」のように名詞(句)の事態が実現(・継続)されている限りにおいて依拠する例が多数存する。

1.5. 考察及びまとめ

以下に～ヲタヨル、～ニタヨルそれぞれに本節で観察された差異(①②)と、そこから導き出した意味特徴(A～C)をまとめる。

- ①ヲ格例は中止形に偏って出現し、その場合、移動動詞が後続する例を典型とする。二格例は中止形で現れにくい。中止形の用例の場合、後続の動詞はヲ格例では限界性のあるものが多数を占める一方、二格例では偏りが見られない。
- ②ヲ格例ではヒト名詞類をとる例が 9 割近くを、二格例では非ヒト名詞類をとる例が 8 割弱を占め、対照的である。

A：①より、中止形の例の場合、～ヲタヨルでは後続節の事態の成立・達成の前後に渡って依拠が継続されて良い。～ニタヨルは、依拠の結果または依拠と並行して、後続節の事態が継続／達成される。

B：②、A より、

【～ヲタヨル】ヲ格名詞(句)は前提であり、依拠によって行われたり引き起こされたりする事態と同一場面に存在しなくて良い。事態の成立・達成後も依拠し続け

る場合や心理的依拠の側面が大きい場合も許容され、特にその際は依拠の内実が明示されない。

【～ニタヨル】ニ格名詞(句)は依拠と同一場に存在し、手段または基盤としての利用を想定される。依拠の内実が明らかな場合が多い。名詞(句)の非情物への偏りが顕著であり、この点でヲ格例と対照的である。

C：ニ格名詞が総称名詞「人」である場合を典型とする、依拠の内実が明示されない(全般に関して依拠すると解釈できる)例において、ニ格例とヲ格例が近接する。

心理的依拠の側面が大きい場合、～ヲタヨルで表されるという点は、寺村(1982)でヲ格をとる感情動詞を「より純粋に心の感情の状態を描くもの」とする指摘と矛盾しない。タヨルは物理的依拠も心理的依拠も同時に表し得るが、～ヲタヨルにおいて心理的側面が前景化しやすいと言える。

また、ヲ格例では依拠の内実が明示されないという点に関して、(26)を参照しよう。

(26) 花子は彼 {のこと／φ} を頼っている。⁹

田窪(2010)は名詞＋ノコトについて、「なんらかの形で名詞(句)の指示物と関連付けられる出来事のいくつか、あるいはすべてを意味する」「属性抽出標示」(pp.131-132)であるとす。 (26)のようにノコトの付加が可能なことから、～ヲタヨルは名詞(句)に属性も、個体そのものもとれることがわかる。ノコトが付加されない場合、どちらの読みも可能であり、文脈で示されない限り、内実を明示しない例としての解釈が可能である。

下の図1・2はタヨル文の依拠対象となる名詞の意味分布について整理したものである。図1は表2で示した名詞分類に若干の整理を加えたもので、図2には、図1の分類を抽象化して整理し直したものと、格形式との対応を示した。図1には図2との対応を示してある。具体物と、抽象物で道具として利用されるものを「道具」、背景・前提として依拠される、理論、手段・方法、技術を「基盤」、ヒト名詞類を「相手」として整理し、その他ヲ格のみに見られた「内容」を加えた。図2に見るように、「相手」と解釈できる例と、背景的「基盤」と解釈できる例において、前提性の面でヲ／ニ格例が近接、重複すると考えられる。

⁹ 随意的なノコトは表層的な対格あるいは主格にしかつかないとされ(田窪 2010)、～ニタヨルにもノコトを用いることができない。

なぜヲ格例がヒト名詞類との共起に傾くのかに関しては、様々な角度からの考察が必要だが、有情物が非情物と比較すると手段・道具としての利用を想定しにくく、一方で資金、衣食住など多面的に依拠の対象となり得ること、またヒト名詞類は依拠(依拠主体)と同場面にない場合も無理なく成立することが関係する可能性がある。

またヲ格例が移動動詞と共起しやすい理由について、中止形への集中とヒト名詞をとる例への集中とは強く関連すると考えられる。ヒト名詞の場合、非ヒト名詞に比して依拠の内容が明示されず、それを後続節で補う必要が出てくることが多いと推測できる。しかし当然ながら主題や前文脈等で補う例もあり、他の要因も絡むだろう。その一つとして「叔父を頼りに上京する」のような「～を頼りに V」文の存在が、ヲ格例の中止形に集中する理由の一つである可能性が考えられる。「～を頼りに V」文との形式の類似によって、後続節を伴う場合、～ニタヨルよりも～ヲタヨルの方が表れやすいのではないか。

上記二点の問題には、近世までは、移動や人に言い寄る意を中心に表していたタヨルが、近代以降、移動の意を表しにくくなっていったという通時的変遷に帰する部分がある可能性がある。2節で中世以降の変遷を記述し、3節でこの点について考察する。

なお、「頼りに V／頼りと V」文との関係¹¹、タノム等の意味的に類似する語との関係を明らかにすることは今後の課題とする。

2. 中世以降の変遷

タヨルは中世には心理的依拠の意味だけでなく、物理的な移動の意があったようである。しかし現代語では移動の意はほぼ失われている¹²。2節では、タヨル自体に移動の意を(通常の用法において)含まなくなった時期、現代語と同様の様相が見られるようになる時期とその要因を探る。

2.1. 中世のタヨル

『日葡辞書』に「そばへ近づく．例、Fitono motoni tayoru.(人の許に便る) また、ある人に何か物を頼むとか、ひいきにしてもらうとかするために、その人と友情を結ぶ、あるいは、交際する。」(620, 1)とあるように、中世では、心理的な意味とともに、実質的な移動の意をもっていたようである。後半の記述があることから、「そばへ近づく」が、「親しむ」「取り入る」など相手との関係を狭めるという抽象的な意味ではなく、何らかの目的を伴ったものであれ、移動の意を表すと考えてよい。

しかし本節の調査では中世において、「そばへ近づく」意を表すと考えられる用例は得られなかった。タヨルは『山谷抄』(1500年頃)に3例、『蒙求抄』(1534)に1例、『コンテム

¹¹ 「～を頼りに」にはスル以外の動詞が後接する例が多い。また「頼りと V」ではスルが後接する例にほぼ占められる。

¹² 注1を参照のこと。筆者の感覚では、場所を表す二格名詞(句)とヲ格ヒト名詞(句)が共起しない限り、現代語で実質的な移動を含意することはない。名詞の意味、構文がタヨルに残る“移動”を浮かび上がらせるのかもしれないが、詳細を論じるのは今後の課題とする。

ツス・ムンヂ』(1596)に1例見られる(調査資料は本章末参照のこと)。(27)(28)の二格名詞はモノ名詞であり、『日葡辞書』の記述以外の用法も存在する。また(29)のように、典拠を二格名詞句とする例(33)も見られる。

(27) 此水仙花詩ニ借水一トシタハ谷カ語病ト評スルソ有レトモ其マデハ無事ソ・谷モソ
コニハ迷マイソ・水仙ノ字ニタヨリテシタマテソ (山谷抄五 28 オ)

(28) ご作の物の大切はたばかりの事あり、変る事もあり : Christo のご大切は二心なく届き
給ふ也。ご作の物ニ頼る物はともに倒るべし。 (コンテムツス・ムンヂ 108-12)

(29) 別本ニ東土ニ棲遅ト有ハ李白集ニ東土山ト云ニタヨルカソ (蒙求抄 1-12 オ)

中世には名詞タヨリは見られるものの、動詞タヨルの例はごく少数で、いずれも二格例である。

2.2. 近世のタヨル

近世期のタヨルはほぼ二格名詞を伴う例か、ヲ／ニ格名詞を伴わない例である¹³。ヲ格例は(30)に示した『醒醉笑』(1628)の1例が見られるのみであり、その後は近世後期に至っても現われない。孤例であり判断材料が乏しいため、本節ではこの例の扱いを保留する。

(30) 思ひの外俄に日の暮ぬるまゝ、灯のあるをたより、宿をかりぬ。
(醒醉笑一ふはとのる 38 ウ)

タヨルが移動の意を含むとすると、地名や建築物など、場所を表す名詞をとりやすいと予想できる。また場所を表す名詞が店舗や住居であった場合は、背後にその場所にいる人間が想定されやすいだろう。現代語では普通「先生が妹のところへ来た」のように人名詞には「ところ」を付加して場所化しなければならない。しかし「先生が妹を尋ねて来た」「私に手紙が来た」という表現が可能であり、場所を表す名詞や一部のモノ名詞(「木」など、大きさや到達点としての適切さによって移動先となり得る具体名詞)だけでなく、人名詞の場合も移動先として捉えられる可能性は充分にある。名詞が抽象物、場所性を読み取りにくい具体物になると名詞に向かう移動とは捉え難くなる。

タヨルの用例が得られた資料は、近世前期が上方、近世後期が江戸の資料に偏り、変遷を捉えるのに難はあるが、前後期で大きな変化は見受けられないため、ひとまず重大な問題はないものとして進める。近世期の二格例 22 例のうち、場所を表す名詞(店、建築物等。以下、場所名詞)が 7 例である。また人名詞は 8 例で、場所名詞と合わせて 15 例(約 7 割)が場所、もしくは人名詞をとる(表 3・A)。二格を伴わない例においても被修飾語や行為が向かう先は場所名詞、人名詞であり、その他の具体・抽象名詞は 6 例にとどまる。

¹³ タヨリナシや名詞タヨリの用例も得られるが、本節では扱わない。

【表 3】¹⁴ 近世のタヨル

	～ヲタヨル	A 名詞 (人/場所)	B 共起動詞	～ニタヨル	A 名詞 (人/場所)	B 共起動詞	その他	動詞総数
竹斎(仮名草子)(1621-1623)								0
醒醉笑(1628)	1	0/1 灯りのある	宿を借る	4(3)	1/0 におい・言句・ 子・夜咄	くひやぶる・ 申す・行く・案	1 言い寄る	6
仁勢物語(仮名草子)(1639-1640か)								0
雑兵物語(1657以後1683以前)								0
百物語(1659)								0
浮世物語(仮名草子)(1659以後1666 以前)								0
理屈物語(1667)							1 かた・引きこ む	1
一休関東咄(1672)								0
狂哥咄(1672)								0
秋の夜の友(1677)								0
当世軽口咄揃(1679)								0
杉楊子(1680)				1	1/0 主君	追従を言ふ		1
軽口大わらひ(1680)								0
好色一代女(1686)				4	3/1 女郎・暗物・内 儀/宿	見る	1 所=暗物	5
本朝二十不孝(1686)							1 人の娘	1
男色大鑑(1687)				5(1)	0/4 竜骨車・床・草 葦・茶屋・庵	見る・待つ	2※ 店	7
新竹斎(1687)				1	1/0 ～のもと	望む	1 寄せつけぬ	2
二休咄(1688)							1 軒	1
好色万金丹(1694)								0
堀川波鼓(1707)								0
傾城禁短気(1711)								0
大経師昔暦(1715)				1	0/1 宿	聞く		1
博多小女郎波枕(1718)							1(1) 親、舅	1
近世前期 計	1	1		16(4)	6/6		9	26

¹⁴ いずれも手紙・知らせ・噂等を意味する例は含まない。総数以外は用例のない場合、空欄とした。0内は、「立ち寄る」「近づく」など移動の意で解釈する余地のないものの用例数を表す(内数)。名詞と共起動詞をそれぞれの下部に挙げた。下線は移動の意のみで解釈できる例、*は格助詞を伴わない対象であることを示す。関東・江戸語資料に色を付けた。

※：1例が移動の意のみ。

辰巳之園(1770)								0
夕涼新話集(1776)				1	1/0 貴人	幸がある		1
今歳笑(1778)								0
敵討義女英(1795)							1 所	1
塩梅余史(1799)				1	1/0 別の師	稽古をはげむ		1
ふしみた(1802)				1(1)	秀名	うたよむ		1
東海道中膝栗毛(1802-1822)				1	0/1 宿			1
浮世風呂(1809-1813)								0
駅路馬士唄二篇(1814)				1(1)	片言、寝物語	題す		1
河東方言 箱まくら(1822)								0
白痴物語(1825)								0
春色恋廻染分解(1860-1865)								0
近世後期 計	0			5(2)	2/1		1	6
近世 計	2	0/1		22(6)	9/6		10(1)	32

場所名詞である(31)のほか、(32)は「～のもと」、文脈から移動を伴うと判断できる。(33)は移動の意のみを表すのではないとしても、移動の解釈を排除できない。一方で(34)は「竜骨車」(揚水機)を生計の道具としていることを意味し、移動が含意されない。表3において格助詞を伴わない例としてその他に分類した用例も、被修飾語や文脈から移動を含意すると判断できる。

- (31) 続て又雄(をんどり)の何羽も見えて、佳興此時點(こざかし)き者、彼草葺に便りて見るに、籠に雉子入て、えしれぬ男二人身を隠してありしが、(男色大鑑 3-263)
- (32) 茶師のもとにたよりて、葉撰の見物望む。(新竹斎三 6 才)
- (33) 吾不幸にして疥癬(できもの)を患ひ、今は各位教育(ものおしゆる)事も心くろしければ、今より別の師にたよりて稽古をはげミ給へ。(『塩梅余史』264)
- (34) よき事を見習ひ、国中の武士たる人の子はさもあるべし、秤なやむ町人の忤子、竜骨車にたよる里童子、塩焼浜の黒太郎迄も、形こそ其所作にいやしけれ、此道に一命おしまず(略)(『男色大鑑』1-706)

二格名詞が場所名詞、人名詞であっても、タヨルと共に起する事態¹⁵が移動と相容れない動詞、もしくは移動動詞そのものが共に起する場合、タヨルは移動を含意しないと考えられる。(35)の「是」は「伯父の宿」を指し、(36)の「こゝ」は宿を指す。(35)(36)ともにタヨルが移動を表わしていても文脈上、齟齬はない。一方では(37)は二格名詞が「言句」であり、移動の解釈の余地がない。(38)はこれまでの接し方に言及する文脈であり、移動の解釈が排除される。『大経師昔暦』(1715)以降、全体の用例が少ないながら、移動の意が排除されない

¹⁵ ほとんどが後続節の動詞だが、文脈から関連する事態だと判断した例も含む。

までも、移動を含意しなくても良い例ばかりになることは注意すべきである。

- (35) 爰が彼玉が在所岡崎、あれあの行燈の出た所が則伯父の宿、是に[□]たよつてお里の便宜玉が噂も、聞ふと存参りしが、
(大経師昔暦 619)
- (36) それより宿はづれにいたるに、漸くはたごやの合宿なきていにみゆるあれば、やがてこゝに[□]たよりて弥二「なんとわしらをとめてくんなせへ
(東海道中膝栗毛 61-5)
- (37) 清明流のはかせ、まつ夢の相をおかたりあれ、其言句に[□]たより吉凶を申さんと。
(醒醉笑一祝過るもみな物 70 才)
- (38) 銀ざいふ一つ投出し、はやう出ていけゝといはぬ計に門の方、をしゆる手さへ引入るれば、今は親よ舅よとたよるなこりもきれたるか、又たへ入て泣けるが、
(博多小女郎波枕 922)

(39)は「言い寄る」と解釈される例である。人名詞をとる例は具体物・抽象物に比べて物理的な移動先とも移動を伴わない行為の向かう先とも捉えやすく、現代語では「言い寄る」で表されるような心的距離を縮めようとする行為と、物理的距離を縮める行為との連続をよく表す用法だが、この用法も現代語には見られない。検討を加えるには用例数が少ないが、タヨルが物理的移動を含意しなくなったことと無関係ではないだろう。

- (39) され共形に心は違ひ、不孝第一の悪人年中親の気を背きしを継母よろしく取なし、ひそかに異見する中にも人の娘などたよるを頻りに申せば、かへつて悪心をおこし日比の恩を忘れ、継母の難をたくみ追出すべしと思ひて父に申せしは、
(本朝二十不孝 4-346)

表 3 では移動を含意すると解釈できない例数を内数で括弧内に示した。近世期全体で二格例においては 6 例、その他を含めて 7 例であり、3 分の 1 程度あるものの、まだ移動の意が勢力を保っていると言える。ここでは移動を含意している可能性を最大限に考慮した結果を示している。つまり移動を含意していても矛盾しない例は移動の意を含む例に分類している。(33)のように移動を含意しないと解釈しても成立するが、現代語タヨルのヲ格例に移動動詞との共起例が多く見られるのに対し、近世では移動動詞を伴う例は『醒醉笑』の二格 1 例のみである。移動動詞との共起は、タヨルが移動の意を表さないことの証拠となるが、共起しないという事実も十分条件ではないものの、傍証にはなるだろう。

以上、二格名詞と共起する動詞との両面から、移動を含意しないことが確実な例は少数に限られることを明らかにした。次節では明治期のタヨルについて同様の観点から考察する。

2.3. 近代のタヨル

近代の調査は主に明治期の雑誌を対象として行った(調査資料は本章末を参照のこと)。ま

ずニ格例において、10 例以上の用例が得られる資料においては、ヒト名詞類の割合が 10% から 30% 台を推移し、高くても 40% である(表 4)。用例数が少ない資料においてもヒト名詞は半数に留まる。近世では「宿」などを場所名詞として有情物とは別にしていたが、近代の用例に見られる国や大きな組織は場所性が低いと考えられるため、現代語での考察に合わせ、国や組織と有情物とをまとめて「ヒト名詞類」とした。近世には人もしくは場所名詞がニ格例において 6~7 割を占めていたが、表 4 からは、近代には非ヒト名詞の割合が高まっていることがわかる。

【表 4】¹⁶ 近代のタヨル(雑誌)

	～ヲタヨル	A 名詞	人名詞 内訳	ヒト名 詞類の 割合	B 共起動詞
明六雑誌(1874)	0				
明六雑誌(1875)	0				
国民之友(1887)	1	何		0%	拡張する
国民之友(1888)	1	抽象		0%	至る
近代女性雑誌(1894)	1	何		0%	来る
近代女性雑誌(1895)	0				
太陽(1895)	7	具体3、人4	人	57.1%	潜伏す、(遁げ路を) 求める、案じ煩う、 (置いてもらう)
太陽(1901)	3	具体1、人2	人	66.7%	走る、若隠居する、 (落ちゆく)
太陽(1909)	3	抽象1、具体1、 人1	人	33.3%	来る
近代女性雑誌(1909)	0				
太陽(1917)	0				
太陽(1925)	5	抽象(力)1、具 体1、人3	人	60.0%	上京する
近代女性雑誌(1925)	3	人	人	100%	さ迷い歩く、行く、避 難する
計	24		0	0%	

	～ニタヨル	A 名詞	人名詞内訳	ヒト名 詞類の 割合	B 共起動詞	その他	動詞総数
明六雑誌(1874)	6	抽象2(力1)、準体句1、 人3	人	50.0%	(上下に)通ず、養育する、成長する、保育 する、聞く		6
明六雑誌(1875)	4	抽象1(力)、VN1、人2	人	50.0%	嫁する、区別する、成る2		4
国民之友(1887)	6	抽象3(力1)、具体2、人1	人	16.7%	建てる、保つ、(学術に)進む、発達せしむ、 飛する、推す	2*	9
国民之友(1888)	28	抽象20(力6)、VN2、具体 1、人5	人4、国1	17.9%	(勝を)制す、知る、確信する、達する3、外 交、稟す、為す、立つ6、重くする、統御す る、増進する、示す、定める、赴く、発達す る、先導する	7	36
近代女性雑誌(1894)	4	準体句1、VN1、人2	人	50.0%	判定、募集する、遂げる	2	7
近代女性雑誌(1895)	3	抽象2、人1	人	33.3%	定める	2	5
太陽(1895)	60	抽象21(力5)、具体14、 準体句1、VN6、人18	人11、国・組織6、神 1	30.0%	縁ひゆく、脱れ奔つてタヨル、(往来は、外 行は)	12*	79
太陽(1901)	21	抽象7(力3)、VN2、具体 4、何1、人8**	人5、国・組織3	38.1%	移動動詞なし	3	27
太陽(1909)	24	抽象4(力1)、VN8、具体 4、人8	人3、国・組織4、有 情物1	33.3%	移動動詞なし	3	30
近代女性雑誌(1909)	1	人	人	100%			1
太陽(1917)	14	抽象5(力2)、VN4、具体 1、人4	人1、国・組織3	28.6%	移動動詞なし	4	18
太陽(1925)	10	抽象5(力4)、VN1、人4	人1、国・組織2、有 情物1	40.0%	移動動詞なし	2	17
近代女性雑誌(1925)	2	VN1、人1	人	50.0%	移動動詞なし	6*	11
計	183		57	31.1%		43	250

¹⁶ ヲ／ニ格の出現傾向に文語・口語体の別は関係ないようであるため、本節では区別せずに扱う。『明六雑誌コーパス』『国民』の用例はすべて文語である。共起動詞に関して、用例数が多く煩雑になるのを避けるため、1895年『太陽』以降は移動動詞がある場合のみ示すが、明治初期の様相は確認できるものと考えられる。

*…ヲ、ニ共起1例、**2つ以上の名詞をとる例があるため、ニ格例の総数と異なる。

『明六雑誌』(以下、『明六』)1874・1875 年では用例数が多くないものの、ヒト名詞(例(40))の割合が 5 割で近世後期よりも割合が低い。(41)のような準体節の例も 1 例得られる。ただ非ヒト名詞に分類したものの中でも、3 例が「(人の)力」(例(42))「慈愛」「労」という、人の内側から生じるもの、あるいは人の行動と共に生じる類のものである。これより後の年代の資料にも「力」は抽象名詞の中で高い割合で出現する。ただしこれは政治、軍事関係の記事が多いためとも考えられ、割合が高いことだけをもって証拠とはできないが、近世にないタイプの名詞をとるようになったことは注目に値する。

(40) 故に本邦支那の人洋學を講求する多くは米書に依り洋説を聴く主として米人に頼る
(明六 1874「西洋の開化西行する説」津田真道)

(41) 印書の事始まるに頼りて上下に通じて智識上進したる故なり
(明六 1874「西学一斑 (三)」中村正直)

(42) 母の弱は父の力に頼らざれば其子を養育するに足らず
(明六 1874「人間公共の説 (二)」杉亨二)

また『明六』(1874・1875 年)の時点で、共起する動詞の面からも、ほとんどの例でタヨルに移動の意があると捉えることはできない。(43)は「之」=人名詞「母」をとり、幼児の保育に関する一般的な見解であり、タヨルに移動の意を認めることはできない。

(43) 夫れ人の母たる者は先づ身體を健強に保たざる可らず 身體健強ならざれば則單に
之に頼る所の幼穉能く保育するを得可らず (明六 1874「妻妾論 (四)」森有礼)

(40)のみに移動を含意する可能性が残されるが、「米書に依る」と並列されており、その可能性も低いだろう。

1875 年の『明六』以降は移動を含意する余地がある例は見られなくなり、(通常の用法として)移動の意が消失したと見てよい。さらに 1887 年の『国民之友』(以下、『国民』)には移動(を含意する)動詞が後続する例が見られる(例(44))。(44)は移動動詞を伴わない場合でも、タヨルに移動の意があると解釈できないが、移動動詞との共起が顕著な現代語ヲ格例との連続を考えるにあたって、近代のニ格例に移動動詞が共起するようになったという点は看過できない。

(44) 子鷺は親の羽節にたよらず。己が翼の力を頼んで空中に獨飛する事を學ぶ故生長の後は。鳥類中の帝王とまで呼ばるるとかや。
(国民 1887「家政改良論 (一)」金森通倫)

近世には抽象名詞であっても、「片言、寝物語」「言句」などの五感で認識できる類の名詞であった。近代では 1888 年『国民』までに出現する抽象名詞には、「慈愛と労」「力」「広

大」「哲学」「慶」「特権」「機」など観念的な抽象名詞が見られる(例(45)(46))。近世に比して、より抽象度の高い名詞をとるようになったということであり、(41)の準体節やサ変名詞をとる現象も軌を一にする変化であろう。

(45) 其一國の強大を形る一大要素即疆域の廣大に頼りて一國の獨立安寧を保つを得べしと
(国民 1887「外交の二大傾向」伊集院兼良)

(46) 現に世間は此古來の哲學に頼りて日々に學術に進むに非ずや、
(国民 1887「有賀長雄氏の社會進化論を評す」高橋五郎)

1887 年の『国民』以降、ヒト名詞が半数を占める資料もあるものの、全体的にはニ格例における抽象名詞の割合は高いまま、用例の少ない 1909 年の『近代女性雑誌』を除き、具体名詞も含む非ヒト名詞が 3 分の 2 前後を推移する。下に「漢字」「外債」等、多様な非ヒト名詞が見られる 1895 年の『太陽コーパス』(以下、『太陽』)のニ格名詞を挙げる。

眷遇、漢字、漢字の智識、法律 2、進歩、泰西文明、遺烈、貿易風、希臘の歴史家アーリアンの印度史に其の顛末を詳述せし者有る、短兵の利、外債、文学、勤劳、二書の恵、協翼、成功、威圧、默佑、船運、木船、納涼、新税、單線式若くは複線式、農産物、臨時収入、蒸氣電氣の効力、水力、軍用準備金、舟便、澱川、[七五、五七等の數のみ]、忠勇、義勇軍の力、水軍の力、陛下の聖武、宮、威繼光、狩野の門、神武 3、祖宗の威靈、臣庶、陛下の盛徳、外国公使、海軍、日本の手、外国、先輩、人々、萬國貨幣會議の力、貴下、西遼、日本人、日本郵船会社、此輩(漁夫)、此人、三検使)

近世期におけるタヨルにも移動先とは捉えられない名詞をとる例が得られたが、近代にはより抽象度の高い名詞が出現するようになり、多様になったことがわかる。

ヲ格例については、近代に入るとある程度得られるようになる。ヲ格名詞が「何」の例を除くと 1888 年の『国民』の例(47)が近代の調査資料中で最初期のヲ格例である。

(47) 乃ち讀書の聲を便り其發する處に到れば門に傍して三ツ根郷學校と大書す校舎の傍に村役場あり
(国民 1888「近南洋紀行(二)」)

1895 年の『太陽』以降、ヲ格例がまとまって得られるようになり、ニ格例数も増加している¹⁷。出現初期こそヲ格名詞はヒト名詞ではなかったが、この 1895 年の『太陽』以降、用例数が少ないながらもヒト名詞類が平均して 6 割程度を占める。

また出現当初からヲ格例は中止形に偏り、ニ格例にほぼ移動動詞がないのと対照的に、移動動詞を伴いやすい(例(48))。

¹⁷ 近世は名詞タヨリの例が多く得られるのと対照的である。

- (48) 明治十七年同郷の先輩たる穂積陳薫博士を頼つて上京し、法律を學ぼうとしたのであつたが、英語の素養が足りない爲、豫備門（高等學校）に入學が困難であると言はれたので
(太陽 1925 奮闘実話)

移動動詞を伴うということは、タヨル自体が移動を含意しないということであり、移動動詞を伴わない(49)のような例を見ても、「研究」は移動先とは捉えられない。近代のヲ格例は移動を含意しないと言える。ヲ格例に関しては現代語に見られたのと同様の傾向が観察される。

- (49) 歴史的資料が有るならば無論推理的研究を唯一方法として便るには及びません。
(太陽 1895 「事物変遷の研究に対する人類学的方法」 坪井正五郎)

次に、明治期の小説、落語における調査結果を表 5 に示す。判断材料とするには全体的に用例数が少ないものの、ヲ格例に関しては雑誌と同様の様相を示す。ニ格例は僅かなため、判断が困難である。

【表 5】近代のタヨル(小説・落語)

	～ヲタヨル	A 名詞	人名詞 内訳	ヒト名詞類 の割合	B 共起動詞
浮雲(1887-1889)	1	人	叔父	100%	出京する
真景累ヶ淵(1888)	2	人2	伯父2	100%	厄介になる、 逃げて来る
お玉牛(1894)	0				
婦系図(1907)	0				
こころ(1914)	1	人	叔父	100%	
護持院原の敵討(1913)	0				
二人の友(1915)	1	人	私	100%	来る
計	5			100%	

	～ニタヨル	A 名詞	人名詞 内訳	ヒト名詞類 の割合	B 共起動詞	その他	動詞総 数
浮雲(1887-1889)	0					0	1
真景累ヶ淵(1888)	0					0	2
お玉牛(1894)	0					1(へ)*	1
婦系図(1907)	1	ノ節		0%	狂言して～ 誘い出す	1	2
こころ(1914)	0					0	1
護持院原の敵討(1913)	1	人	知人	100%		0	1
二人の友(1915)	0					0	1
計	2			50%		2	9

* <(目当ての人のいる)場所>へ。移動動詞共起(「参る」)。

また、『朝日新聞縮刷版』(1879-1999)の見出しを検索し、現代語までのヲ格例のみを調査

したところ¹⁸、大正九年(1920)以降ヲ格例が得られ、昭和二十年(1945)までの間に得られた22例のうち1例を除いてヒト名詞類であり、移動動詞と共に起する例は約3割であった。(50)はヒト名詞かつ移動動詞が共に起する例である。

明治以降、終戦までと現代とを比較すると、ヲ格例は移動動詞との共起傾向が強まっているようである。ヒト名詞類と共起しやすい点に変化がなく、むしろ明治期の小説・落語や終戦までの新聞の用例の方がヒト名詞類と共起する割合が高かったと言える。

以上に見たように、1880年代後半以降、ニ格例が本格的に多様な名詞をとるようになり、同時期にヲ格例がまとまって見られるようになる。ニ格例が近世の移動を含意する用法と連続的なものから、多様な名詞と共に起するように変化するとともに、ヲ格例がヒト名詞類、移動動詞を伴う構文全体で、移動を含意する用法を主に担うようになったものと考えられる¹⁹。

本論文では、変化の過程を次のように考える。タヨルが何らかの目的の元に移動する意を表していたことから、次第に二格名詞を場所としてではなく、目的を達するのに関わるヒトとして捉える意識が強まり、同時にタヨル自体は移動の意が薄まっていった。目的を達するのに関わるとの意識から、近代にはヒト名詞から、人間の内面や、行動に密接に関係する抽象的な語へとれる名詞の範囲が広がった。これを契機に、より広範な抽象名詞をとりやすくなった、というものである。また、そもそも中世の典拠を表す用法や、近世にも少数ながら見られた「依拠」のみを表す用法が素地として存在したことが、タヨルの近代における変化を推進したのであろう。

18 見出しのみを対象にヲ格例を採取した後、本文を確認した。ほかに見出しには移動動詞が共起しないが、本文中に移動が明示されている例が2例ある。

現代語においてはヲ格例が心理的依拠をより表しやすい等、近代とは異なる分担になっており、この点に関しては、さらに検討を加える必要がある。

3. タヨルの変遷、ヲ／ニ格選択のまとめ

タヨルがもつ「移動」の意の消失について、共起する動詞と名詞の面から記述考察した。中世にはヲ格例は見られず、①「そばへ近づく」②「友情を結ぶ、あるいは、交際する」の意で用いられたとの記述が『日葡辞書』にあったのに加え、③「(書物の記述等)を基に」と解釈できる用法が存在した。本章の調査範囲内で得られたのは、③の用法のみである。また、ニ格名詞はヒト名詞に偏らない。

近世のタヨルにもヲ格例がほぼ見られず、タヨル自体に「近づく」「立ち寄る」など移動を含意する例が3分の2以上を占め、“移動”が中心的な意味のひとつであると考えられる。タヨルが移動を表わす場合は当然、ニ格名詞が場所・ヒト(のいる場所)であることに加え、移動を表わさない例においてもニ格名詞が場所名詞・ヒト名詞の例が約7割を占め、近世のタヨルはヒト名詞類と共起しやすいと言える。「近づく」のは何らかの目的のためであって、ニ格名詞、被修飾名詞が店・家等、場所の場合、中にいる人物が想起され、「交際しようとする」意との連続が伺える。

ここでタヨルと意味的に近く、同じ「頼」の字を用いる「頼む」についての先行論を見る。岩下(1993)は「頼む」の格表示の変遷について、『天草版伊曾保物語』『国字本伊曾保物語』『醒醉笑』ではヲ格名詞が人であること(人が示されない場合は頼むことがら)を示し、近世に入って現代語とほぼ近くなったとして、『好色一代男』『好色二代男』で、「人ニ内容ヲ～」と「人ヲ～」が併用されることを指摘している。岩下(1993)は近世の時点でタヨルが「頼む」と近くなっていると述べるが、挙げられているタヨルの例はいずれも移動を含意する余地があるものであり、これをもって意味的接近の証拠として用いるには慎重になるべきである。ただ、「人ヲ頼む」という典型的な形が影響し、「人ヲタヨル」に影響した可能性はある。

近世にヒト名詞類と共起しやすかったタヨルは、明治期に幅広い名詞をニ格でとるようになり、物理的な移動の意味が希薄化した。同時期にヲ格例が増加し、ヒト名詞類の表示を主に担い、移動動詞を伴う構文を典型として、ニ格例と緩く棲み分けがなされた。

以上のように、タヨルが移動を含意しなくなり、現代語と同様の傾向を示すのは明治以降であること、またこの意味変化とヲ／ニ格表示が連動していることが明らかとなった。現代語においては、ヲ／ニ格表示の別による特徴の差異には、近代の用例と異なる部分もある。明治期以降、現代語までの変遷を詳しく論じるのは今後の課題としたい。

第5章 調査資料・用例出典 (表にはタヨルの用例が得られた資料のみ掲載している。)

*は日本古典文学大系(岩波書店)

**は国立国会図書館近代デジタルコレクション

【中世】土井忠生・森田武・長南実編(1980)『邦訳 日葡辞書』岩波書店／江口正弘編(1986)『天草版平家物語 対照本文及び総索引 索引編』明治書院／大塚光信・来田隆編(1999)『エソボのハブラス 本文と総索引 索引篇/本文篇』至文堂／松岡洸司・三橋健解説(1979)『コンテムツス・ムンヂ』勉誠社, 近藤政美(1980)『ローマ字本 コンテムツス・ムンヂ総索引』勉誠社／『義経記』*, 天田比呂志(1982)『義経記文節索引』清文堂／『曾我物語』*, 大野晋・武藤宏子編(1979)『曾我物語総索引』至文堂／西端幸雄・志甫由紀恵編(1997)『土井本太平記 本文及び語彙索引』勉誠社／『史記抄』『四河入海』『蒙求抄』以上、岡見正雄・大塚光信編(1971)『抄物資料集成』第1-7巻・別巻(解説索引篇, 索引篇) 清文堂出版／『山谷抄』『百丈清規抄』『杜詩統翠抄』『日本書記兼俱抄』以上、大塚光信編(1980-1981)『続抄物資料集成』第1-3, 6, 8-10巻(解説・索引) 清文堂出版／鈴木博(1972)『周易抄の国語学的研究』清文堂出版／来田隆(1997)『湯山聯句抄本文と総索引』清文堂／内山弘編(1998)『天正狂言本 本文・総索引・研究』笠間書院／池田廣司・北原保雄(1972-1983)『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇』上・中・下, 表現社, 北原保雄ほか編(1982-1989)『大蔵虎明本狂言集総索引』1-8, 武蔵野書院／北原保雄・小林賢次(1991)『狂言六義全注』勉誠社, 東京都立大学中世語研究会編(代表 小林賢次)(2005)『狂言六義総索引』勉誠出版

【近世】『假名草子集』*／『嘶本大系』(国文学研究資料館)／北原保雄編(1973)『きのふはけふの物語研究及び総索引』笠間書院／深井一郎編(1973)『雑兵物語研究と総索引』武蔵野書院／『浮世草子集』*／『曾根崎心中』『堀川波鼓』『冥途の飛脚』『夕霧阿波鳴渡』『博多小女郎波枕』『心中天の網島』『大経師昔暦』以上、近世文学総索引編纂委員会編(1986)『近世文学総索引 近松門左衛門』第1・3-5巻, 教育社／『好色一代女』『本朝二十不孝』『男色大鑑』以上、近世文学総索引編纂委員会編(1990)『近世文学総索引 井原西鶴』第5-10巻, 教育社／鈴木雅子・村上もと編(2006)『江戸小咄鹿の子餅 本文と総索引』新典社／『黄表紙 洒落本集』*／『浮世床』…『洒落本・滑稽本・人情本』(日本古典文学全集)小学館, 稲垣正幸・山口豊(1983)『柳髪親話 浮世床総索引』武蔵野書院／『東海道中膝栗毛』*／『浮世風呂』*／『春色梅兒誉美』*／浅川哲也編(2012)『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』おうふう／『新月花余情』『聖遊郭』『陽台遺編』『【女:壯】閣秘言』『郭中奇譚』『短華藥葉』『酔のすじ書』『十界和尚話』『南遊記』『善玉先生大通論』『当世嘘之川』『こゝろの外』『ふしみた』『色深狭睡夢』『北川蜆殻』『当世粹の曙』『河東方言箱まく』『風俗三石士聖護院宮近習』以上、洒落本大成編集委員会編(1978-88)『洒落本大成』第2-4・13・16-18・20・23・24・26・27・補巻, 中央公論社／『穴さがし心の内そと』…前田勇 翻刻・解説, 近代語学会編(1974)『近代語研究』四, 武蔵野書院

【近代】『明六雑誌コーパス』『国民之友コーパス』『近代女性雑誌コーパス』『太陽コーパス』以上、国立国語研究所／「白歯」「鶯宿梅」「菅公の木像」「妾の内幕」「焼物取」以上、『嘶の種』(1891)駸々堂**／「百年目」「黒玉潰し」以上、『速記の花』(1892)関西速記学会**／「猿後家」「吹替息子」「三枚起請」「棒屋」以上、『滑稽曾呂利叢話』(1893)駸々堂**／『お玉牛』(1894)駸々堂**／「胴乱の幸助』『胴乱の幸助』(1894)駸々堂**／『真景累ヶ淵』…新日本古典文学大系『落語怪談咄集』岩波書店／斎賀秀夫ほか編(1975)『牛店雑談安愚楽鍋用語索引』(国立国語研究所資料集9)秀英出版／『坪内逍遙集』(明治文学全集筑摩書房)／二葉亭四迷『浮雲』, 泉鏡花『婦系図』, 田山花袋『蒲団』『田舎教師』以上、『新潮文庫 明治

の文豪』／夏目漱石『こころ』，森鷗外『山椒大夫・高瀬舟』，芥川龍之介『羅生門・鼻』以上，『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』／『朝日新聞縮刷版』(1879-1999)聞蔵Ⅱビジュアル，
<http://database.asahi.com/library2/main/top.php>

【現代】『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言)，国立国語研究所，
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> ／『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』(1995)新潮社

第6章 「恐(れ)る」の通時的変遷

1. はじめに

現代語「恐れる」(以下、オソ(レ)ル)はヲ／ニ格を共にとる動詞であり(1)、中世末期でもロドリゲス『日本大文典』で「Ni(に)のつく与格か Vo(を)のつく対格かを要求する中性動詞」(p.381)にオソルル(Vosoruru)が挙げられる。

(1) 太郎は花子の剣幕 {を／に} 恐れて、何もできなかった。

このような感情動詞のヲ、ニの対立に関して、2章で述べたようにヲ格名詞が「対象」、ニ格名詞が「原因」を表すとする先行研究がある(佐藤 1997 など)。しかし例えば(1)ではヲ格が対象、ニ格が原因という対立は必ずしも該当しない(「*太郎は花子の剣幕[□]で恐れて、何もできなかった」¹⁾)。また(1)において、工藤(1978)で指摘されるような意志性に差があるとは考えられず、持続的／一時的(益岡・田窪 1987)などでも捉えきれない。感情動詞の中に上述の差異が当てはまる語があったとしても、オソレルの振る舞いには別の観点からの考察が必要である。

現代語オソレルに関して、ヲ、ニの違いという観点から記述した論考は見当たらない。現代語においてはヲ格例が豊富なのに対しニ格例が少なく、ヲ、ニの差が見えにくいことも一因であろう。しかし歴史的にみると、現代語ほどの偏りなくヲ、ニが用いられており、歴史的な考察を行うことで、現代語の様相を説明するための示唆が得られる可能性がある。ヲ、ニの機能については多くの研究の蓄積があるが、既述のとおり、格形式の史の変遷や共時のヲ／ニ格交替現象の問題に関しては、十分に解明されているとは言えない。この点からもヲ、ニ両格形式をとり、通時的な把握が可能なオソルを取り上げ、格形式対立の様相を記述考察することには意味があろう。

以下、2節でオソ(レ)ルに関する先行研究を確認したのち、3節で中世における共時態の様相を見るため、和漢混交文を中心に提起して考察する。特にオソルがとる名詞に見られる差異を示すことで、ヲ、ニの機能的対立を明らかにする。さらに4節で訓点資料における調査結果を、5節で中世から現代語の様相への大まかな流れを記述し、オソ(レ)ルの格形式選択要因の手がかりを求める。

2. 先行研究と問題の所在

従来、オソルについてはオヅとの対照や活用の変遷の観点から論じられた。例えば関(1993)は和文語と訓読語とを対照する中で、訓読語としての「おそる」と和文語としての「おづ」を対照し、「おそる」が心理動作語、「おづ」が“怖くてブルブル震える”といった意

¹ 「原因」を表すことの証拠としてデ格との置き換えテストを行なうことの妥当性は別に検討を要する。

味を表す具体的動作語だとする。

従来とは異なる観点として、田中(1990)(1995ab)はオソルの格形式を考察する。田中(1990)は格形式に注目し、平安・鎌倉時代のオソルとオヅを対照して、～ヲオソルの場合は抽象性が高い事物や他者の領域の事柄が多く、ニ格の場合は具体物が多いとする。しかし一方でヲでもニでも表わされる名詞は少なくなく(後述)、田中(1990)のいう具体性／抽象性では捉えきれず、補語名詞(句)の更なる検討の余地がある。さらに田中(1995b)では『今昔物語集』におけるオソルとオソロシを調査し、オソルがとるニ格名詞は眼前の存在であり、ヲ格をとる場合は「意識の中で対象化されているもの」(p.58)とする。またオソロシが準体句をとるのに対し、オソルは「事」をとることが一般的で、準体をとる場合はニ格になるとする。本論文ではこの指摘が中世および中世以降に広く当てはまるかを確認し、より詳細に補語名詞(句)の内実を検討する。

3 節の調査範囲は、オソルの史的展開を把握するにあたり、①オソルの用例がある程度まとまって見られたのが院政期以降であること、②和漢混交文にオソルが現れやすく、訓点資料、和文資料と比較して現れ方が多様なこと²から中世和漢混交文とする。オヂオソル、オソレナゲクなど感情・思考動詞と共起する例は調査対象から除いた。またその考察結果を基に 4 節で現代までの大まかな変遷の様相を確認する。

3. 中世和漢混交文のオソル

3.1. 中世和漢混交文におけるオソルの概観

3 節では中世和漢混交文におけるオソルを考察する。資料は説話、軍記物を中心に調査した(調査資料は章末を参照されたい)。オソルはヲ、ニ両者を取り得、同じ名詞をとる例も存する(2)(3)。

(2) みさごは荒磯に居る。すなはち、人^をおそるゝがゆゑなり。(方丈記 p.41³)

(3) (略)すなはち人をつかはしてみせられければ、狐一疋來て供物等をくひけり。さらに人^におそるゝ事なし。(古今著聞 265 話 p.214-17)

ここで各資料においてオソルが一文中にヲ、ニ、無助詞の対象、トと共起する用例数⁴を表 1 に示す。

² 築島(1969)などで、和文にはオソルがほとんど用いられず、訓読文でよく用いられるという指摘がなされている。

³ 用例は日本古典文学大系(底本:大福光寺蔵本(鎌倉中期頃))によった。古本系三条西家本(室町中期)では「人ニオソルゝ」となっており揺れている。ここではヲ格例として扱うが、検討を要する。

⁴ 確例のみを扱い、オヅとの区別ができない例は除いた。またオソ(ル)ラク(ハ)も除外する。オソレナガラは副詞用法が見られるが、完全に副詞として用いられているとは言えない例も見られるため、調査対象とした。

またト例は引用のトであり(1 例のみ「～として」の意を表わすトテ)、様態を表わすトは得られなかった。ニとトが共起する例が『太平記』に 1 例見られる(用例 17)以外には、ヲ、ニとの共起例は得られなかった。

【表 1】中世和漢混交文におけるオソルの用例数

	ヲ	無助詞 対象有	ニ	ト	左記以外	総数	ヲ格例割合	左記以外 割合
大鏡	1	0	0	2	3	6	16.7%	50.0%
今昔物語集	29	1	10	2	114	156	18.6%	73.1%
寶物集	0	0	3	0	0	3	0.0%	0.0%
沙石集	22	2	2	0	24	50	44.0%	48.0%
方丈記	1	0	0	0	1	2	50.0%	50.0%
海道記	0	0	2	0	0	2	0.0%	0.0%
宇治拾遺物語	3	0	0	0	5	8	37.5%	62.5%
十訓抄	2	0	1	0	2	5	40.0%	40.0%
古今著聞集	2	0	2	0	12	16	12.5%	75.0%
歎異抄	2	0	0	0	1	3	66.7%	33.3%
保元物語	3	0	3	0	1	7	42.9%	14.3%
平治物語	0	0	2	1(トテ)	4	7	0.0%	57.1%
覺一本平家物語	6	0	14	0	14	34	17.6%	41.2%
太平記	28	1	14	2	26	71	39.4%	36.6%
義経記	1	1	1	0	5	8	12.5%	62.5%
曾我物語	3	1	3	0	14	21	14.3%	66.7%
計	103	6	57	7	226	399	25.8%	56.6%

「左記以外」は上記四種以外の用例で、感情主のみを伴う例(4)や連体修飾の例(5)を含む。

(4) (略)燈籠の火のやうなる物の、おとゞの御身より出て、ばと消るが如くして失にけり。人あまたみ奉りけれ共、恐れて是を申さず。(平家物語三 p.241-14)

(5) 病者、かしらをそらで年月を送りたるあひだ、ひげ、かみ、銀の針をたてたるやうにて、鬼のごとし。されども、此女、おそるゝけしきなくして、いふやう(略)

(宇治拾遺物語六〇p.167-6)

資料全体では「左記以外」が 56.6%で過半数を占め、ヲ／ニ格名詞やトを伴わない形が基本と考えられる。これらの例は見聞きしたことが前文脈にあり、それを受けての感情の描写例や、感情主を想定しにくい一般論⁵の例が見られる。前者の場合、感情主が前文脈または一文中に表示される場合がある。見聞きしたことが明示される例は多く見られ、ある状況を受けて抱く感情を描写する点で、ニやトが共起する例に類する。

ヲ、ニ共起例について、どちらが優勢かには資料によって差があり、全体的にはヲ格が優勢な一方で、ニ格例のみの資料も存在する。これは文体によると言うよりも、オソルが文脈に応じてどちらの格形式も要求し得ることを示すと考えられる。次節では両格形式がとる名詞のタイプ別に考察を行う。オソルはデキゴトを明示的に表わすことができる名詞節をとり得、特に名詞の意味特性を検討する際には、ヲ／ニ格名詞が節をなす場合と節以外の名詞の場合をわけて考察することが有益だろう。なおオソルの性質、オソルがとる格

⁵ 一般論を述べる際によく用いられるのが「オソルベキ～」だが、現代語では高程度を表す用法(ex.恐るべき早さ)が多く見られるのに対し、中世和漢混交文では確実に高程度のみを表す用法はほとんど見られないようである。

の機能を分析するためには全用例を考察すべきだが、本論文ではヲ／ニ格の選択要因を明らかにすることを目的とするため、ヲ、ニ以外については適宜触れる程度に留める。

3.2. ヲ／ニ格名詞の意味特性

3.2.1. 節をなす場合

まず「城を出給ふ事」のようなヲ格名詞が節をなす例に注目する。ヲ格例 103 例中 22 例(約 21.4%)が節をなす例であり、ヲ格例の中では高い割合を示すわけではないが、構文に特徴がある。ヲ格例における被修飾名詞の上接要素を表 2 に示す。約三分の二の 14 例がム、ウズを伴い、被修飾名詞は 1 例を除き全て「コト」である⁶。(6)から(8)に～コトヲの例を示す。

【表 2】節＋ヲ格例における節末の要素

	ム	ウ(／ン)ズ	動詞連体形	リ／タリ
用例数	12	2	6	2
比率(%)	54.5	9.1	27.3	9.1

- (6) 潘果、里ノ年少輩ト共ニ、此ノ羊ヲ取テ窃ニ家ニ将帰ラムト為ルニ、其ノ羊路中ニシテ鳴ク。潘果、羊ノ音ヲ人ノ聞カム事ヲ懼レテ、忽ニ其ノ羊ノ舌ヲ抜き捨ツ。
(今昔物語集九―二十三 p.218-9)
- (7) 前々モ、此様ニシテ此ニ来ヌル人ヲバ、返テ此ノ有様ヲ語ラム事ヲ怖レテ、必殺ス也。
(今昔物語集三十一―十三 p.468-2)
- (8) 徐福・文成その偽りの表れて、責めの我が身に來たらんずる事ヲ恐れて、「これは何様龍神の祟りを成すと覚え候ふ。(後略)
(太平記二十六・1183)

ムが基本的にどのような意味を表すかに関しては諸説見られるが⁷、いずれも上接事態が実現していない事態だという点は共通する。これらの例では一様に、ム／ウ(ン)ズル+コトによって表される未実現の事態が実現することを恐怖に感じている。動詞(否定 1 例含む)+コトの例も、6 例とも未実現の事態を表す。(9)(10)は前文脈で明示され、(11)でも「口の虎が身を害し舌の鉤が命をたつ」事態が起こらないよう、「言ヲイタサス」という行動をとる。

- (9) 「南ノ門ヲ出給ニ、道ニ病人ヲ見テ此レヲ問聞給テ弥ヨ不樂給ハズ」。王此ノ事ヲ聞

⁶ 今回は考察の範囲外とした『三宝絵』(984 年、東寺観智院本 1273 年書写)には、次のようにムが句末を構成する準体節の例が見られる。

二人ノ兄ミノ妨ケムヲ恐リテ先立行キ給ヒネ(上巻十一 p.54)

⁷ 「設想」山田(1908)「推量」「非現実」など。尾上(1997(2001 所収))では、述定形式「未然形+ム」に固有の述べ方は「非現実の事態を仮構するという述べ方」(p.457)であるとされる。また高山善行(2005)はムの機能は非現実標示であるとする。(ただし、高山(2005)は連体用法に限った考察であり、コトなど形式名詞は準体用法の問題として別にする必要があるとされている。)

給テ大ニ歎キ給テ、今ヨリハ城ヲ出給フ事ヲ恐レ給テ、弥ヨ嘸メ給フ。

(今昔物語集一―三 p.12-14)

(10) 我レ、後ニ来ラムニハ、師ノ不見給ザル事ヲ恐ル。願クハ此ニ住シ給ヘ」ト請フ。

(今昔物語集七―四十八 p.172-3)

(11) 口ノ虎身ヲ害シ舌ノ鋤命ヲタツ事ヲオソレテミタリニ言ヲイタサス不妄語戒ニアタル。
(沙石集三 134 左 7)

(12)は唯一コト節ではない例だが、これも「宰相が(少将が助命されないことを)耳になさる」という事態は未実現である。リ／タリを伴う例も存在するものの 2 例と少なく、いずれも『今昔物語集』に見られる。

(12) 太政入道、瀬尾太郎兼康に仰て、備中國へぞ下されける。兼康は宰相のかへり聞給はん所をおそれて、道すがらもやう 〽 にいたはりなぐさめ奉る。(筆者注：宰相は少将の助命を嘆願していたが、叶わないことが判明した。) (平家物語二 p.184-9)

(13)は現報譚を聞いた人々の反応である。「報いを受ける」という事態は自分の身に起こったことではないため、把握の確からしさは弱いと考えられ、未実現の事態と同様に確定性が低いと言える。

(13) (筆者注：この現報譚を)聞ク人、且ハ現報ヲ感ゼル事ヲ怖レ、且ハ善根ノ新タナル事ヲ貴ブ。
(今昔物語集九―二十三 p.219-8)

(14) 其ノ史遅参シタル事ヲ怖レテ、忽ギ参ケルニ、中ノ御門ノ門ニ弁ノ車ノ立タリケルヲ見テ、弁ハ参ニケリト云フ事ヲ知テ、官ニ忽ギ参ルニ(略)

(今昔物語集二十七―九 p.103-12)

(14)に関して、岡崎(1973)によると、院政鎌倉時代の「遅参」は原則として「参上するはずの時刻になつても参上しないこと」(p.259)の意を表し、「参上するはずの時刻に遅れて参上すること。」(p.264)の意を表すのは極めて例外的だとする。(14)の「遅参す」も「忽ギ参ケルニ」とあることから、まだ政庁に到着しておらず、「定刻に参上していない」状態である。したがってヲ格上接事態は未実現ではないが、「遅れて参上した」という既実現事態でもない。ここで注目すべきなのは、ヲ格名詞がいずれも補文節をなし、デキゴトを表すという点である。さらにデキゴトはほぼ未実現事態で、確定的な把握ができない事態と言える。

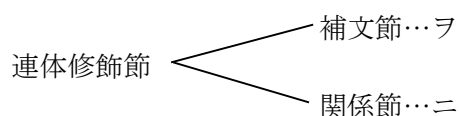
一方ニ格名詞では、節をなす例は 57 例中 2 例にすぎず、場所として解釈される 1 例、接続助詞と解し得る 2 例を格助詞と解釈する可能性を考慮しても 5 例のみである。節を構成する類は 10%に満たず(約 8.8%)、さらにモノ・ヒトを表わす関係節、またはデキゴトとモノの二様に解釈できる準体節しか見られない。接続助詞とも格助詞とも捉えられる(19)を加

えた全 5 例を示す。

- (15) (略)すなはち御旗を引き奪ひて取り、あまつさへ旗持ちたる芋瀬が下人の大の男を
掴みて、四、五丈ばかりぞ投げたりける。その怪力、比類無きにや恐れたりけん、
芋瀬庄司、一言の返事もせざりければ、村上、自ら御旗を肩に懸けて、程無く宮に
追つ着き奉る。(太平記五・548)
- (16) 然レバ公事ト云乍ラ、然様二人離レタラム所ニハ可怖キ事也。
(今昔物語集二十七 - 九 p.104-12)
- (17) 篠村の大勢、これを聞きて、寄せられやせんずらんと、二日路を隔てたる敵に恐れ
て一足も先へは進まず、(略) (太平記三十八・202)
- (18) (略)羊、獅子の怒れる形に恐れて忽ちに地に倒る。(太平記三十八・836)
- (19) 「あなおそろし。入道のあれ程いかり給へるに、ちとも恐れず、返事うちしてたゝ
るゝ事よ」とて、法印をほめぬ人こそなかりけれ。(平家物語三 p.254-14)

(15)は抽象的なモノを表す「比類無い怪力」、または状態を表す「比類無いこと」のどちらの解釈も許す。(16)は場所格として「～所において」と解釈する注釈もあるが、感情の対象と解釈しても、当該名詞は場所を指し、モノに分類される。(17)(18)はいずれもデキゴトではなくヒト・モノを表し、また(19)はデキゴトの解釈とともに、ヒトを表す「お怒りになっている入道」という解釈ができる。いずれも目の前の状況と密接に結びついている。敵が道のり二日分離れているにも関わらず恐怖を抱いている(17)でも、物理的に離れていたとしても「一足も先へは進ま」ない程、眼前の敵と同様に確定的なものとして把握していると言える。

ヲ／ニ格名詞が節をなす場合、ニ格ではデキゴトはとりにくく、モノをとると言え、関係節である。対照的にヲ格ではデキゴトを表し、形式名詞(主にコト)を主名詞とする補文関係にある(図)。



【図】連体修飾節における格形式の分布

3.2.2. 確定性

前節を踏まえると、オソルのヲ／ニ格名詞が節をなす場合、ヲ格は非確定的な事態を、ニ格は確定的な事態をとると考えられる。すなわち両格形式は、確定性において対立していると見ることができる。本論文で言う「確定的である」とは、感情を抱く時点において対象が眼前にある、または感情主がそのように捉えているということを言う。確定的であ

る場合の典型は、対象が視覚を含めた知覚によって把握されている場合である。現実世界に出来た事物と言うことができるが、既実現の事態で眼前にない場合も含むこと、また感情主が眼前にあると見なす場合も含むことから、「確定性」とする。一般的知識、直接知覚していないモノなどになると確定性の程度は漸次低くなる。一般的な知識は、現実の世界の事態の積み重ねによって構成されることが多い。しかし知識は実際の時間軸上に位置づけられない。真理も同様で、時間軸上に位置づけられない点で既実現事態と異なる。つまり事態を時間軸上に位置づけられるか否かという観点から捉えた時、過去や現在において成立したものを確定的とし、未来時に位置づけられるもの、または時間軸上に位置づけられない事態を確定的ではないとする。非確定的である場合の典型は、対象が現実世界になく観念上で構成される場合である。未実現の事態はこれにあたる。

感情動詞が心の動きに重きを置く表現だとすると、現在又は過去の事態に対する感情を基本とするのが自然だろう。確定性は「眼前性」を内包し、「眼前にある」とは言えない既実現事態も含む点で、田中(1995b)の「眼前性」とニ格が関係するとの指摘を発展させたものと言える。確定性という観点はヲ／ニ格名詞が節をなす場合のみならず、オソルにおけるヲ／ニ格例の差異を統一的に説明できると考える。

3.2.3. 節以外の名詞の場合

次に節をなす場合以外の例を検討する。ヲ格例(A)の名詞は未だ直面していない事物、もしくは名詞そのものではなく名詞によって引き起こされる事態を表す。(A)以外のものをヲ格例(B)に分類した。

- ヲ： (A)後世、後世ノ事、悪道、悪業、悪趣、悪、過、罪障、業報、妄念、執心、因果ノ道理、信施、呵責、殺生、多生ノ苦、危亡、鞭、片方の憤り、上の御咎め、趙高が讒、風雨の難、三族の刑、毛ノ色 (35／81=43.2%⁸)
- (B)鬼神ナント、仏神、彼ノ女、勅命、その間、権門勢家の正税・官物、我とが、権、冥見の瞬、官法、秦の兵、敵、軌、名、皇化 (15／81=18.5%)
- ニ： 此ノ音、風、龍顔、海賊、我、我等、主、中宮、梶原、木曾義仲とかや、此御詞、軍、矢、太刀、仏法、害心、この夢、天、仏天、聞(きき)、秋、この勢、綱が勢ひ、権門、王位、王ノ仰セ、宣旨院旨 (32／52=61.5%)

次例(20)の「後世」は生まれ変わった後の生涯を指し、(21)「上の御咎め」は「いかなる御沙汰にか会ひ候はんずらん」とあるように「上に咎められるだろうこと」、(22)「執心」は「執着する心をもつこと」を表す。その他も同様に未だ直面していないモノや未実現の事態を表す。

⁸ 名詞+ヲ 81 例のうち、35 例が A に分類されることを示す。以下同じ。

- (20) 其ノ後、偏ニ後世ヲ恐レテ、弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、極樂ニ往生セムト願フ。
(今昔物語集十五-三十三 p.430-4)
- (21) これも咎ありし人の行方なれば、いかなる御沙汰にか会ひ候はんずらんと上の御咎めを恐れて、隠し侍るにこそと思し召さるる事も候ひぬべけれ。(太平記十三-585)
- (22) 我相ヲノソキ執心ヲオソレテ名利ヲ思ハス才覚ヲモトメスシテサシアタリタル執着妄念ノトカヲ覚知シテノソクヘキナリ
(沙石集四 184 右 9)

これらは既実現事態や眼前のモノ・ヒトとは対照的に、対象把握の確定性が低い。(23)(24)のようにヲ格名詞「鞭」「毛の色」によって引き起こされる事態(=鞭で叩かれること、毛を求める人の手にかかること)に恐怖を感じる例も存在する。これらも未実現の事態である。

- (23) それ穀尽きぬれば民窮し、民窮しぬれば年貢を備ふる事無し。疲馬の鞭を恐れざるがごとし
(太平記三十五-396)
- (24) (筆者注：珍しい毛色の鹿が人里から隠れていたわけを聞かれて)鹿大王ノ御輿ノ前ニ跪テ申サク、「我レ毛ノ色ヲ恐ル、ニ依テ、年来深キ山ニ隠レタリ。
(今昔物語集五-十八 p. 441-2)

名詞＋ヲ格例の半数近くが(A)に分類されるのに対し、(B)に示したように、未実現の事態や未だ直面していないモノとは捉えられない例も 15 例存在する(25)(26)。しかしその内実は(25)のように、描写されている場面において実際に鬼神に対して恐怖の感情を抱くという個別的事象があるのではなく、「人が鬼神に恐怖する」というような個別的な場面から離れた事象として言及する例が多くを占める。(26)のような個別的事象や、ヲ格名詞が実見されたものである例は 2 例に過ぎない。確定性が高い場合の典型が眼前のモノが感情の対象である場合だとすると、直接的な把握に依らない名詞は、把握の確定性が低い。

- (25) 佛在世ニ舍利弗目連廣野城トイフ國ヲスクルニソノ國ノ人ニケカクレケリ 鬼神ナントヲオソル、カコトシ
(沙石集七 324 左 2)
- (26) 「都にて軍をせざりつるは敵を恐るるにはあらず、ただ將軍にところを置き奉る故なり。
(太平記三十九-594)

一方ニ格には実見されている「矢」「太刀」のような例が多く見られる。また(27)では「軍にまけておつきに～」からわかるように既に起こった「軍(いくさ)」であり⁹、未実現の事態に比して確定性が高い。(28)は現実矢が放たれるという事態は未実現だが、具体的な状況を設定し、その状況下で感情主が実際に目にすることを前提とした発言である。典型例ではないが、確定性は高いと見てよいだろう。

⁹ この例の場合、人が逃げ去る前に軍を眼前にしている可能性が高い。

(27) 「(略)軍にまけておつるきに、いかばかりのことをかおもふらん。害してかへれ。」
と宣へば、鞭をあげて六條堀河の宿所にはせきたり、みれば軍(いくさ)におそれて
人一人もなかりけり。(平治物語 238-14)

(28) 御こしに矢をまいらすべし。是為朝がはなつ矢にて候まし。天照太神・正八幡宮の
はなたせ給ふ御矢也。駕輿丁矢におそれて御こしを打捨てまつりにげちりなむ。
(保元物語 84-13)

またニ格名詞には(29)「木曾義仲」のような、ヲ格名詞には見られない固有名詞の例も存在する。精査したところ固有名詞の例はいずれも個別事象の描写であり、確定性が高いと考えられる。

(29) それに壽永の秋のはじめ、木曾義仲とかやにおそれて、一門の人々住なれし都をば
雲井のよそに顧て、(略) (平家物語灌頂巻 p.436-12)

ニ格に 1 例のみ未実現の事態を表す名詞をとる例(30)があるが、現段階では例外として判断を保留する。

(30) 敵王きゝ、この者、身をすて、面をよごし、はれにつかふべき臣下にあらず、さり
ながら、世かはり、時うつれば、さもやと思ひ、かたわらにゆるしおくとはいへど
も、なを害心におそれて、ゆるす心なかりけり。(曾我物語 73-12)

ヲ格例は、名詞が未実現の事態や未来時に直面する可能性のあるモノか、或いは個別事象の描写ではない例が大半である。ニ格例は名詞が眼前のモノであるか、個別的な事象を描写する例でほぼ占められる。ニ格例はほぼ確定性が高く、ヲ格例は対象把握が非確定的なもの、確定性の低いものが多いと言える。それぞれに例外が見られるものの、この傾向は明らかである。

3.2.4. 共通する名詞

さらにヲ／ニ格に共通して見られる名詞についても検討する。このような名詞には次のものがある。

【ヲ／ニ格例に共通する名詞】

威・威勢／気色／罪¹⁰／人／世／(ヲ：御前、一人(=天皇)、ニ：公)¹¹／指示語(此レ・ソ

¹⁰ 【威・威勢】ヲ：王威、雷霆の威、ニ：威、佛ノ威、頼朝が威勢、靈威、朝威、皇威、その威、武威、趙高が威勢

【気色】ヲ：上ノ御気色、ニ：此男ノ気色、入道殿の御気色

【罪】ヲ：罪、不孝の罪、余桃の罪、破戒の罪、ニ：罪(4.3 で列挙した罪障や悪業と意味が類似するが、別に扱う)

レ／此ノ事・かやうの事)

ただし「威勢・威」と指示語以外はヲ／ニ格どちらかが孤例である。ここでは、「威・威勢」「罪」を検討する。「威・威勢」では 13 例中 11 例がニ格であり、ニ格で受けるのが一般的だと考えられる。

「威」には「自然に人を従わせるような勢い」「武力」の意がある。「武力」の意に近いほど、直接的な影響が及ぶ。ニ格例には(31)(32)のような武力の行使が伴う例があり、矢を放つという実際の行為(31)、武力そのもの(32)などいずれもニ格名詞が直接把握できる。一方ヲ格例の(33)(34)は具体的な武力とも、比喩的な表現であって実質的でないとも考えられるものである。(33)の「雷霆の威」は朝廷の軍を指すが、激しい雷に例えている。(34)の「王威」は軍勢や武力ではなく、「王が何か(迫害行為を)すること」を意味すると考えられ、節をなす場合に確定性の低い事態を表すことと通じる。

(31) 「たとひいかなる天雷なりとも、皇威に恐れざらんや」とて、弓に矢を取り添へて向ひ給へば、五体すくみてうつ臥しに倒れにけり。(太平記十二-525)

(32) 元弘元年八月二十七日、主上笠置へ臨幸成りて、本堂を皇居と成さる。始め一兩日の程は、武威に恐れて、参りつかうまつる人一人も無かりけるが、(略)(太平記三-11)

(33) 今その敗軍を集めてかの余衆を擁ふに、雷霆の威を恐れず、重ねて斧鉞の罪を待つ。(太平記十七-756)

(34) 「われかくしをきたる劔、たづね給ふべきにぞ、めさるらん。とりいだすまじければ、さだめてせめころされなんず。(略)」さて、鍛冶が子、二十一歳にして、母のおしへにしたがひ、かの劔ほりいだしもちけり。されども、王威をおそれて、里へはいでず、山にかくれみたりける。(曾我物語 171-5)

「気色」「人」「世」のほか、指示語も、語により程度の差はあれ、ヲ、ニと確定性の有無が関連する傾向がある。ただし節の場合に比してヲ、ニの差は明らかとは言えない。

「罪」でも孤例のニ格と共にヲ格例の大半が、犯すかもしれない(＝未実現の)罪であるが(例(35))、ヲ格に 2 例、既に犯した罪の例が見出される。(36)の「其罪」が罪によってもたらされる苦果を指すと解釈すれば、未実現と言えるが、証拠となる文脈がないため、「犯してしまった罪」として扱う。

(35) (略)願クハ仏、哀ヲ垂給テ、我等ガ道ヲ捨テ家ニ返ラム罪ヲ許シ給ヘ」ト。(略)今汝ヅ罪ヲ恐レテ家ニ返ラム事、彼ノ愚痴ノ人ノ如キ也。(今昔物語集一十七 p. 53-4)

(36) 弘高、少年の時、出家したりけるが、後に還俗したるなり。其罪をおそれて、みづから千體の不動尊を書いて、供養しけるとなん。(古今著聞集 387 話 p.311-14)

¹¹ 天皇や将軍を指す語として一括して扱う。

(37)は「罪」をとる唯一の二格例だが、未実現事態と言え、ヲ、ニの別による差異は認められない。しかしこの例は、『本朝文粹』に「大臣は祿を重んじて諫めず、小臣は罪を畏れて言はず。下の情は上に通ぜず」(慶滋保胤)とあるのによったものとされ¹²、ヲ、ニが揺れていることが分かる。節をなさない名詞の場合、節をなす例ほど確定・非確定が明示的でないことから、格表示に揺れがあるものとも考えられる。ただ、ヲ格例には「不孝の罪」等、名詞の内容を表すような修飾語を伴う例が見られ、説明的である。このことは未実現事態を説明的に明示する名詞節をとる例と通じる。

(37) 「大臣は祿を重じて諫めず、小臣は罪に[□]恐れて申さず」と云事なれば、をの／＼口をとち給へり。
(平家物語一 p.129-7)

天皇や将軍を指す語に関して、ヲ格に「御前」(曾我物語)と「一人」(平家物語)の計 2 例、ニ格に「公」(今昔物語)の 1 例が見られるが、先述のような差は見いだせない。政の頂点に立つ人物は実際の人物でありながら、眼前にしていたとしてもその存在は遠いものであっただろう。意味的に境界例と見なすことができ、そのためヲ／ニ格の両者が表れると考えられる。

以上のように同じ名詞をとる例では、節をなす場合と同様の差が現れる「威・威勢」「気色」から、そのような差異が見出されない「罪」や天皇・将軍を指す語まで様相に差があるものの、ニ格例では確定性が高いこと、ヲ格例では確定性が総じて低い傾向がわかる。

3.3. オソロシの様相

当節ではオソルに意味的・形態的に対応する形容詞オソロシの様相を観察する。意味的・形態的に対応するオソロシと比較することで、オソルの担う機能が体系の中でどのように位置づけられるのかが明らかとなろう。本節では中世軍記物から『平家物語』『曾我物語』『太平記』の三作品を取り上げる。

オソロシの用例は、一文中に対象となる事物が明示されている例(38)、誘因への接触(「見て」「聞いて」など)が明示されている例(39)、その他、前文脈から対象がわかる例(40)に大まかに分けられる。(39)では地獄の様を見て、(40)では光る物の様子を見て恐怖の感情を抱いている。

(38) 又、源中納言雅頼卿のもとに候ける青侍がみたりける夢も、おそろしかりけり。
(平家物語五 p.342-15)

(39) 客位の僧、これを見て、魂も浮かれ、骨髓も砕けぬる心地して、恐ろしく覚えければ、主人の山伏に向つて「これはいかなる罪人を、かやうに呵責し候ふやらん」
(太平記二十・1039)

(40) 彼を聞くにいいいよ不思議に思ひて、目も放たず、これをまもりて、遠き渚の海面

¹² 日本古典文学大系『平家物語 上』(岩波書店)注 p.128。

を遥々と歩み行くところにこの光り物次第に磯へ寄りて、円成が歩むに従つてぞ流れて来たりける。さらば子細ありと思ひて立ち留まりたれば、光り物、ちと少なく成りて、円成が足許に来たれり。恐ろしながら立ち寄りて取り上げたれば、金にもあらず石にもあらざるものの、三鉈柄の剣などのなりにて、長さ二尺五、六寸なるものにてぞありける。
(太平記二十五・252)

明示・非明示いずれの場合も、状況を見る、聞くなど直接の知覚によるものが大半であり、特に、『太平記』は「見て(聞いて)」というような知覚の手段と、対象を明示する例が比較的多い。ほかに「客観的に見て恐怖を抱かせるような特徴を持っている」ということを表す属性の用法があるが、少数に留まる。以下で、各資料の特徴的な点を記述する。

3.3.1. 『平家物語』のオソロシ

『平家物語』では、全 48 例中、対象が明示されている 16 例の内訳は表 3 のようになる。

【表 3】『平家物語』オソロシの対象明示例数

名詞		準体節		コト節	対象明示例
コソ	モ	コソ	ゾ		
5	1	9	3	1	16

約三分の二がデキゴトを表す準体節かコト節であり、準体節+コソは全体の過半数を占める。注目すべきなのは、準体節はすべて準体節末がケリによって構成されることである(例(41)(42))。1 例のみ見られるコト節の例(43)でも「兵物どもいさみのゝしる事」は既実現事態である。いずれも眼前の事態に向けられた感情として描かれている。

- (41) 是も万づおもふさまなるがいたす所なり。いかにもして平家をほろぼし、本望をとげむ」とのたまひけるこそおそろしけれ。(平家物語一 p.123-8)
- (42) 其朝關白殿の御所の御格子をあけるに、只今山よりと(ッ)てきたるやうに、露にぬれたる檣一枝、た(ッ)たりけるこそおそろしけれ。(平家物語一 p.130-14)
- (43) 平家の人々は、宮並に三位入道一族、三井寺の衆徒、都合五百餘人が頸、太刀長刀のさきにつらぬき、たかくさしあげ、夕に及て六波羅へかゑりいる。兵物どもいさみのゝしる事、おそろしな(ン)どもおろか也。(平家物語四 p.319-5)

このことは、～ヲオソルでは節が表すデキゴトが未実現事態であったのと対照的である。現代語では「太郎が帰って来るのが恐ろしい」や、「廃校に一人でいるのは恐ろしい(ものだ)」は許容されるが、こういった文が見られないということである。

3.3.2. 『太平記』のオソロシ

『太平記』のオソロシは『平家物語』とは多少異なった様相が見られる。全 30 例中、対象を明示する 6 例は、いずれも名詞の例であり、準体節またはコト節の例が存在しない。また引用のトを伴う、～ン(ズラン)ト+オソロシク(思シ・覚エ)という構文の例が 5 例得られた(例(44)(45))。

- (44) もし追ひ懸け参らす事もやあらんと、恐ろしく思し召しければ、一足も先へと御心ばかりは進めども、いつ習はせ給ふべき道ならねば、夢路を辿る心地して、ただ一所にのみ休らはせ給へば、こはいかがせんと思ひ煩ひて、(略) (太平記七・672)
- (45) 「事の他に叶ふまじき由を言はば、命をも失はれ、思ひの他の目にもや合はんずらん」と恐ろしければ、「申してこそ見候はめ」とて、まづ帰りぬ。(太平記二十一・613)

これらの例では未実現の事態に対する感情を表す。動詞オソルでも引用のトを伴う例の多くでム・ウズル等が現れている。一方で準体節またはコト節の形では、未実現事態は表されない。

次の連体修飾節の例(46)でも、被修飾名詞「神罰」は既に成立し、現出している。

- (46) その人こそあらめ、子孫まで一時に滅び給ひける神罰の程こそ恐ろしけれ。
(太平記十二・574)

また、感情形容詞に特徴的な、(47)「あな、恐ろし」のような感情表出表現の例も存する。このような例は『平家物語』にも見られ、眼前性・体験性が現れている例である。なお(48)のような属性表現も数例見られる。

- (47) 僧、これを見て、あな恐ろし、これは無間地獄にてぞあるらんと恐怖して見居たるところに、火車に罪人を一人乗せて、牛頭・馬頭の鬼ども、轆を引いて虚空より来たれり。
(太平記二十・1007)
- (48) 「佐渡とやらんは、人も通はぬ、恐ろしき島とこそ聞ゆれ。日数を経る道なれば、いかにとしてか下だるべき。その上、汝にさへ離れては、一日片時も命永ふべしとも覚えず」
(太平記二・485)

3.3.3. 『曾我物語』のオソロシ

動詞オソルではヲ、ニを伴わない例が多くを占めた『曾我物語』では、準体節もコト節も 1 例ずつ現れる。

- (49) (略)二百四人よりあひて、祐親うちて、領所を一人して進退せんと思ふ心、つきに

けり。(略)【筆者注：祐親は】第一に叔父なり、第二に養父也、第三に舅なり、第四に烏帽子親なり、第五に一族中の老者なり、かた 〱 もつて、おろかならず。かやうに思ひたつぞ、をそろしき。いかにも思慮ある人に候や。あまつさへ地領をうばわん事、不可思議なり。
(曾我物語一 p.65-11)

(50) 其時、鬼申けるは、「われら、神通をこえたりとおもへ共、佛の方便におよびがたし。
まして、後世こそおそろしけれ」
(曾我物語十一 p.396-16)

コト節の例ではケリが前接し、成立した事態であることが明示される。(49)では準体節末は動詞基本形で構成されるが、「祐親を討とうと思ひ立つこと」という、時間軸に位置づけられない、事態そのものを指し、未実現の事態ではない¹³。一方、名詞をとる(50)は「後世」をとり、～ヲオソルと同様にまだ直面していないものに対する感情を表す。

3.3.4. オソルとオソロシの対応関係

前節までに得られた結果からオソルとオソロシの関係を考察する。オソロシはオソルと同様に、デキゴトを表す節(主に準体節)、名詞を感情の指向先(現代語におけるガ格対象相当語句)としてとる。準体節、コト節では既実現事態を表し、未実現事態はト節で表す。一方オソルでも、名詞ではさまざまなモノ、デキゴトを表すものの、節をとる場合はほぼコト節+ヲの形式で、未成立事態、非確定的事態である。またオソルの二格例はデキゴトを補語としてとりにくいが、オソロシは感情の指向先として準体節でデキゴトを表すことができる。つまり、節によって既実現のデキゴトを表す場合は準体節+オソロシが、未実現のデキゴト、非確定的なデキゴトを表す場合はコト+ヲオソルもしくはト+オソル／オソロシが用いられやすいと言える。デキゴトの場合はオソルとオソロシで節の形態を伴った対立を示し、ヲ格が主に未実現の事態を担う。感情の指向先がモノの場合は～ヲオソルと～ニオソルで既実現／未実現の対立を示し、オソロシにおいては対立がない(表 4)。確定的な事態をとる点で、眼前性・体験性を表すオソロシと、～ニオソルが共通する。

【表 4】 事態の成立／非成立の観点によるオソル・オソロシの分布

	オソル	オソロシ
未実現〈デキゴト〉	コトヲ	
	～ト	～ト
未実現〈デキゴト／モノ〉	Nヲ	N
既実現〈デキゴト〉		準体節
既実現〈モノ〉	Nニ (／ヲ)	N

以上、少なくとも中世の軍記物語においては、オソルとオソロシは、感情の対象となる事象が既実現なのか未実現なのかが、構文の違いに反映する傾向があることを示した。

¹³ この例の場合、「思ひ立つ」という事態は実際に成立している。

感情動詞と感情形容詞の対応に関して、中古語を対象とした安本(2009)は、本論文とは異なる観点から考察している。「中古語では、「主題」の感情を表す際には形容詞を用い、一方「主題」とは異なる人物の感情を表す場合には動詞を用い」(p.57)たとする。その理由として、感情形容詞には、「表現主体に属す人物の自己の感情のみを表」(p.60)し、感情動詞は「その他の人物の感情を表すことが基本であり」(同)、形容詞にはない「状態描写」の用法を担っていたとする。現代語では「太郎は悲しそうだ」のように「そうだ」を付すことで「人称制限」を解除することができ、現代語の感情形容詞が感情表出と状況描写のどちらもできるのとは異なると述べている。このような観点から見た中世における対応関係を明らかにすることも必要である。

4. 中古から南北朝期の訓点資料

オソルは和文には用いられることが少なく、訓点資料には用いられること従来指摘されている(築島 1969 など)。訓点資料は前節の混交文に大きく影響していると考えられるため、ここで中古以降、南北朝までの訓点資料におけるオソルの様相を簡単に確認しておく。表 5 に示すように、オソルは少数ずつながら用いられており、先行研究の指摘通り、ヲ格例が比較的目立つ。平安末期までは感情主以外の項名詞を伴わない例、または引用のトを伴う例が中心に用いられている。平安末期以降になるとトを伴う例が減少し、ヲ格例が若干増加する。また、ニ格例も散見される。

【表 5】訓点資料におけるオソルの格形式

訓点資料(カッコは非確 例数)	加元年	ヲ	対象有	ニ	ト	その他	計
東大寺諷誦文稿	796以後～天長頃	(1)	(2)	0	0	(1)	(4)
知恩院蔵本大唐三蔵玄 奘法師表啓古点	平安初期。おそらく850～890	0	0	0	0	1	1
地藏十輪経元慶七年点	883	1	0	0	1	4(1)	6(1)
金光明最勝王経古点	平安初期	0	0	0	1(1)	2(1)	3(2)
法華経玄賛淳祐古点	950頃	1	0		2(3)	0	3(3)
法華経義疏長保四年点	1002	0	0	0	6	(1)	6(1)
西大寺本不空羅索神呪 心経寛徳点	1045	1	0	6(1文中)	0	0	7
高山寺蔵本大毘盧遮那 成仏経疏	1082	2	0	0	2	4	8
天理大学図書館・国立 京都博物館蔵南海寄帰 内法伝古点	平安末期～院政初期	1	0	0	0	0	1
神田本白氏文集	1113	1(1)	0	0	0	1	2
図書寮本日本書紀	1142頃	(2)	0	1(1)	0	1(1)	2(4)
大唐西域記長寛元年点	1163	2	1	0	0	1	4
和泉往来	1186	1	0	0	0	0	1
高山寺蔵本論語古点清 原本	鎌倉初期	3	1	0	0	2	6
高山寺蔵本莊子古点甲 巻（第27～33・29欠）	鎌倉初期	(1)	0	0	0	1	1(1)
高山寺本史記古点（殷 三・周四）	鎌倉初期13C.初か	0	0	1	0	0	1
醍醐寺蔵本遊仙窟	1344(1300書写交点本を書写)	0	0	0	1	3	4
高山寺蔵本論語古点中 原本	1303	6	1	0	0	2	9
高山寺蔵本莊子古点乙 巻（第23、26）	南北朝期	2	0	0	0	0	2

トを伴う場合、(51)(52)のように、～ム＋カト、または否定のズ／ジ＋カトの形式がほとんどである。

(51) 聞（き）て〔而〕法を^{ソシ}謗^{オソ}ラムカト^{オソ}恐^{オソ}りてなり¹⁴。

（大乘大集地藏十輪経福田相品第七 116-4）

(52) 其（の）、信（せ）不かと^{（お）そ}懼（る）を以ての故に、事を指（し）て之を答す。

（法華義疏序品末 413－12）

また訓点資料ではヲ格例に準体節をとる例も存在する。コト節の例も存し、補文節をとるという点で混交文と共通する。節の例のほとんどが(53)のように未実現の事態を表す。(54)に挙げた1例のみ既実現の事態をとるものがあるが、これはニ格でも読まれている。検討を要するが、今回の資料中に類例がないため、判断を保留する。

(53) 便（ち）阿羅漢果と謂（おも）ヒて〔而〕誹謗を生（じ）て當に地獄に墮（ち）ナムトイフコトヲ恐る。

（法華経玄賛巻第三 202－12）

¹⁴ 〇は補読、□は仮名で訓じた助詞を表す。

- (54) 大歳戊辰二年秋九月難波の^モ小野の^{キヤナカリシ}皇后、恐宿不敬を^{コト}て (モトリキヤナカリシコト^ニオソリテ: 左訓) 自死 (略) (図書寮本日本書紀 15-294)¹⁵

平安後期頃までのヲ格例は、節によって表された未実現事態をとる点でト例と共通していたが、院政期頃になるとヲ格に名詞(句)の例が現われる。先述のヲ格が若干増加することとも鑑みると、ト例より優勢になってきたと考えても良いだろう¹⁶。

訓点資料には(55)のようなオソルラクハ〜ム(コト)(ヲ)の形式があり、現代語オソラクのように完全に副詞化しているわけではない。

- (55) 若(し) ^{モタ}點して〔而〕^(サ)説(か) ^ホ不^{もの}は、^ホ知る^{もの}者由無^ホけむ。如^ホ直^ホ・言^ホせむと^ホ欲^ホスレは復(た) 恐(る) ラ(く) は聞く^{もの}者の^{ウラ}怨^ラミ見^ラレムことを。 (南海寄帰内法伝古点②7/20)

また訓点資料中では、ニ格は少数に過ぎないが、混交文では一定数得られ、違いが見出される。平安後期以前のニ格例には「顛倒」「怨酬」「危難」といった未実現の事態名詞が見られ、ヲ、ト例と共通する。院政期以降は用例がごく限られ、既実現の事態もとるようになるという変化が見られる。

5. 近世以降のオソ(レ)ル

3節では中世和漢混交文の様相を考察した。本節では、続く近世以降の様相を示し、現代語までの変遷を概観する。近世以降の調査結果と、参考として和漢混交文以外の中世の資料の調査結果を合わせて表6に示した。中世の抄物では他資料に比して、ヒト名詞が多いが、未実現事態を表す節が現れる点、確定性の低い名詞が現れる点は和漢混交文のヲ格例と共通しており、一見具体的なヒト名詞の場合も、その人物が「何かすること」に対する感情と解釈できる点が、ニ格例と異なる。なお、『コンテムツス・ムンヂ』は用例の多くがヲ格例だが、翻訳書であり、別に検討が必要である¹⁷。

近世になるとオソルの用例自体が減少する。中世以前は口語要素が強い作品にも現われていたが、近世には口語要素の強い作品には現れないようである。また調査資料内に限ってはああるが、一時ニ格名詞の種類が少なくなる。読本で、古い表現も残す『椿説弓張月』、文語が多い近代女性雑誌コーパスではニ格例が比較的多く、名詞も多様性があるが、近代

¹⁵ 日本古典文学大系(岩波書店)では「この不敬によって誅せられることを」という解釈がなされている。

¹⁶ 同じ頃のと漢混淆文でもトは散見される程度である。ただしこれはオソル単独例に限り、オヂオソルなどにはト例が見られる。

¹⁷ 表には挙げていないが、『ぎやどぺかどる』でもヲ格例が過半数を占める。キリシタン資料、抄物を含めて調査した結果、ヲ格例が過半数を占めるのは、総用例数が10例以上ある資料では『コンテムツス・ムンヂ』『ぎやどぺかどる』のみである。

小説¹⁸ではニ格例がオソレル 82 例中 1 例のみで、非常に少ない。一方で、近代小説の 7 割以上の作品で、項名詞やト格を伴わない例(左記以外)ではなく、ヲ格例が高い割合を示し、調査した作品全体を見ても、ヲ格例が 6 割以上を占め、ヲ格が高い割合を示す傾向のまま現代語オソレルの様相に至る。ヲ／ニ格例の勢力に大きな変化があったのは明治以降と言える。次節以降、時代区分ごとに様相を記述する。

【表 6】中世以降のオソル・オソレル

	ヲ	対象有	ニ	ト	左記以外	総数	ヲ格例割合	左記以外割合
史記抄	4	1	1	3	10	19	21.1%	52.6%
蒙求抄	4	0	2	3	7	16	25.0%	43.8%
天草版平家物語	2	0	3	0	8	13	15.4%	61.5%
コンテムツス・ムンヂ	24	0	0	0	0	36	66.7%	0.0%
きのふはけふの物語	0	0	0	0	1	1	0.0%	100.0%
醒睡笑	2	0	5	2	6	15	13.3%	40.0%
近松浄瑠璃	0	0	0	0	6	6	0.0%	100.0%
西鶴作品	4	2	3	0	11	20	20.0%	55.0%
浮世風呂	1	0	2	0	6	9	11.1%	66.7%
椿説弓張月	28	5	20	0	39	94	29.8%	41.5%
春色梅兒誉美	1	0	1	1	0	3	33.3%	0.0%
近代女性雑誌コーパス	51	1	11	2	40	105	48.6%	38.1%
近代小説	53	5	1	0	23	82	64.6%	28.0%
新潮の100冊	486	17	9	50	166	728	66.8%	22.8%

5.1. 近世の様相

近世前期は中世の用例と同様、ニ格例では確定性の高い名詞が共起する。次の例(56)(57)はいずれも眼前の事態や、経験したデキゴトによる。また、数少ないニ格名詞に前代に見られた「勢」や「威」が現れており、ニ格が定型的に用いられている可能性がある。

(56) 同三月廿九日山中の城を攻落されたれは其勢に恐れ箱根足柄の城をあけのきけるに
山中を攻ればあくる箱根山にくるも早き足柄のてき (『醒睡笑』巻一落書 21-8)

(57) 女郎の子細をしりすぎて後にはやりくりを見とがめ、大夫も是にをそれ客もきのどくさに(略) 【是＝女郎の行為】(『好色一代女』304)

近世後期の『椿説弓張月』ではニ格の用例数も名詞の種類も多く、この資料においては前代と大きくは異ならない。ここでは古い表現も残す読本という資料の性質によるものと考えておく。そのほかの資料では、ヲ格例にも確定性の高い名詞を伴う例が数例見られる

¹⁸ 『明治の文豪』『CD-ROM 版新潮の 100 冊』所収の次の 15 資料である。明治以降、大正 15 年(1926)以前に書かれた小説を対象とした。二葉亭四迷『浮雲』、泉鏡花『婦系図』『歌行燈・高野聖』、田山花袋『蒲団』『田舎教師』、夏目漱石『こころ』、森鷗外『山椒大夫・高瀬舟』、芥川龍之介『羅生門・鼻』、有島武郎『小さき者へ・生まれ出づる悩み』、梶井基次郎『檸檬』、志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』、島崎藤村『破戒』、谷崎純一郎『痴人の愛』、樋口一葉『にぎりえ・たけくらべ』、武者小路実篤『友情』

ものの、二格例と同様に傾向はほぼ変わらない¹⁹。

5.2. 近現代の様相

近現代においてもヲ格は確定性の低い事態と共起し、特にヲ格名詞が節をなす場合に顕著である。しかし前代と異なる点も見られる。近代において前代と大きく異なる点は、ヲ格の割合の高さである。近世以前はヲ格例の割合が高いのは限られた資料のみ(注 16 参照)だったが、近代女性雑誌コーパス、近代小説では全体の 5 割前後を占める。現代でもヲ格の割合が高くなっており、変化傾向として認められる。

また節をなす割合が、それまでは多くて 3 割に満たない程度だったのが、現代語では約 4 割に増加している。ヲ格例全体の割合が増加した中で、補文節をとる役割を保持し、さらに補文節以外の名詞節もとるようになっており、名詞節を補語として組み入れる構造が拡大したと言える。ヲ格例で節をなす例のほとんどが確定性の低い未実現事態を表すことに変わりない点、ヲ格例自体が増加している点からも、感情を抱くこと自体を表すのを中核的な役割としたオソルが、感情の指向先を取り込み、説明的に描写することを基本とするようになったことが伺える。このことは即時的でない感情をより表しやすくなったとも言え、益岡・田窪(1987)による、現代語においてヲ格のみをとる感情動詞は持続的感情であるとの指摘につながると考えられる。

また明治期にはヲ格例で節をなす例に形容詞＋ノ節の例(58)が見られる。(58)「その悪感化の著しいの」は、前文脈からは未実現事態「悪い方向にひどく感化されること」と解釈できるが、形容詞「著しい」で表されており、確定的な事態への進出の萌芽とも言える。

- (58) 本間の細君の放縦奢侈迄も見習ひはせぬかと、夫は内心心配を始めた。と云ふのは、その本間の細君と云ふのが、自分の妻の芳子よりは、ずっと下等な無智な女で、芳子等よりは、ずっと大膽な圖々しい物があるのらしいので、その悪感化の著しいのを恐れたのであつた。(仲木貞一 1925「細君同志」『婦人倶楽部』)

これはオソレルにおけるヲ格の機能分担の拡大と言え、オソレル全体の中でヲ格例が増加しているのもこのことによると考えられる。この機能は二格例やヲ／ニを伴わない例において果たされていた機能と交替したものの可能性があるが、意味的な側面を含めて変化を追う必要がある。

現代語において状態の例がノ節(例(59))、コト節合わせて 5 例、タ形が用いられる例がノ節に 1 例(例(60))ある。(60)は話し手自身が見られたか否かが分からない状態での発話であり、「見られたかもしれないこと」のため、確定性の高い既実現事態とは言えないだろう。そのほかは(61)のように未実現事態を表す。

¹⁹ 近世では(今回は調査対象としていない洒落本・黄表紙本でも)、オソレル単独例には、程度を表したり、「酷い」様を表わしたりする用法が多く見られ、このことも大きな異なりであるが、今後の検討課題としたい。恐怖の感情を表す例では、やはり二格名詞は確定性が高く、ヲ格名詞は確定性が低いと解釈できる。

- (59) 老婆が彼と二人きりなのを恐れるのではないかと危ぶみ、同時に自分の様子が老婆を安心させるとは思えなかったので、ラスコーリニコフは老婆がまたドアに手をかけて、ひっぱった。
(ドストエフスキー『罪と罰』)
- (60) 私の側には何も疚しいことはなかったのに、むしろ私は、私が見られたのを惧れていた。
(三島由紀夫『金閣寺』)
- (61) 女たちは私たちの労働部隊の先導者に男たちの姿が見つかることを恐れ、私たちが街道のかなたにあらわれるのを見るや否や町の裏門から男たちを退避させた。
(開高健『パニック・裸の王様』)

このように節をなすヲ格名詞例において、既実現事態への進出が認められるものの、中世の様相と同様に、確定性の低い事態をとりやすい。節以外の場合は未実現事態とも、既実現事態を表す名詞や確定性の高いヒト・モノとも共起する。

現代語二格の9例は、中世と同様に、ほぼ確定性が高いもの(例(62))が占め、補文節をなす例は解説文中にはではあるが1例あり、これも既実現事態である(例(63))。

- (62) 歩兵团式の四角な隊形は、守備兵からの銃火にも怖れる気配はなく、倒れた兵は、予定のことであるかのごとくわきに押しやられるだけで、隊形はまったく崩れない。
(塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』)
- (63) しかし、延年が誅されたのに恐れて匈奴の地にのがれ、投降した。
(中島敦『李陵・山月記』解説)
- (64) そのくせ自分でも予見できる苦痛に恐れ戦っていたのである。
(モーム『月と六ペンス』)

二格例は、中世では確定性が高く、眼前性、現場性が含意されたが、現代に至ると確定性が低いと解釈される名詞を伴うこともあり(例(64))、ヲ、ニの差異が明確でない。両者の接近した例が増えたことで、それぞれの特徴がより見えにくくなっている。

6. おわりに

本章ではオソ(レ)ルの格表示について、中世和漢混交文における様相を共時的に考察し、その後、近世以降現代に至るまでの変遷を追った。中世和漢混交文においては、ヲ／ニ格名詞(句)の把握における確定性が、格形式と関係することを中心に示した。考察の結果、以下の三点が認められた。

- ① ヲ／ニ格名詞が節をなす場合、ヲ格では補文節で未実現の事態を表す。ニ格では関係節でモノ・ヒトを表す。
- ② ①以外の名詞では、ヲ格名詞は未実現の事態や未だ直面していないモノであるか、個

別事象の描写ではない例がほとんどを占める。ニ格では名詞が眼前のモノであるか、個別事象の描写例が大半である。

- ③ ①②のいずれもニ格例において対象把握の確定性が高いことを示す。またヲ格例では確定性が低い傾向にあることを示す。

ヲ／ニ格で重なる名詞には格形式による違いが見られない語も存在するものの、上記三点のようにヲ、ニの差が認められる。感情の指向先は感情主にとって確かなはずであるが、ヲ／ニ格名詞の確からしさには差がある。～ヲオソルは感情を抱く時点を基準とした際の未実現事態でも補語としてとることができ、感情を抱く時点で実現していない事態は確定性が低いと言える。これが、ヲ格例では特に節の場合に顕著に表れる。ニ格例では感情を抱く時点において対象を存在するものとし、確定性が高い。このように構文、補語の意味の異なりがヲ／ニ格と相関することが明らかとなった。

ヲ格名詞が節をなす場合に、確定性の高い事態を表す例が得られるのは現代に至ってからである。しかし現代語でも節の場合は、ほぼ未実現事態が占め、それ以外の名詞も未実現を含意するものが多い。一方で現代語でのヲ格は、中世ではニ格例に見られたような確定性の高い名詞もとることができ、分担する領域が比較的広がっている。中世には一文内に感情の指向先や誘因が明示されない例が多い一方で、近代以降、全体的傾向としてヲ格を伴う例の割合が高くなっている。オソレルはヲ格との結びつきをより強めたということである。中世から現代までの変遷を記述するには資料に偏りがあり、年代の間隔が埋められていないが、およその傾向は把握できたと考える²⁰。現代語ではニ格例が少なく、差異が見えにくかったが、歴史的考察から得られた観点から見ることで、選択要因の傾向をつかむことができた。

本章では、なぜヲ、ニの対立が確定性に関係するのかという根本的な問題を解決できていない。しかし、ヲ格表示によって名詞を補語として明示することで、未実現事態に代表されるような、即時的な感情を表す際のオソルの対象として捉えにくいものも対象とし得たのではないかと推測する。高山道代(2005)において古代語のヲ格表示は、働きかけの成立に抵抗のある対象の表示を担い、心理動詞に多いとする。古代語の共時態において、ヲ格が「対格らしくない名詞を対格の構造に組み込む」(p.190)機能を有するとの指摘は、古代語に関する論考であるものの、中世共時態のオソルにおける本章の見通しと軌を一にする。この問題を解決するためにも、補語を伴わない例、引用のト共起例も含めて考察する必要がある。またオソルと同様に未実現の事態をとる「焦る」などのタイプの感情動詞との共通点・相違点を検討することを今後の課題としたい。

²⁰ 3.3節で述べたような感情形容詞オソロシイとの関係の中世軍記物以外にも調査範囲を広げて考察する必要があり、またコワイとの関係も考慮しなければならない。

第6章 調査資料・用例出典 *は日本古典文学大系(岩波書店)、**は新日本古典文学大系(岩波書店)

【中世】小泉弘・高橋伸行(1980)『諸本対照三寶繪集成』笠間書院, 馬淵和夫監修(1985)『三宝絵詞自立語索引』笠間書院／『大鏡』*／『今昔物語集』**, 日本古典文学全集『今昔物語④』小学館／築島裕監修・月本直子・月本雅幸編(2003)『宮内庁書陵部蔵本寶物集総索引』汲古書院／深井一郎編(1980)『慶長十年古活字本沙石集総索引 索引編・影印編』勉誠社／『古事談・続古事談』**, 有賀嘉寿子編(2009)『古事談語彙索引』笠間書院／『方丈記』*, 青木伶子編(1965)『広本・略本方丈記総索引』武蔵野書院／江口正弘(1979)『海道記の研究 本文篇研究編』笠間書院, 江口正弘(1979)『海道記: 語彙及び漢字索引』笠間書院／『宇治拾遺物語』*, 境田四郎監修・増田繁夫・長野照子編(1975)『宇治拾遺物語総索引』清文堂／泉基博編(1982)『十訓抄本文と索引』笠間書院／『古今著聞集』*, 有賀嘉寿子編(2002)『古今著聞集総索引』笠間書院／山田巖・木村晟編(1986)『歎異抄本文と索引』新典社／『保元物語・平治物語』*, 坂詰力治・見野久幸編(1979)『平治物語総索引』, 同編(1981)『保元物語総索引』武蔵野書院／『平家物語』*, 金田一春彦・清水功・近藤政美編『平家物語総索引』(1973)学習研究社／西端幸雄・志甫由紀恵編(1997)『土井本太平記本文及び語彙索引』勉誠社／『義経記』*, 大塚光信・天田比呂志(1982)『義経記文節索引』清文堂／『曾我物語』*, 大野晋・武藤宏子編(1979)『曾我物語総索引』至文堂／

岡見正雄・大塚光信編(1971)『抄物資料集成第 史記抄』『同 毛詩抄・蒙求抄』清文堂／

江口正弘(1986)『天草版平家物語 対照本文及び総索引 索引編』明治書院／近藤政美(1980)『ローマ字本 コンテムツス・ムンヂ総索引』勉誠社／豊島正之(1987)『ぎやどぺかどる本文・索引』清文堂

【中古から中世(訓点資料)】「東大寺諷誦文稿」「知恩院蔵本大唐三蔵玄奘法師表啓古点」中田祝夫(1969)『東大寺諷誦文稿の国語學的研究』風間書房, 築島裕編(2001)『東大寺諷誦文稿総索引』汲古書院／春日政治(1969)『西大寺本金光明最勝王經古点の国語學的研究』勉誠社／「天理大学図書館・国立京都博物館蔵南海寄帰内法伝古点」大坪併治(1968)『訓点資料の研究』風間書房／太田次男・小林芳規(1982)『神田本白氏文集の研究』勉誠社／石塚晴通・築島裕(1980)『図書寮本日本書紀 研究篇・本文篇・索引篇』美季出版社／中田祝夫(1958)『古点本の国語學的研究 譯文編』講談社／小林芳規(1958)「西大寺本不空羅索神呪心經寛徳点の研究一釈文と索引一」『国語学』33／「高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏」「高山寺蔵本論語古点清原本・中原本」「高山寺蔵本莊子古点甲卷・乙卷」「高山寺本史記古点」高山寺典籍文書総合調査団編(1980・1984・1986)『高山寺古訓點資料』第一～三, 東京大学出版会／築島裕編(2004)『高野山西南院蔵本 和泉往来総索引』汲古書院／築島裕監修・杉谷正敏・丹治芳男編(1995)『醍醐寺蔵本遊仙窟総索引』汲古書院／築島裕(1965・1966)『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語學的研究 譯文編・索引編』東京大学出版

【近世】北原保雄編(1973)『きのふはけふの物語研究及び総索引』笠間書院／岩淵匡他編『醒睡笑 静嘉堂文庫蔵』索引編(1998)本文篇[改訂版](2000)笠間書院／近世文学総索引編纂委員会編(1986)『近世文学総索引 近松門左衛門』第1・3・5巻, 教育社／近世文学総索引編纂委員会編(1986・1990)『近世文学総索引 井原西鶴』第1・5～10巻, 教育社／『浮世風呂』*／『春色梅兒誉美』*／『椿説弓張月』*／『近代女性雑誌コーパス』(国立国語研究所)

【近現代】『CD-ROM 版新潮文庫 明治の文豪』(1997)新潮社／『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』(1995)新潮社

第7章 結び

1. 結論

1.1. 第6章までのまとめ

本論文では、感情動詞のうち、補語表示のヲ／ニ格交替を許容する感情動詞の格選択要因を明らかにするために、現代共時態の様相、通時的変遷を記述・考察した。

現代語の感情動詞に関して、そもそもヲ／ニ格感情動詞にはどのような語があるのかを記述し、ヲ格感情動詞、ニ格感情動詞とともにその文法的特徴、構文的特徴を記述した。感情動詞が動詞の体系内にどのように位置づけられるかは、従来、特にアスペクト的特徴に関して考察されてきた。感情動詞すべてが一括りにできるものではないことは先行研究でも認識されていたようだが、例えば感情動詞は動きを表す動詞である、活動動詞である等、全体の(主要な語の)性質を指摘することを目的としており、振る舞いの違いがあることに焦点を当てては来なかった¹。本論文では、各語を受身化・使役化の可否、アスペクトの特徴、表出用法の有無、格形式との共起率から、感情動詞の多様性と、同じ格体制をもつ動詞に共通する傾向を示した。ある程度の共通性をもつものの、感情動詞を一括りにするのではなく各語を観察することの必要性が示せたものと考ええる。

ヲ格感情動詞は、ヲ格をとる他の動作動詞により近い動詞が多いことが明らかとなった。一方でニ格感情動詞には先行研究の指摘通り、直接受身化が可能なニ格感情動詞があり、このような動詞はヲ格感情動詞と似た振る舞いをする。ヲ／ニ格感情動詞はヲ格例に偏る語はヲ格感情動詞に、ニ格例に偏る語はニ格感情動詞に似た振る舞いをするが、ヲ格感情動詞ともニ格感情動詞とも共通する特徴を有する傾向にある。格体制と文法的振る舞いが一致する傾向がある一方で、反対の見方をすると、ヲ格例に偏っていてもニ格感情動詞に通じる部分も有するということであり、このことがヲ／ニ格交替を許容する要因の一つであると考ええる。

表出用法はヲ格感情動詞には見られなかった。表出用法は補語名詞(句)を伴わない一語文が基本であること、表出用法をもつ動詞の一部には評価的用法が見られることから、語の意味や評価的用法の有無によって程度の差はあるものの、表出用法は形容詞に近い働きをすると考えられる。表出用法をもつヲ／ニ格感情動詞とニ格感情動詞は、ヲ格をとる動作動詞(典型的な他動詞)からヲ格感情動詞よりも離れた所に位置づけられよう。

「焦る」や「驚く」などは、補語名詞(句)の時間的性質がヲ格、ニ格で異なる。「焦る」では同じ事態性名詞をとっても、ヲ格であればコトとして解釈され、未成立の事態を意味するが、ニ格では既実現事態として、あるいはモノとしての解釈になる。また「驚く」などではヲ格名詞(句)が事態内部に展開がある、もしくは恒常的性質など、現時点だけの実現ではない事態と捉えられる事態である一方で、ニ格名詞(句)は一時的な状態など、事態内部に展開や幅がないと見なされるものであった。

¹ 山岡(2000)を除く。ただし山岡(2000)の分類の視点は本論文と完全に一致するわけではない(第3章)。

また、事例研究として第4章で「喜ぶ」、第5章で「頼る」、第6章で「恐(れ)る」を考察した。中世和漢混交文における「恐(れ)る」ではヲ格例が未実現事態を基本とする非確定的事態を、ニ格例が眼前のモノや既実現事態といった確定的事態をとる。またヲ格例は非個別的事象を描く例も見られた。「恐(れ)る」は、近代以降、ヲ格例の割合が高まり、ヲ格、ニ格、無助詞の補語を伴わない例の割合は低くなった。この現象はヲ格感情動詞ではヲ格名詞(句)を伴わない例の割合が低いという全体的な傾向と一致するものである。現代語でもヲ格例が節をとり、既実現事態への進出が認められるものの、確定性の低い事態をとる。節以外の場合は確定性の高低に偏りはない。ニ格例では現代に至ると確定性が低いと解釈される名詞を伴うこともあり、ヲ／ニ格例が接近し、差異が見えにくくなっていると言える。

現代語「喜ぶ」では、ヲ格が節や事態性名詞をとりやすく、事態への指向性が見られたのに対し、ニ格では抽象名詞をとりやすく、明示的に事態を表さない名詞(句)をとった。また、ヲ／ニ格名詞(句)が事態を表す場合、ヲ格例では既実現事態や継続事態に加え、未実現事態と、一般論などの非個別的事態を表す名詞(句)の例が得られるが、ニ格例では未実現事態と非個別的な事態を表す名詞(句)が現れない。「驚く」など、ヲ格名詞(句)が表す事態に幅や内的展開のある語があったが、ヲ格名詞(句)が感情生起の場のみには縛られないという点で、一般論や非個別的事態をとることができることと通じる。～ヲヨロコブは説明的な描写に用いられ、ヲ格名詞(句)は概念的にまとめあげられたものとして捉えられる。

現代語「頼る」では、ヲ格名詞(句)は、依拠によって行われたり引き起こされたりする事態と同一場面に存在しなくて良く、事態の成立・達成後も依拠し続ける場合や心理的依拠の側面が大きい場合も許容される。ニ格名詞(句)は依拠と同一場に存在し、手段または基盤としての利用を想定される。またヲ格名詞(句)はヒト名詞類(主に有情物)に偏る。これには、ヒト名詞類が資金、衣食住など多面的に依拠の対象となり得ること、多面的に依拠するため依拠(依拠主体)と同場面にない場合も無理なく成立することが関係するだろう。近世から現代にかけての変遷過程で、タヨルの移動の意がほぼ消失するにしたがって、ニ格が道具的な具体名詞や、抽象名詞をとるようになった。これとほぼ同時期に、ニ格が担っていた移動との関連がある領域をヲ格例が引き受け、ヲ格例は移動動詞を分出する形で後続節に示すようになった可能性がある。

1.2. ヲ格、ニ格の意味機能

以上の事例研究から得られた結果をもとに、以下では各語の現代語における様相に限定し、ヲ格例、ニ格例の特徴を示す。ヲ格で示される事態は、未実現であったり、非確定的であったりし、ヲ格名詞(句)が感情の生起とは離れた時点、地点にあり得る。また一般論としての描写も可能であった。「頼る」以外ではコト節、ノ節または事態性名詞をとり、事態を事態として示す形でとることも特徴的である。これらは、ヲ格名詞(句)が即物的ではない、一度概念化を経たものとして表されていることを意味すると考える。

対照的に、ニ格は既実現事態などの確定性の高い事物をとることや、ニ格名詞(句)が感情

の生起と同場面にあることが多い。事態よりもモノをとりやすく、即物的な物をとると言って良いだろう²。感情生起の場と切り離しにくいということが、原因、手段、対象などの「意味役割」を担い得ることにつながる。

ヲ、ニは基本的に上述のような機能をもちつつ、それぞれがどこまでを担うか、どの領域を共有するかは語によって異なる。ヲ格が未実現事態にほぼ特化することもあれば、事態の実現が関与的なのはニ格選択においてであることもあるなど、ヲ格、ニ格の関係は固定的ではない。しかし相対的にヲ格はニ格よりも概念化を経た、より複雑な事物を補語として文に取り込む形式だと考えられる。

ヲ格が文法関係を表す格形式(文法格)であることは、広く認められていると思われるが、ヲ格は高低があるにしろ何かしらの他動性に対応する形式だと捉えられ、他動性の文脈で扱われることが多い。例えば角田(1991)は「～が…を」という形式は他動の形式面での原型であると述べ、ヤコブセン(1989)は一見他動詞文ではない文においても、ヲ格名詞は動作主の支配対象を示す点で共通するとする。ヲ格が表す意味的側面(ヲ格名詞が表す意味の共通点と言う方が正確であろうか³)に関しては、影響が全体的である(Sugamoto1982、杉本 1986、影山 2011)、被影響性、意図性がある(影山 2011)などとされる。

しかし本論文で得られた考察結果は、少なくともヲ／ニ格感情動詞に関しては、より抽象的な段階における、目的語を表示する構造格であるということから導出されるのではない。城田(1993)はヲ格について、直接補語表示を一次機能とし、二次機能として道筋・起点・経路・持続時間を表し、これは意味論的意味を表すとする。反対にニ格の一次機能は意味論的意味を表す機能であり、二次機能として対象を表す機能をもつとする。

本論文では、ヲ格は当該動詞にとって目的語らしさの低い語であっても、補語として文に取り込むことができる形式だと考える。動詞によって「目的語(対象)らしさが低い」ということが、節などの構文的な問題であったり、事態を表すなどの意味的な問題であったりするのだろう。さらにヲ格が一度概念化を経たものとして名詞(句)を取り入れるため、全体的に捉えることができるのではない。言語化すること自体、何らかの概念化を経ていると言えるが、ここで言う概念化はそれとは異なるレベルで、当該名詞(句)の把握の仕方に関わるものである。

ニ格に関しては、ニ格が表す意味関係(意味役割)の多様さが注目され、どのような意味関係を表し得るかに焦点が当たることが多い。多様性を認めた上で、ニ格は一つの基本的な意味をもつとする立場、一つの意味には収斂されないとする立場、いくつかの基本的な意味機能に分ける立場がある。杉本(1986)は間接目的語や目標、与格主語に「場所性」という共通点を認めようとする。城田(1993)では文法格(構造格)と意味格の両機能をもつとされ、和氣(1996)が示すように、多様な意味関係を表すように見えるのは、動詞・名詞との関係に

² 田中(1995b)が『今昔物語集』におけるオソルのヲ格例とニ格例の差異について指摘したことと一致する。

³ 特に影山(2011)はヲ自体が特定の意味をもつのではないと述べる。

において解釈された結果であって、二格は構造格であるとの見方もある⁴。これに従えば、文法関係を示すヲ格と共通する性質があると言える。このような近接性をもち、一方で名詞、述語との関係に規定されるという意味的な側面があるために、ヲ格が「対象」になりにくいものを取り込むことと対照的に、動詞との関係に収まる名詞(句)しかとらないと考えられる。

感情動詞との関係においては、二格は即物的な事物、もしくは既にある事物をとり、感情生起の場と切り離さない形で表現に用いられる。感情動詞の二格が「原因」と解釈されやすいのは、このような性質があるためであり、その逆ではない。これは相対的に概念化を経た把握をしないということであり、典型的には眼前のモノそのものを捉えていることになる。そのために、事態が長期に及ぶ解釈ができない、未実現事態をとることができない、ヲ格とは対照的に全体を把握することができないなどの現象が見られると考える。

また、ヲ／二格感情動詞にヲ、ニの両機能を必要とする素地があること、つまり動詞の意味がそれらを要求することで、上記のようなヲ、ニそれぞれに異なる意味特徴が浮かび上がるのであろう。寺村(1982)では、ヲ格感情動詞が持続的で、純粹に感情の状態を描く動詞、二格感情動詞が一時的で、感情が外面に現れるとされる。ヲ／二格感情動詞においては、ヲ格名詞(句)は感情生起の場と離れていても良いことが持続的な感情につながると考えることもできる。二格名詞(句)は感情生起の場と切り離しにくいとすれば、相対的に時間が短いと考えられ、一時的な感情と親和性が高い。ただヲ／二格感情動詞の格選択においては、ヲ／二格の機能と持続的／一時的という動詞の意味特徴の関わり合い、また、どちらが優先されるかに考察の余地がある。

2. 「憧れる」から見る課題

2節では、残された課題の一部を「憧れる」の様相を例に述べる。本論文では現代語「憧れる」をヲ／二格感情動詞に分類したが、話者によっては(1)のヲ格を許容しない。

- (1) パリ {に／を} 憧れる。

実例においては、二格をとることが多く、筆者自身も「～を憧れる」を使用するわけではない。しかしある程度許容でき、少なくない数の実例も得られる。

「中納言」によって BCCWJ の書籍の用例を検索し、「憧れる」の用例を採取した結果、全 521 例のうち、二格例が 337 例、ヲ格例が 15 例得られた⁵。『新潮』でも『朝日新聞』でもヲ格例が得られることから、単なる誤用とは言えない。

本論文で採用した事態の未実現／既実現の観点から見ると、ヲ格例には既実現事態をと

⁴ 本論文で対象とする二格について。このような二格と副詞的成分の表示、文法的ヴォイスに用いられる二格の三種を設定する。

⁵ ほかにブログ、Yahoo!知恵袋、韻文のジャンルからヲ格例が得られる。

る例が存しない。

(2)の「進化した存在になること」は未実現事態を、(3)の「隠遁」は「隠遁という行為」、つまり事態そのものを指し、実現した事態ではない。作例(4)からもわかるように、ヲ格は既実現事態をとらない。

- (2) その短い人生の中で、私は私であることを否定して、もっとすばらしい進化した存在になることを憧れることができない。この私ではダメなのだろうか。

(田口ランディ『ほつれとむすぼれ』)

- (3) ひとのことは言えないが、私の部屋などは乱脈をきわめている。本と資料とCDで占領され、圧迫されている。美的でも簡素でもない。この有様で隠遁を憧れるのは間違いなのかもしれない、これが長明からのメッセージだという気がするほどだ。

(高橋英夫『今日も、本さがし』)

- (4) 福原選手がメダルを取ったの {に／*を} 憧れて、卓球を始めた。

ニ格例には未実現事態、既実現事態、双方をとることができ、(5)のような「なりたいた願う」意を表す例も得られる。この場合、(6)からわかるようにヲ格では許容されない。

- (5) (筆者注：プロの生存競争が厳しいことを知りながら)(略)子どもたちはプロスポーツ選手に憧れている。若さゆえともいえようが、自己の可能性を不十分な根拠や不確実な展望のなかで確かめ試そうとすることの持つ危うさや、明と暗の分岐点がここから始まっている。

(中村敏雄『スポーツの見方を変える』)

- (6) 花子は小さい頃からピアニスト {に／*を} 憧れていたが、ようやく夢がかなった。

職業・立場や属性を目標とする、憧憬の的とする意を表す用法は、「～に憧れる」のみが有すると考えられる。ヲ格例に例外となるように思われる一例が存在するが(例(7))、(8)のようなある人物にとっての特定の人物を指すとも解釈できる。一方で(9)の「金髪のこと」のように、名詞(句)が具体的な憧憬の的である例も存する。

- (7) 若い女給さんが、マダムをあこがれるように、若い編集者は編集長をめざす。

(扇谷正造『夕陽のペンマン』)

- (8) それでも、迷わない—まっすぐ突き進む式根は、公の持っていない、持ちたいと願う、強さを持っていた。だから、三歳年下のこの青年を憧れずにはいられないのだ。

(佐屋野一美『ラインに乗って会いに来て』)

- (9) わたしたちは生まれたときから美しい女はヨーロッパ系の顔立ちだと感覚的に羨けられてきているのだ。流れるような金髪のことを、わたしだって子供のころに憧れたことがあった。

(五木寛之『晴れた日には鏡をわすれて』)

本論文の事例研究においては、ヲ格が概念化を経たものとして名詞(句)を取り込む、或いは名詞(句)が取り込みにくいものであっても文に取り込む形式だと考えたが、「懂れる」に関しては、ニ格例との差異をこのような点には求め難いように思われ、今後の検討が必要となる。またヲ格例は従属節の例が 15 例中 12 例で用例のほとんどを占める。これが何を意味するのかの検討は稿を改めるが、第 2 章でも述べたように、構文環境がヲ／ニ格選択に関与する可能性がある。

3. 今後の課題

最後に、残された課題を挙げる。現代語に関しては、本論文で示したヲ格、ニ格の性質がどの程度一般化できるのかを検討すべきである。また、二様の格体制を許容する感情動詞と許容しない感情動詞の違いについては検討することができなかった。本論文で得られたそれぞれの格体制ごとの特徴と合わせて今後考察したい。

これに関連して、第 4 章では「喜ぶ」について、第 3 章における感情動詞全般に対するテストとは若干異なるテスト方法を用いて、アスペクト的特徴をより詳細に記述したが、感情動詞全般に関しても「喜ぶ」に準じたテストを行なう必要があるだろう。また特に「苦む」は第 2 章で確認した文法的テストにおいて他の語と異なる振る舞いをする事が多く、実例に基づいて詳細に考察するつもりである。

本論文では格体制にバリエーションが見られる動詞として感情動詞を扱ってきたが、漢語サ変動詞にもヲ／ニ格を許容する動詞が存在する。例えば「反対する」「賛成する」はどちらもニ格例が多数を占めるが、ヲ格例も確認される(例(10)(11))。

- (10) しばらく家に置いて欲しいとワケありの様子だった彼女はその時、王宮入りを反対
する者たちに命を狙われていた。 (響野夏菜『東京 S 黄尾探偵団』2001)
- (11) 亜以が広志に好意を寄せられてるってことに鈍感で、勉強を教えてもらうことを賛
成したのもこいつなのだ。 (唯川恵『少しだけラブストーリー』1986)

漢語サ変動詞は自他両用のものがあること(「領土が拡大する／領土を拡大する」)、自他の誤用が起こりやすいこと、通時的に格表示の変遷があること等、関連する問題も視野に入れつつ、ヲ／ニ格交替の事例として考察すべき現象であろう。

ヲ、ニ以外の格交替に目を向けると、「壁にペンキを塗る」「ペンキで壁を塗る」のような壁塗り代換構文がある。川野(2009)は壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞との違いについて、動詞の範疇的語義に階層を認めることで、従来の位置変化、状態変化という範疇では捉えられなかった違いは、下位範疇の違いによると考えられるとする。感情動詞の格交替についても範疇的語義を考えることが有効な可能性がある。

ヲ、ニが共起する点で、三項動詞も関連する。「太郎が花子に英語を教えている」の場合、「太郎が英語を教えている」ではニ格名詞(句)が省略されていると考えることもできるが、

「太郎の担当教科が英語である」という意味を表す場合、ニ格名詞(句)が現れることはないため、省略ではないと考えることもできる。「太郎が花子を教えている」は、教える内容が道順などではなく、勉強や芸事など指導の意味でなければならない。

このように動詞の表す意味と格表示が連動することは、ヲ／ニ格感情動詞や三項動詞ではない、普通、格体制が固定していると考えられている動詞でも起こる。例えば、「いる」は「公園に猫がいる」のように「～に…がいる」の形で用いられるが、「ユニコーンがいる」のような、ある場所への所在ではなく、世界への存在・非存在を表す場合は「〈場所〉に」を用いることができず、「…がいる」という格体制になる。格交替の問題は、このような動詞全体に関する格体制のバリエーションの問題として位置づけることもできる。複数の格体制を許容するかどうかは、動詞の意味の幅やその近接度合と、ヲ、ニの意味機能との相互作用によって決まると考えられる。それがどの程度の、どのような種類の幅なのか、さらにヲ、ニの機能とどのように相互作用を及ぼしているのかについて考察を要する。

また、感情動詞、感情形容詞には人称制限が存在し、従来、如何に適用されるかが論点となってきた。感情動詞が一人称をとりにくいとされることに関して、田中(1998)は今昔物語集において、安本(2009)は中古和文において人称の問題を扱う以外は、現代共通語における考察がほとんどである。ここに地域方言もしくは集団方言と思われる表現を紹介して、新たな視点の可能性を示しておく。島根県出雲市では共通語では(A)「～していただけると幸甚(幸い)です」というところを、(B)「～していただけると喜びます」と言うようである。これは口頭表現ではなく、(A)と同様に普通、比較的改まった場面での文章表現に用いられるようである。この表現は島根県の他地域でも用いられるようだが、どの地域に広がるものなのか、あるいは地域ではなく特定の集団内の表現なのかは調査しなければならないが、共通語にはない「喜ぶ」の用法である。「(～してくれると)嬉しい」や「(～されると)困ります」などと同様の用法をもつと言え、人称の問題や表出用法の問題にも関係してくる。

ヲ／ニ格表示の通時的変遷のパターンとして、一方の格表示から他方の格表示へ、一方の格表示のみから両用(ヲ／ニ)へ、両用(ヲ／ニ)から一方の格表示のみへ、という変化があり得、このうち一方の格表示のみから両用(ヲ／ニ)へ変化した語として「頼る」を考察したが、現代語ではヲ／ニ格感情動詞ではないが、歴史的に見ると二様の格体制を許容していた動詞に関しても考察を行ないたい。

感情動詞以外にも「背く」(信太 1981)など格形式が現代語と異なる動詞の存在が知られる。動詞の意味や格形式の機能の変遷を考慮に入れて考察することで、新たな知見が得られる可能性がある。積み残した問題も多く、今後の課題とする。

第7章 調査資料・用例出典

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言), 国立国語研究所,
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>

参考文献

- 秋元美晴(2010)「コーパスに基づいた「触る」の分析：他動性との関連から」『惠泉女学園大学紀要』22
- 浅山佳郎(2000)「感情動詞の補足語の格と感情形容詞」『神奈川大学言語研究』22, 神奈川大学言語研究センター
- 阿部泰明(1994)「連体修飾節の諸問題」田窪行則編『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版
- 天野みどり(2011)『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院
- 庵功雄(1994)「定性に関する一考察—一定情報という概念について—」『現代日本語研究』1, 大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座
- 石垣謙二(1955)『助詞の歴史的研究』岩波書店
- 岩下裕一(1993)「頼む」と「に」格」近代語学会編『近代語研究 第九集』武蔵野書院
- (1979)「修飾格助詞と動詞語義の相関について」『田邊博士古稀記念 国語助詞助動詞論叢』桜楓社
- 内丸裕佳子(2006)「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—」『日本語の研究』2(1), 日本語学会
- 大坪併治(1968)『訓点資料の研究』風間書房
- 岡崎正継(1973)「御導師遅く参りければ」の解釈をめぐる」『今泉博士古稀記念国語学論叢』桜楓社
- 尾上圭介(1986)「感嘆文と希求・命令文—喚体・述体概念の有効性—」松村明教授古稀記念会編『松村明教授古稀記念 国語研究論集』明治書院(尾上圭介(2001)『文法と意味Ⅰ』くろしお出版所収)
- (1998)「一語文の用法—”イマ・ココ”を離れない文の検討のために—」東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会編『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院(尾上圭介(2001)『文法と意味Ⅰ』くろしお出版 所収)
- 尾上圭介・坪井栄治郎(1997)「国語学と認知言語学の対話Ⅱ—モダリティをめぐる」『言語』26(13), 大修館書店(尾上圭介(2001)『文法と意味Ⅰ』くろしお出版 所収)
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- (1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 影山太郎編(2001)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- (2011)『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店
- 春日政治(1969)『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』勉誠社
- 金澤裕之(1998)『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 鎌田修(2000)『日本語の引用』ひつじ書房
- 川野靖子(2009)「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞—交替の可否を決定する意味階層の存在—」『日本語の研究』5(4), 日本語学会
- 川端善明(1958)「形容詞文」『国語国文』27(12), 京都帝国大学国文学会
- 金水敏(1986)「名詞の指示について」築島裕博士還暦記念会編『築島裕博士還暦記念 国語学論集』明治書院
- (1989)「報告」についての覚書」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版

- (1994)「連体修飾の「～タ」について」田窪行則編『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版
- (2000)「1 時の表現」『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』(金水敏・工藤真由美・沼田善子) 岩波書店
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト:現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- (2012)「時間限定性という観点が提起するもの」影山太郎編『属性叙述の世界』くろしお出版
- 工藤力男(1978)「格助詞と動詞との相関についての通時的考察」『岐阜大学教育学研究報告人文科学』26
- 言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論 資料編』むぎ書房
- 国立国語研究所(2004)『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書
- 小竹直子(2007)「日本語の感情表現における動詞と形容詞の対立—形態的に対応する動詞と形容詞の比較に焦点を当てて—」『電子情報通信学会技術研究報告.TL, 言語と思考』107(138), 一般社団法人電子情報通信学会
- 小竹直子・酒井弘(2011)「心理動詞による属性文の意味成立条件」『日本語文法』11(1)
- 此島正年(1966)『国語助詞の研究 助詞史の素描』桜楓社
- (1979)『国語助動詞の研究 体系と歴史 増訂版』桜楓社
- 近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 佐治圭三(1993)「「の」の本質—「こと」「もの」との対比から—」『日本語学』12(10), 明治書院
- 定延利之(2004)「ムードの「た」の過去性」『国際文化学研究: 神戸大学国際文化学部紀要』21
- (2006)「動態表現における体験と知識」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新天地 1 形態・叙述内容編』くろしお出版
- 佐藤響子(1997)「二格名詞句をとる心理動詞」『横浜市立大学論叢 人文科学系列』48(2・3)横浜市立大学学術研究会
- 澤田淳(2008)「「変化型」アスペクトの「テクル」「テイク」と時間性—タ形「テキタ」と「テイッタ」の非対称的な分布に注目して—」『日本語の研究』4(4), 日本語学会
- 信太知子(1981)「「～をそむく」から「～にそむく」へ—動作の対象を示す格表示の交替—」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 二』和泉書院
- 清水泰行(2007)「心理動詞の格と意味役割の対応・ずれ—「引用構文」における名詞句と引用節の意味関係から—」『日本文芸研究』58(4), 関西学院大学日本文学会
- 城田俊(1993)「文法格と副詞格」仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- 菅井三実(2004)「格の体系的意味分析と分節機能」山梨正明他編『認知言語学論考』No.4, ひつじ書房
- 杉岡洋子(1992)「心理述語についての考察」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』24, 慶應義塾大学言語文化研究所
- 杉本武(1986)「格助詞—「が」「を」「に」と文法関係—」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- (1991)「二格をとる自動詞—準他動詞と受動詞—」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 鈴木泰(1992)『古代日本語動詞のテンス・アスペクト』ひつじ書房

- 鈴木英夫(2003)「明治の表現—格助詞「に」を中心に—」『日本語学』22(13), 明治書院
- 関一雄(1993)『平安時代和文語の研究』笠間書院
- 高橋太郎(1994)『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』むぎ書房
- 高山道代(2005)「古代日本語のヲ格があらわす対格表示の機能について—ハダカ格との対照から—」『国文学解釈と鑑賞』70(7)
- 高山善行(2005)「助動詞「む」の連体用法について」『日本語の研究』1(4)
- 田窪行則(2010)『日本語の構造 推論と知識管理』くろしお出版
- 田中牧郎(1990)「「おそる」と「おづ」—平安・鎌倉時代を中心に—」『国語学研究』30, 東北大学
- (1995a)「今昔物語のオソロシとオソルについて(一)—感情表現における形容詞と動詞—」『学苑』661, 昭和女子大学近代文化研究所
- (1995b)「今昔物語のオソロシとオソルについて(二)—感情表現における形容詞と動詞—」『学苑』662, 昭和女子大学近代文化研究所
- (1998)「今昔物語集の情意述語文と文体」『国語学』194, 国語学会
- 築島裕(1967)『興福寺大本慈悲寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 研究編』東京大学出版
- (1969)『平安時代語新論』東京大学出版会
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 角田三枝(1999)「感情表現の連体修飾におけるボイス的対立」『アジア・アフリカ文法研究』28, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 角田三枝・佐々木冠・塩谷亨編(2007)『他動性の通言語的研究』くろしお出版
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 土井忠生・森田武・長南実編(1980)『邦訳 日葡辞書』岩波書店
- 外崎淑子(2005)『日本語述語の統語構造と語形成 意味役割の表示と状態述語、心理述語、使役構文からの提言』ひつじ書房
- トルヒナ アンナ(2014)「いわゆる「再帰構文」とその限界—他動詞のテイル形が結果残存を表すときとは—」『日本語文法』14(1), くろしお出版
- 仁科明(2006)「「恒常」と「一般」—日本語条件表現における—」『国際関係・比較文化研究』4(2), 静岡県立大学
- (2014)「「無色性」と「無標性」—万葉集運動動詞の基本形終止, 再考—」『日本語文法』14(2), くろしお出版
- 西光義弘(2010)「第8章 他動性は連続体か?」西光義弘・プラシヤント・パルデシ編『自動詞・他動詞の対照』くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- (2012)「状態をめぐって」影山太郎編『属性叙述の世界』くろしお出版
- 仁田義雄編(1993)『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2007)『現代日本語文法3 アスペクト; テンス; 肯否』くろしお出版
- 丹羽哲也(2004)「名詞句の定・不定と「存否の題目語」」『国語学』55(2), 国語学会

- 野田春美(1995)「ノとコト」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版
- (2002)「第8章 終助詞の機能」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『モダリティ』くろしお出版
- 野田尚史(1991)「日本語の受動化と使役化の対称性」『文藝言語研究. 言語篇』19, 筑波大学
- 馬場典子(2001a)「「怒りを表す動詞(句)」の分類とその特徴」『日本語文法』1(1), くろしお出版
- (2001b)「感情動詞のテンス・アスペクトについての一考察—怒りを表す動詞(句)の場合—」『言葉と文化』2, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- 堀川智也(1992)「心理動詞のアスペクト」『言語文化部紀要』21, 北海道大学
- 益岡隆志(1997)『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版
- (2007)『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1987)『日本語文法セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版
- 松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』(徳田政信編(1978)勉誠社)
- 松野美海(2010)「ヲ／ニ格両用型感情動詞の諸特徴について」『名古屋大学国語国文』103, 名古屋大学国語国文学会
- (未公刊)「日本語の感情動詞におけるヲ／ニ格選択に見る諸特徴」名古屋大学大学院文学研究科平成22年度修士学位論文
- (2013)「感情動詞オソルのヲ／ニ格選択について—中世和漢混交文を中心に—」『名古屋大学国語国文』107, 名古屋大学国語国文学会
- 松村明編(1969)『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- 三原健一(2000)「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8, 国立国語研究所
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 宮崎和人(2002)「終助詞「ネ」と「ナ」」『阪大日本語研究』14, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 宮地敦子(1979)『身心語彙の史的研究』明治書院
- 村上佳恵(2010)「感情動詞の補語についての一考察—「ニ」と「デ」について—」『学習院大学国語国文学会誌』53
- 森田良行(2007)『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』
- (1989)認識のムードとその周辺仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- (1997)「「独り言」をめぐって—思考の言語と伝達の言語—」川端善明・仁田義雄編『日本語文法体系と方法』ひつじ書房
- ヤコブセン, ウェスリー.M.(1989)「他動性とプロトタイプ論」久野暉・柴谷方良編『日本語学の新展開』くろしお出版
- 安本真弓(2009)「中古における感情形容詞と感情動詞の対応とその対応要因—中古前期・中期の和文作品を対象として—」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』28
- 山岡政紀(1998)「感情表出動詞文の分類と語彙」『日本語日本文化』8, 創価大学日本語日本文学会
- (1999)「感情表出動詞の文法的特徴」『日本語日本文化』9, 創価大学日本語日本文学会
- (2000)『日本語の述語と文機能』くろしお出版

- (2002)「感情描写動詞の語彙と文法的特徴」『日本語日本文化』12, 創価大学日本語日文学会
- 山川太(2004)「日本語における心理動詞の格表示について」『日本語・日本文化』30, 大阪大学
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』寶文館
- (1914)『平家物語の語法』上下(寶文館 1954)
- 湯澤幸吉郎(1936)『徳川時代言語の研究』刀江書院
- (1981)『室町時代言語の研究』風間書房
- 吉永尚(1998)「心理動詞の意味特性による分類と人称性」『園田国文』19, 園田学園女子大学
- (2008)『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院
- 和氣愛仁(1996)「「に」の機能」『筑波日本語研究』1
- (2000)「ニ格名詞句の意味解釈を支える構造的原理」『日本語科学』7, 国立国語研究所
- Akita, Kimi(2007) One Experience Viewed in Two Ways: A Viewpoint Approach to the Case Marking Patterns of Japanese Psych-Verbs, 影山太郎編『レキシコンフォーラム』3, ひつじ書房
- BANDO, Michiko (1996) Semantic Properties of -Ni NP and -O NP of Japanese Psych-verbs, 『大阪大学言語文化学』5, 大阪大学言語文化学会
- (1997) Syntactic Properties of Japanese Psych-verb: With Special Reference to YOROKOBU, 『鳴門英語研究』11, 鳴門教育大学
- ENDO, Yoshio, and Zushi, Mihoko (1993) STAGE / INDIVIDUAL - LEVEL PSYCHOLOGICAL PREDICATES, *Argument Structure: Its Syntax and Acquisition*, eds. by Heizo Nakajima, Yukiko Otsu, Kaitakusha, Tokyo
- Hopper, Paul J. and Thompson, Sandra A. (1980) Transitivity in grammar and discourse, *Language*, 56(2)
- J.ロドリゲス原著, 土井忠生訳注(1955)『日本大文典』三省堂
- Malchukov, Andrej(2005) Remarks on deverbalization, *Sprachtypologie und Universalienforschung* 58, Akademie Verlag, Berlin
- Pesetsky, David Michael (1995) *Zero Syntax*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts
- Sugamoto, Nobuko (1982) Transitivity and Objecthood In Japanese, *Studies in Transitivity, Syntax and Semantics* vol.15, eds. by Paul. J. Hopper, Sandra. A. Thompson, Academic Press, New York
- 『日本国語大辞典』第2版(2000-2002)小学館

【初出一覧】

- 第2章2節・第3章 「日本語の感情動詞におけるヲ／ニ格選択に見る諸特徴」(名古屋大学大学院文学研究科 平成22(2010)年度修士学位論文)を基に大幅な加筆・修正を行なった。
- 第5章1節 第13回日本語文法学会(2012年10月28日 於名古屋大学)における口頭発表を基に加筆・修正を行なった。
- 第6章 「感情動詞オソルのヲ／ニ格選択について—中世和漢混交文を中心に—」(『名古屋大学国語国文』107, 名古屋大学国語国文学会, 2013年)に大幅な加筆・修正を行なった。